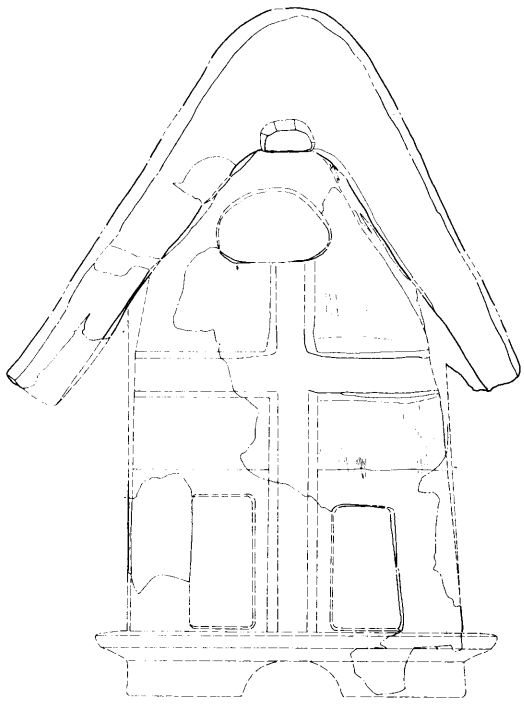
三重県埋蔵文化財調査報告１１５－２

一般国道23号中勢道路（９工区）道路建設事業に伴う

門脇北古墳発掘調査報告



１９９３・３

三重県埋蔵文化財センター

序

伊勢平野のほぼ中央に位置する津市とその周辺は、安濃川、志登茂川などの河川が形成した肥沃な沖積平野が広がっており、古来から多くの遺跡が営まれてきました。特に安濃川の流域には、弥生時代の集落である納所遺跡や450基以上の古墳からなる長谷山古墳群など三重県を代表する遺跡が所在しています。

今回報告する門脇北古墳は、一般国道23号中勢道路建設に先立って調査されたものです。丘陵の先端付近を掘り割って成形された古墳で、墳丘をめぐる埴輪列のほか、多数の形象埴輪をもつことがわかりました。安濃川流域に展開した古墳文化を考えるうえで興味深い資料といえましょう。

門脇北古墳は、現状保存が困難なため記録保存というかたちになりました。もはや門脇北古墳を見ることはできませんが、この報告書が地域の歴史解明のために活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、調査、整理にあたって関係諸機関や地元の方々に多大なご協力をいただきましたことについて心からお礼申し上げます。

平成５年３月

三重県埋蔵文化財センター

所長　久保富子

例　言

1．本書は、平成３～４年度に三重県教育委員会が建設省中部地方建設局から委託を受けて実施した、一般国道23号中勢道路建設予定地内（９工区）に所在する埋蔵文化財発掘調査（整理・報告書作成業務）にかかる報告書（第１～３分冊）のうち、門脇北古墳についての報告書（第２分冊）である。

2．調査にかかる費用は、建設省中部地方建設局の全額負担による。

3．発掘調査は平成元年度に下記の体制で行なった。

調査主体　三重県教育委員会
調査担当　三重県埋蔵文化財センター
主幹兼調査第２課長　山　澤　義　貴
第３係長　浅　生　悦　生（津市教育委員会より派遣）
主事　増　田　安　生・森　川　幸　雄
主事　村　木　一　弥（津市教育委員会より派遣）
臨時調査員　竹　内　英　昭・油　田　秀　紀
調査協力　津市教育委員会
現場作業　社団法人中部建設協会

4．現地調査については、村木・竹内が担当した。

5．整理・報告書作成業務は平成３年から４年の２年度にわたって実施した。体制は下記のとおりである。

〔平成３年度〕
調査第２課長　新　田　　洋
主査兼第３係長　駒　田　利　治
主事　渡　辺　尚　登・近　藤　　健・天　野　秀　昭
主事　村　木　一　弥・山　口　　格（津市教育委員会より派遣）

〔平成４年度〕
調査第２課長　新　田　　洋
主査兼第３係長　駒　田　利　治
主事　本　堂　弘　之・小　菅　文　裕
技師　穂　積　裕　昌
主事　山　口　　格・中　村　光　司（津市教育委員会より派遣）
室内整理員　市　川　嘉　子・太　田　浩　子・小　坂　規　美　子・一　木　八　千　代
森　川　尚　子・駒　田　　泉・畑　　ひ　ろ　子・堀　　さ　や　子
奥　山　晃　代（平成元・３年度を含む）

6．現地調査については、八賀晋氏（三重大学人文学部教授）にご指導とご助言をいただき、形象埴輪については辰巳和弘氏（同志社大学校地学術調査委員会主任）にご教示をいただいた。また、三辻利一氏（奈良教育大学教授）には埴輪の胎土分析結果について玉稿を賜った。このほか、本書作成にあたっては、唐澤至朗氏（群馬県立歴史博

物館学芸員）、三重歴史文化研究会の方々をはじめ、多くの方々のご教示をいただいた。

7．本書の編集は駒田の指導のもとに村木が担当し、遺物写真の撮影については本堂が行なった。執筆者は目次に示した。

8．本文で用いた遺構表示略記号は下記のとおりである。また、挿図の方位はすべて国土座標第Ⅵ系の座標北である。

ＳＤ：溝

9．本書で報告した記録及び出土遺物は三重県埋蔵文化財センターで保管している。

10．本書作成以前に『中勢道路ニュース』№9（1990）や『一般国道23号中勢道路発掘調査概報Ⅱ』（1990）で中間的な報告を行なったが、それらと内容が異なる場合には本書をもって正式報告とする。

11．スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

目　　次

Ⅰ．前言 ……（駒田利治）… 1
Ⅱ．位置と歴史的環境 ……（村木一弥）… 3
Ⅲ．墳丘 ……（村　　木）… 4
1．調査前の墳丘 …… 4
2．墳丘 …… 4
3．盛土 …… 4
4．周溝 …… 4
5．埴輪列 …… 5
6．古墳以外の遺構 …… 5
Ⅳ．主体部 ……（村　　木）… 13
Ⅴ．遺物 ……（村　　木）… 14
1．古墳の遺物 …… 14
（1）埴輪 …… 14
A．円筒埴輪 …… 14
B．朝顔形埴輪 …… 24
C．形象埴輪 …… 24
（2）土器 …… 35
A．土師器 …… 35
B．須恵器 …… 35
（3）鉄製品 …… 36
2．その他の遺物 …… 36
（1）弥生時代の遺物 …… 36
（2）中世以降の遺物 …… 36
Ⅵ．結語 ……（村　　木）… 37
1．埴輪列について …… 37
2．形象埴輪について …… 37
Ⅶ．門脇北古墳出土埴輪の蛍光X線分析 ……（三辻利一）… 53

挿図目次

第１図　遺跡位置図……　2
第２図　門脇北古墳周辺地形図……　3
第３図　門脇北古墳調査前測量図……　4
第４図　調査後墳丘測量図……　5～6
第５図　墳丘断面図……　7
第６図　円筒埴輪樹立状況復元図……　8
第７図　埴輪列実測図……　9～10
第８図　埴輪列実測図……　11～12
第９図　ＳＤ１・ＳＤ２平面図……　13
第10図　主体部平面図・断面図……　13
第11図　円筒埴輪実測図①……　16
第12図　円筒埴輪実測図②……　17
第13図　円筒埴輪実測図③……　18
第14図　円筒埴輪実測図④……　19
第15図　円筒埴輪実測図⑤……　20
第16図　円筒埴輪実測図⑥……　21
第17図　朝顔形埴輪実測図……　23
第18図　家形埴輪実測図①……　25～26
第19図　家形埴輪実測図②……　27～28
第20図　家形埴輪実測図③……　30
第21図　形象埴輪実測図①……　31
第22図　形象埴輪実測図②……　33
第23図　形象埴輪実測図③……　34
第24図　須恵器実測図……　36
第25図　鉄製品実測図……　36
第26図　その他の遺物実測図……　36
第27図　円筒埴輪部分名称および突帯の分類図……　41
第28図　樹状図（Ｋ，Ｃａ，Ｒｂ，Ｓｒ因子）……　53
第29図　全資料のＲｂ－Ｓｒ分布図……　53
第30図　A_1群のＲｂ－Ｓｒ分布図……　54
第31図　A_2群のＲｂ－Ｓｒ分布図……　54
第32図　Ｎａ，Ｆｅ因子による
　　A_1群とA_2群の比較……　54

表目次

第１表　円筒埴輪分類表①……　14
第２表　円筒埴輪分類表②……　15
第３表　津市周辺埴輪出土古墳一覧表……　38
第４表　津市周辺埴輪出土古窯跡一覧表……　39
第５表～第13表　遺物観察表……　42～52
第14表　門脇北古墳出土埴輪胎土分析値一覧表……　55

図版目次

ＰＬ．１　調査前全景（東から）
　　調査後全景（上空から）
ＰＬ．２　調査後全景（東から）
　　調査後全景（西から）
ＰＬ．３　周溝（北から）
　　周溝と埴輪列（南西から）
ＰＬ．４　埴輪埋置状況＜１＞（東から）
　　埴輪埋置状況＜１～７＞（北から）
ＰＬ．５　埴輪列と須恵器出土状況（東から）
　　主体部（南から）
ＰＬ．６　円筒埴輪
ＰＬ．７　円筒埴輪
ＰＬ．８　家形埴輪（89）
ＰＬ．９　家形埴輪（90）
ＰＬ．10　形象埴輪（家・鶏・人物）
ＰＬ．11　器財埴輪（甲冑・盾・靱・蓋）
ＰＬ．12　形象埴輪・須恵器・石鏃

Ⅰ．前　言

1　調査に至る経過

中勢道路は、鈴鹿市玉垣町から一志郡三雲町にいたる延長33.8㎞の一般国道23号のバイパスである。この道路は、鈴鹿市・河芸町・津市・久居市・嬉野町・三雲町を通り、国道23号の交通緩和とバイパス周辺の適切な土地利用の誘導を図り、中勢地区の経済発展に寄与することを目的に計画されたものである。

この計画地内に所在する埋蔵文化財については、昭和58年に計画路線内の分布調査を行い、建設省中部地方建設局と三重県教育委員会が埋蔵文化財の取扱いについて協議を行なった結果、現状保存が困難な遺跡については事前発掘調査を実施し、記録保存をはかることとなった。

調査は、建設省中部地方建設局から三重県が委託を受け、昭和63年度は三重県教育委員会文化課、平成元年度からは新たに発足した三重県埋蔵文化財センターが調査を担当している。調査にあたっては、「県教育委員会・市町村教育委員会職員人事交流要綱」に基づき、津市教育委員会から２名の派遣職員を得ている。また、現地作業は調査の円滑化を期して、建設省中部地方建設局が社団法人中部建設協会に委託している。そして、調査事業の実施にあたっては、建設省中部地方建設局・三重県・中部建設協会の三者で「協定書」を締結し事業を推進している。

調査は、津市大里窪田町の主要地方道津関線から津市納所町の主要地方道津芸濃大山田線までの９工区から開始した。この区間には、12の遺跡が確認されており、昭和63年度には、遺跡の埋没状況と範囲を確認するため、９工区の範囲確認調査を優先させた。平成元年からは、９工区の調査を本格的に開始するとともに、津芸濃大山田線から津市大字神戸の都市計画道雲出野田線にいたる10工区の６遺跡の範囲確認調査も併せて実施した。

調査の実施にあたっては、現地調査と出土遺物整理の円滑な推進をはかるため、昭和63年度に津市殿村の津市水道局敷地内に「一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査整理所」を設置した。

調査の結果は、各遺跡の現地調査終了毎に現地説明会を開催するとともに『中勢道路調査ニュース』を発行し、また各年度の調査内容を『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報』として刊行している。

2　門脇北古墳の調査経過

門脇北古墳は、昭和58年度の分布調査により新たに発見された古墳である。丘陵の先端部に明瞭な墳丘と周溝が認められ、埴輪片も散布していた。調査区域を確定する必要があるため、平成元年９月に試掘調査を実施した。計画路線の西端に沿ってトレンチを設定したところ、埴輪が出土したため、周辺にも古墳に付属する施設が存在することが予想された。この結果に基づき調査範囲を100㎡から1,100㎡に変更し、平成２年１月から発掘調査を実施することとした。

発掘調査に先立って、現況の地形測量を測量会社に委託し、1／100の平面図及び遺構図を作成した。

現地の発掘調査は、１月17日から３月17日間まで実施した。丘陵尾根続きである周溝より西側の部分については、表土層も厚くまた樹木の抜根に時間を費やすことが想定されたため、バックフォーにより表土の除去を行った。墳丘及び西側以外の周溝では表土は薄く、すべて人力により除去した。１月末には、南西部から北西部の墳丘に埴輪列を確認し、埴輪の上部は周溝に転落しているものの、良好な埴輪の配置状況を確認した。

２月15日には、三重大学八賀晋教授の指導も得、主体部の調査に着手した。主体部は、盗掘されており、僅かに鉄片が出土したのみで、木棺直葬と推定される痕跡も部分的にしか残されていなかった。

２月28日に航空写真測量を実施し、３月３日には現地説明会を開催し約70名の市民の参加があった。

３月６日から、埴輪列等の出土状況の実測及び遺物の取り上げ作業を行った後、墳丘のたちわり調査を実施し、調査を終了した。

1．門脇北古墳　2．六大Ｂ遺跡　3．橋垣内遺跡　4．大古曽遺跡　5．新池２号墳　6．山籠遺跡
7．宮ノ前遺跡　8．森山東遺跡　9．太田遺跡　10．松ノ木遺跡　11．蔵田遺跡　12．位田遺跡
13．替田遺跡　14．弐ノ坪遺跡　15．里前遺跡　16．明合古墳　17．北浦遺跡　18．前田遺跡
19．多倉田遺跡　20．岡南４号墳　21．中大谷古墳群　22．迎山遺跡　23．平田古墳群　24．浄土寺南遺跡
25．長谷山古墳群　26．御屋敷跡13号墳　27．メクサ古墳群　28．殿村１号墳　29．坂本山古墳群　30．高井古墳
31．新畑遺跡　32．中鳶遺跡　33．大城古墳群　34．日余１号墳　35．堂山１号墳　36．カナクラ遺跡
37．西河辺古墳　38．亀井遺跡　39．西岡古墳　40．長遺跡　41．君ケ口古墳　42．納所遺跡
43．鳥居古墳　44．大ヶ瀬弥生墳墓　45．稲葉古墳群　46．鎌切１号墳　47．鎌切３号墳　48．おこし古墳
49．神戸銅鐸出土地　50．上村遺跡　51．高松弥生墳墓　52．高松Ｃ遺跡　53．元井池古墳　54．藤谷埴輪窯跡群
55．久居古窯址群　56．池の谷古墳　57．法ヶ広古窯跡

第１図　遺跡位置図（１：50,000）（国土地理院１：25,000 椋本・白子・津西部・津東部）

Ⅱ. 位置と歴史的環境

門脇北古墳の所在する安濃川流域では、鈴鹿川流域や雲出川流域に出現したような大型の前期古墳は確認されておらず、わずかな鉄器のみを副葬した墳丘規模の小さな坂本山古墳群(29)が最古のものと考えられている[1]。

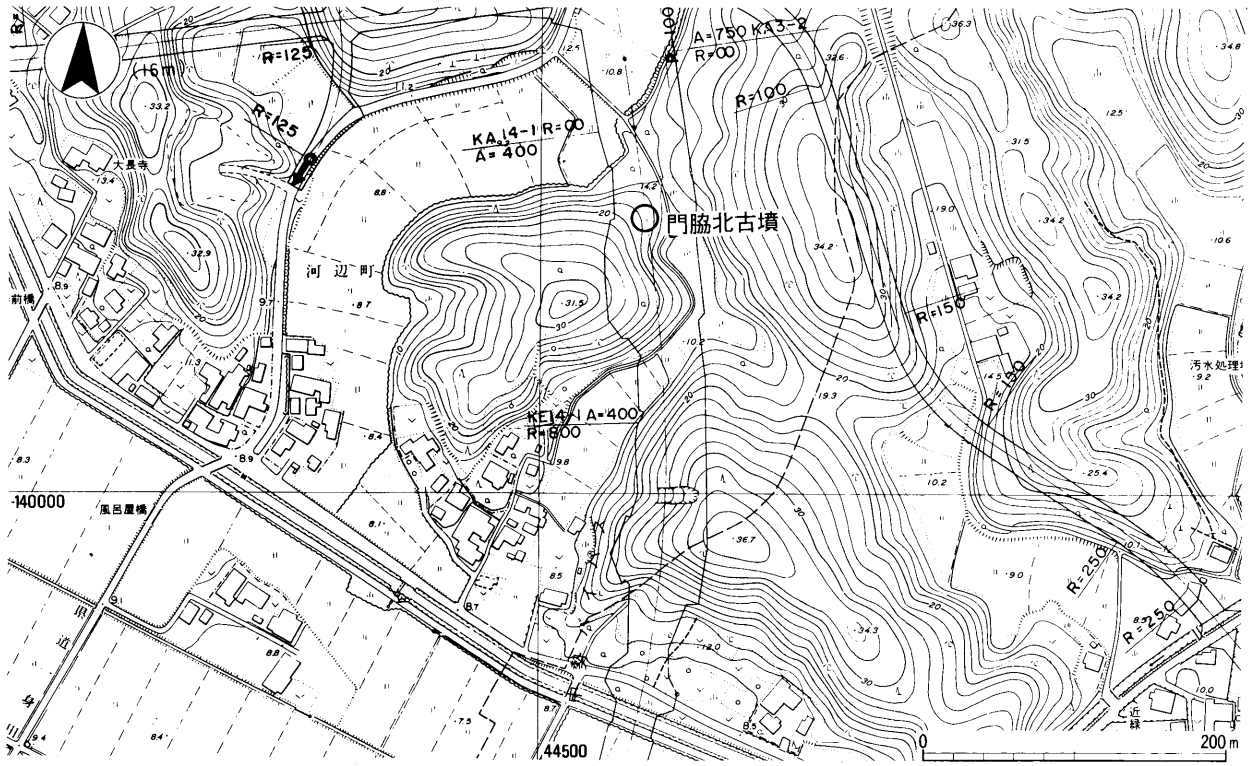
安濃川流域で大型の古墳が出現するのは、5世紀になってからのことである。発掘調査が行なわれていないため明確な時期は決定できないが、安濃川中流域の明合古墳(16)＜造出し付方墳・全長約81m＞と下流域の池の谷古墳(56)＜前方後円墳・全長約85m＞はひときわ大きく、それぞれの地域の盟主的な古墳であると考えられる。安濃川流域には10基以上の前方後円墳が存在するが、池の谷古墳以外のものは20～50mと比較的小規模で、鎌切1号墳(46)、同3号墳[2](47)、おこし古墳(48)が近接しているのを除けば、分散して立地する傾向にある。

6世紀になると、古墳の様相は多様化し、数も増加する。なかでも、6世紀後半から7世紀にかけて長谷山の東麓を中心に築かれた長谷山古墳群[3](25)は、県下最大の古墳群である。古墳の総数は450基以上にのぼるが、これらの多くは横穴式石室をもつとみられており、木棺直葬が中心である安濃川流域の古墳群とは異なった様相を呈している。

古墳時代の生産遺跡には、半田丘陵に所在する久居古窯址群(55)、藤谷埴輪古窯址群[4](54)などがある。また明確な所在地は不明ながら、安濃町内多においても窯跡が存在したと推定されている[5]。

安濃川流域の集落遺跡については、実態が明らかなものはほとんどなく、古墳との関係についても不明な点が多い。今後の調査が期待される。

今回調査を行なった門脇北古墳(1)は、昭和58年度の計画路線内の遺跡分布調査によって新たに確認した古墳で、行政的には津市河辺町字門脇2652番地に所在する。現況は山林であり、墳丘の東裾は小径等によって削平を受けていた。古墳は、標高約30mの小規模な丘陵の北東側の尾根筋の先端に立地しており、墳丘の東裾はほぼ谷底にあたる。この丘陵の尾根上を踏査したが、古墳と考えられる地形は見当たらず、門脇北古墳は単独墳と考えられる。門脇北古墳の北方約1kmの丘陵頂部には、やはり単独墳の西岡古墳[6](39)がある。5世紀末から6世紀初頭のもので、鉄製農工具や埴輪が出土している。



第2図　門脇北古墳周辺地形図（1：5,000）

Ⅲ. 墳　丘

1．調査前の墳丘

調査前から、明確な墳丘と周溝が認められた。墳丘の東側は、小径などによって削平されて急斜面となっており、この付近を中心に円筒埴輪片が散布していた。調査区域を確定するために、周溝の西側にトレンチを設定した結果、埴輪が出土したため、周辺に古墳に付随する施設が存在することも予想された。

2．墳丘

墳形は円墳で、直径は約17.5ｍである。盛土は多量に流失しており、墳丘の北側と西側において顕著であった。そのため墳頂部は平坦な形状となっており、墳丘の高さは現況で、北側の墳丘裾から約2.2ｍであった。外部施設としては、葺石はなく、周溝と埴輪列が存在した。

3．盛土

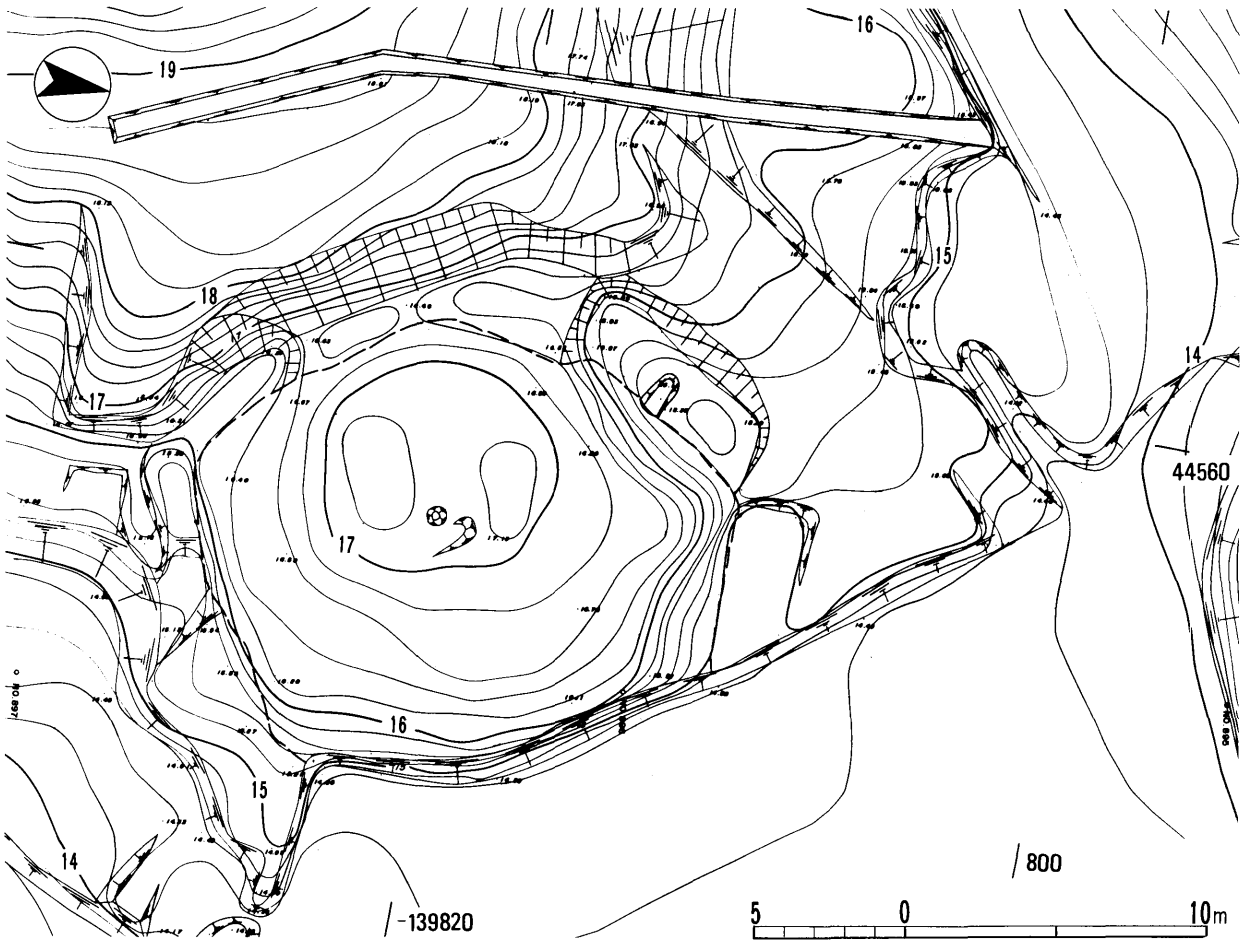
墳丘を十文字にたちわり、盛土の状況を観察した。旧表土は北東方向に傾斜しながら延びており、この上で最大約0.8ｍの盛土を確認した。

4．周溝

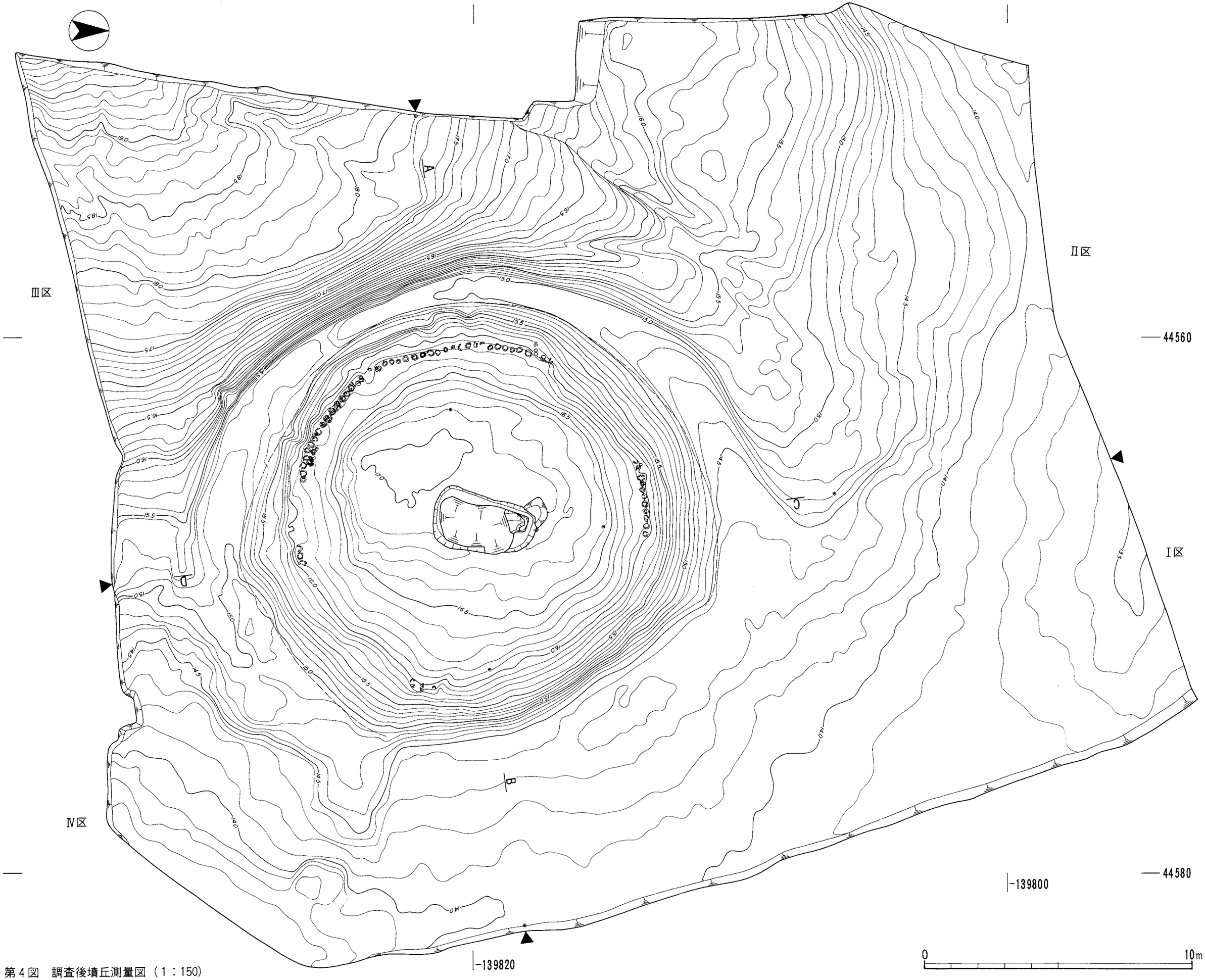
周溝は、丘陵を大きく掘り切って造られており、墳丘の西側をほぼ半周している。周溝の下半部は岩盤を掘り抜いており、周溝の西肩と底の比高差は最大2.8ｍである。溝底は西側が最も狭く、斜面を下るにつれて徐々に広がっていく。

調査前の墳丘と周溝の比高差は約0.5m程度であったが、周溝内には流失した盛土などが大量に堆積しており、その厚さは最大約1.7ｍに及んだ。

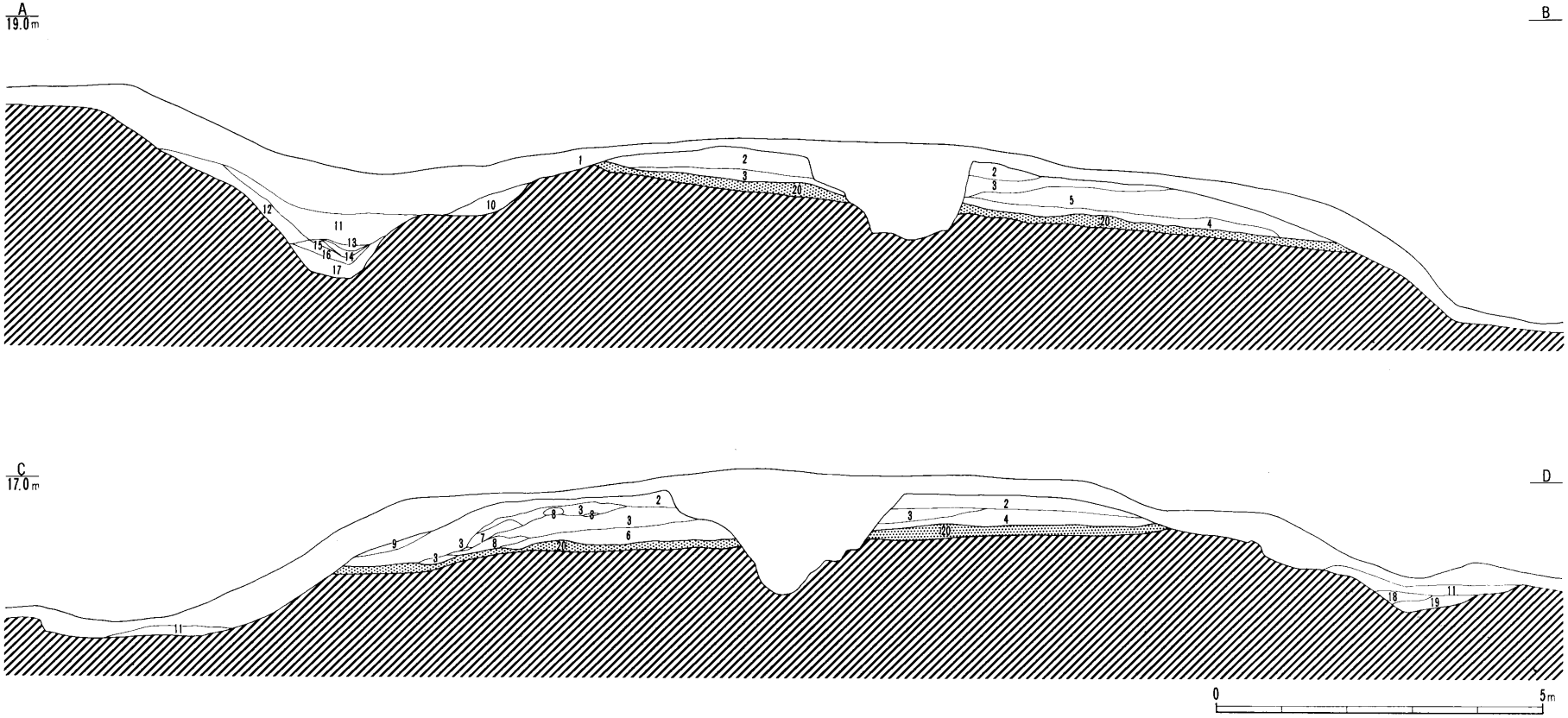
周溝埋土からは、大量の円筒埴輪のほか、形象埴輪、須恵器、土師器が出土した。これらの遺物は、おもに墳丘上にあったものが落ち込んだと考えられ、特に周溝の西側では、円筒埴輪の破片が折り重なった状況で出土した。また、円筒埴輪は周溝の西側の斜面に張り付いた状況でも出土した。現在、門脇北



第３図　門脇北古墳調査前測量図（１：250）



第４図　調査後墳丘測量図（１：150）



1．表土
2．黄橙色粘土（暗赤褐色礫・白色粘質砂ブロック状に混入）
3．淡赤橙色粘土（褐色礫混入）
4．明黄灰褐色粘質土
5．黄灰褐色粘質土
6．黄橙色粘土（2より粘質）
7．暗黄褐色土（炭もしくは岩の破片を多く含む）
8．暗黄褐色土
9．暗黄褐色土〈埴輪を埋めた土〉
10．暗黄灰色粘質土（灰白色土ブロック状に混入）〈埴輪を埋めた土〉

周溝埋土
11．明灰色粘質土と明褐色粘質土の混層
12．明灰白色シルトと明褐色粘質土の混層
13．暗灰色粘土と明灰色シルトの混層
14．明灰色砂
15．明灰白色粘質土と暗灰色粘土の混層
16．黒灰色粘土
17．明青灰色粘土
18．暗青灰色粘土
19．明灰白色細砂と明褐色粘質土の混層
20．旧表土

第5図　墳丘断面図（1：100）

古墳のある尾根上には古墳は確認されていないことから、円筒埴輪が上方の古墳から転落したものとは考えられず、周溝の外側に円筒埴輪が立てられていた可能性もある。

5．埴輪列

墳丘の西半部を中心に、円筒埴輪を57本確認した。現状の墳頂から0.8～１ｍ下がった、標高16～16.2ｍ付近を中心にほぼ水平に５～10㎝の間隔で並べられていた。墳丘の東側は削平を受けているため、良好な状態で出土した円筒埴輪はなかった。しかし、墳丘の北東部や南東部では、破片となった円筒埴輪の基底部が埴輪列の延長線上で出土していることから、埴輪列は本来墳丘を巡っていたものと考えられる。現在残っている埴輪の状況から復元すると、直径13ｍの円形状に140本ほどの埴輪が並べられていたことになる。

埴輪の埋置方法は、墳丘に直接置いた埴輪の第１突帯付近までを土で埋めたものである。埴輪は墳丘の北側では盛土の上に、墳丘の南側では削り出した地山の上に直接置かれていた。一方、墳丘の西側では削り出した地山の上に若干の盛土をして、その上に埴輪が置かれていた。おそらく、このような方法で埴輪の高さを調節したのであろうが、隣り合う埴輪の底や突帯の位置は必ずしも合致していない。

これらの埴輪のほとんどは第１突帯付近までしか残っておらず、古墳完成時に地上に出ていた部分はほとんど残っていない。大部分のものは割れて周溝や墳丘裾に転落したと考えられるが、接合して完形に復元できたものはほとんどなかった。埴輪列の埴輪のなかには直径や胎土が著しく異なったものもあり、部分的に朝顔形埴輪や形象埴輪がたてられていた可能性もある。埴輪の透孔の方向については、特に規則性は認められなかった。

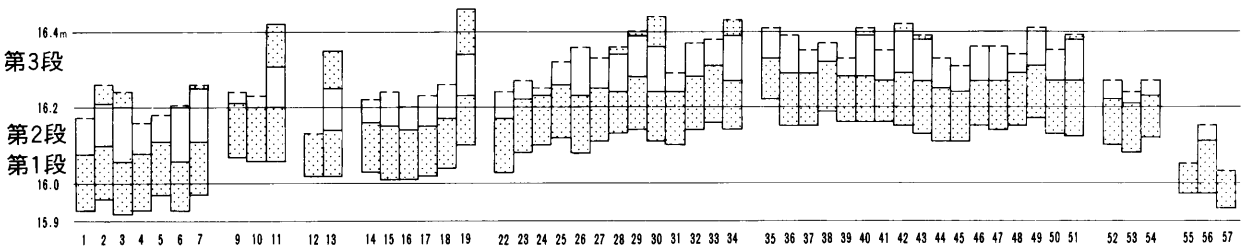
埴輪の並び方を墳丘の南西部で検討すれば、約4.3ｍの間隔で、埴輪列の円周よりもやや内側に置かれた円筒埴輪⑦（19・34・48）があり、それぞれ埴輪の間には14～15本の埴輪が並べられていた⑧。埴輪列の形状は、12～18と35～47が緩い弧を描くのに対して、20～33は直線的な配列となっているが、これは埴輪を配置する作業が、それぞれの単位ごとに別々に行なわれたことを示すものであろう。

埴輪は周溝のみでなく、墳丘の埴輪列よりも上の部分でも多数出土している。これらの埴輪のうち、形象埴輪は家・甲冑・靱・盾・蓋・鶏・人物など多岐にわたっているが、墳丘や周溝の各地区から出土したものが接合して一体となったものもあった。また、転落して埴輪列に引っかかったような状況で出土した円筒埴輪もあることから、本来、墳頂部付近には形象埴輪を中心とした多数の埴輪が所狭しと並べられていたものと考えられる。

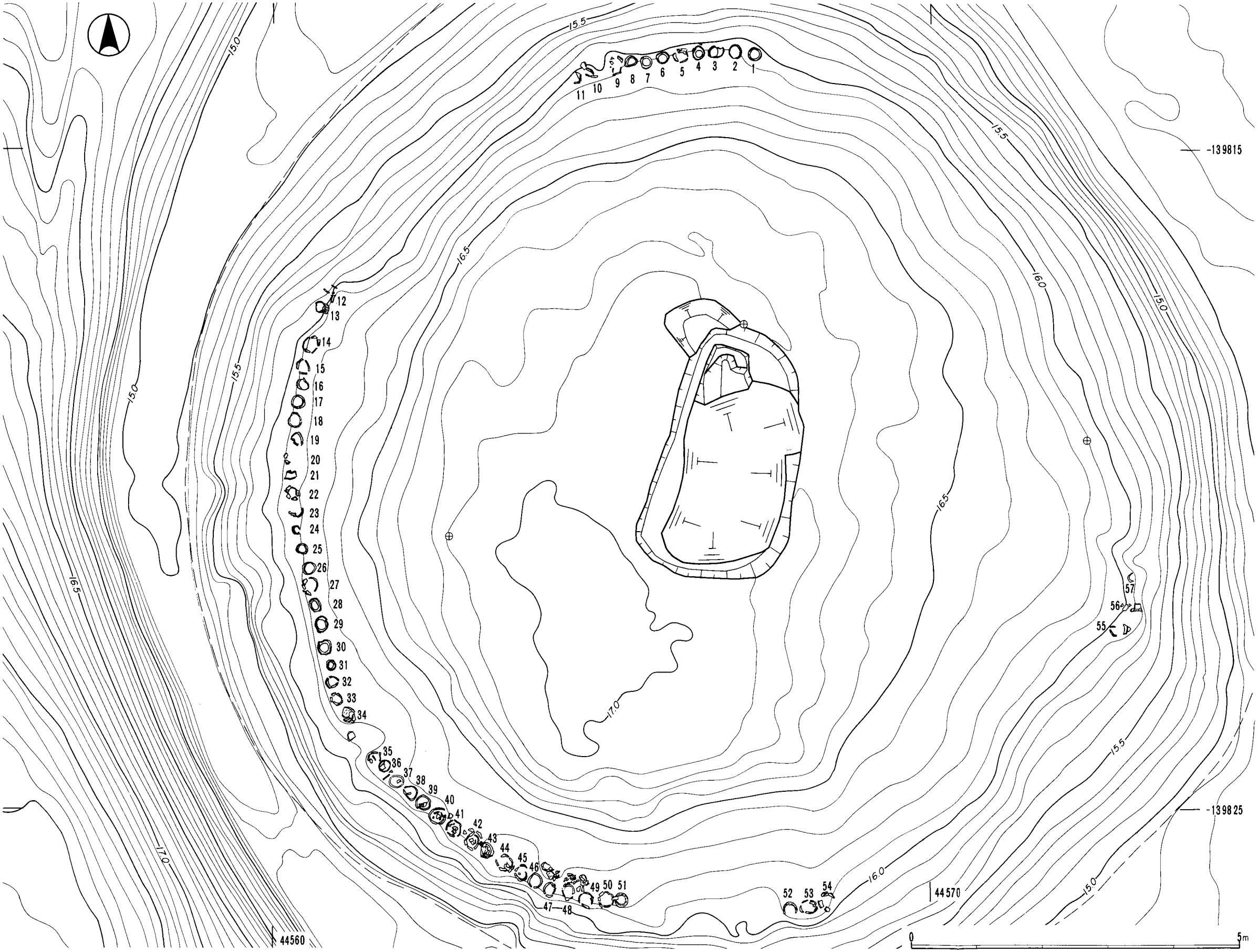
46～49の墳頂部側では須恵器の杯身と杯蓋が出土した⑨。それぞれ４個体以上あり、そのうちの３個体はセットになると考えられる。残る１個体については欠損している部分が多いためセットになるかどうかは不明である。これらの須恵器はすべて割れた状態で出土したが、ここに置かれた時点で割れていたかどうかはわからない。残存状態の良いものに限って言えば、杯蓋は倒立、杯身は正立の状態で出土している。これらの須恵器が出土したのは、主体部のほぼ南にあたるが、何らかの儀礼的な意味があるのかも知れない。

6．古墳以外の遺構

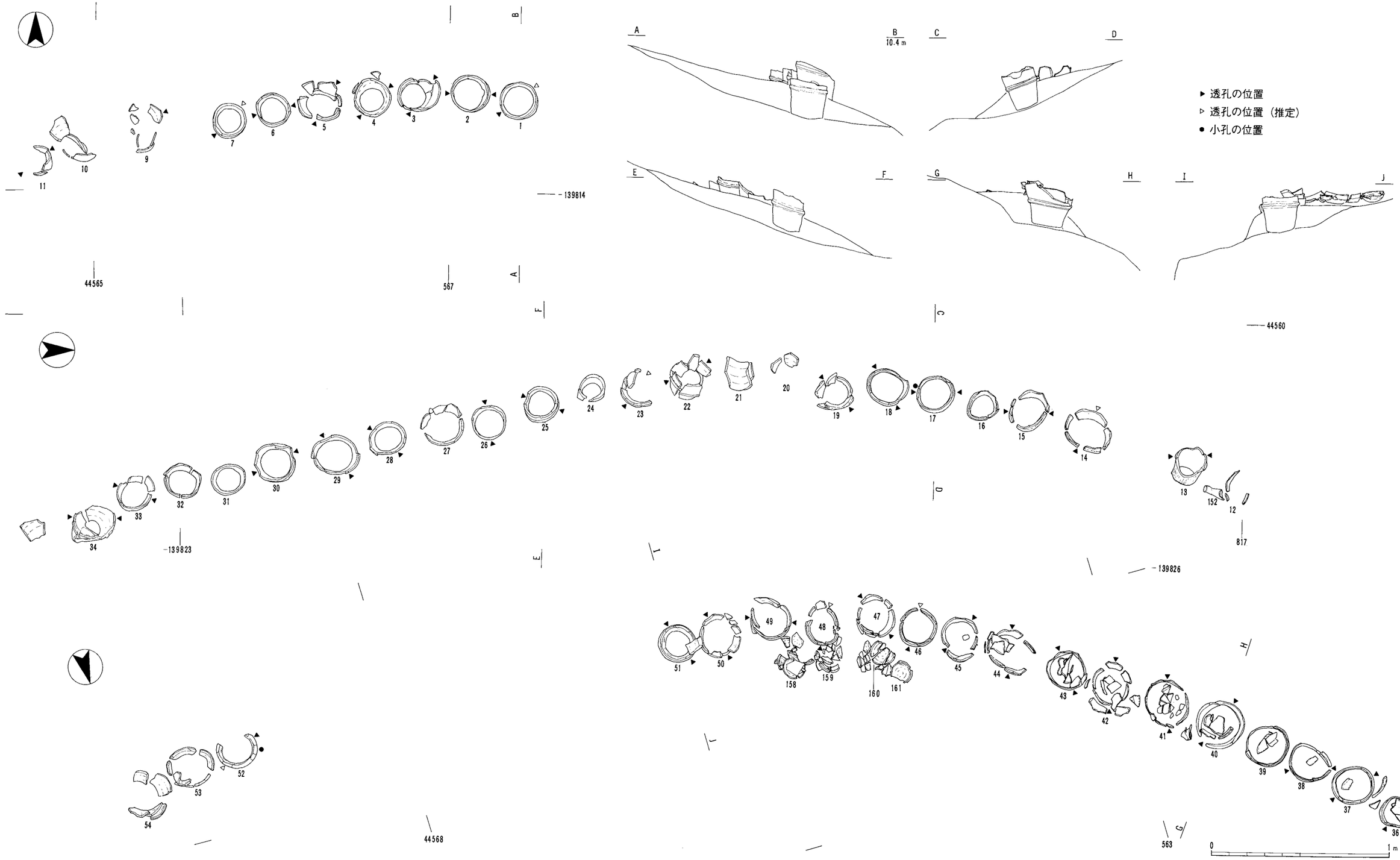
周溝外の北西側の斜面で、溝を２条検出した。前後関係は、切り合いからはわからない。須恵器や埴輪の小片が若干出土したが、混入の可能性もあり、明確な時期は不明である。



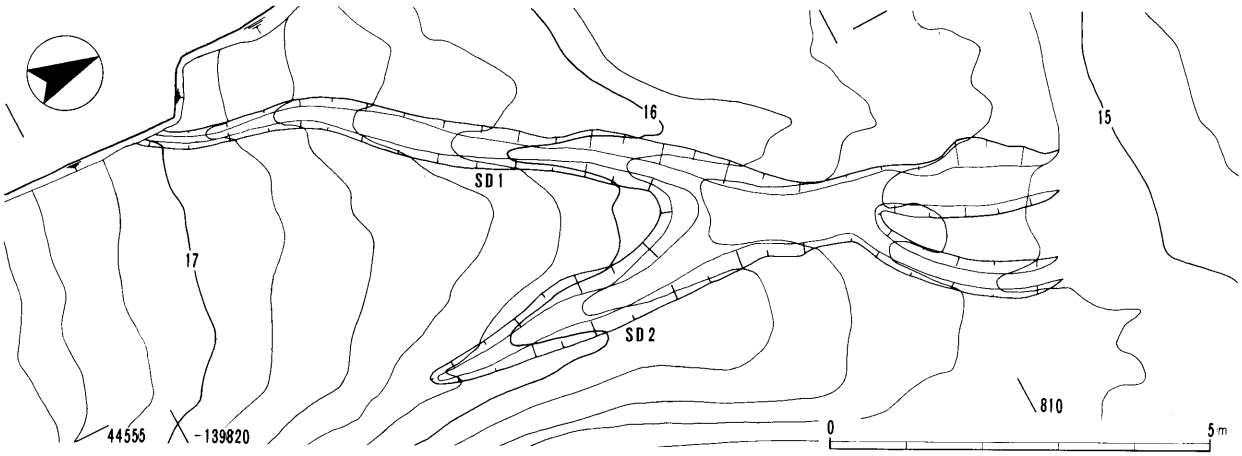
第６図　円筒埴輪樹立状況復元図



第７図　埴輪列実測図（１：60）



第８図　埴輪列実測図（１：20）

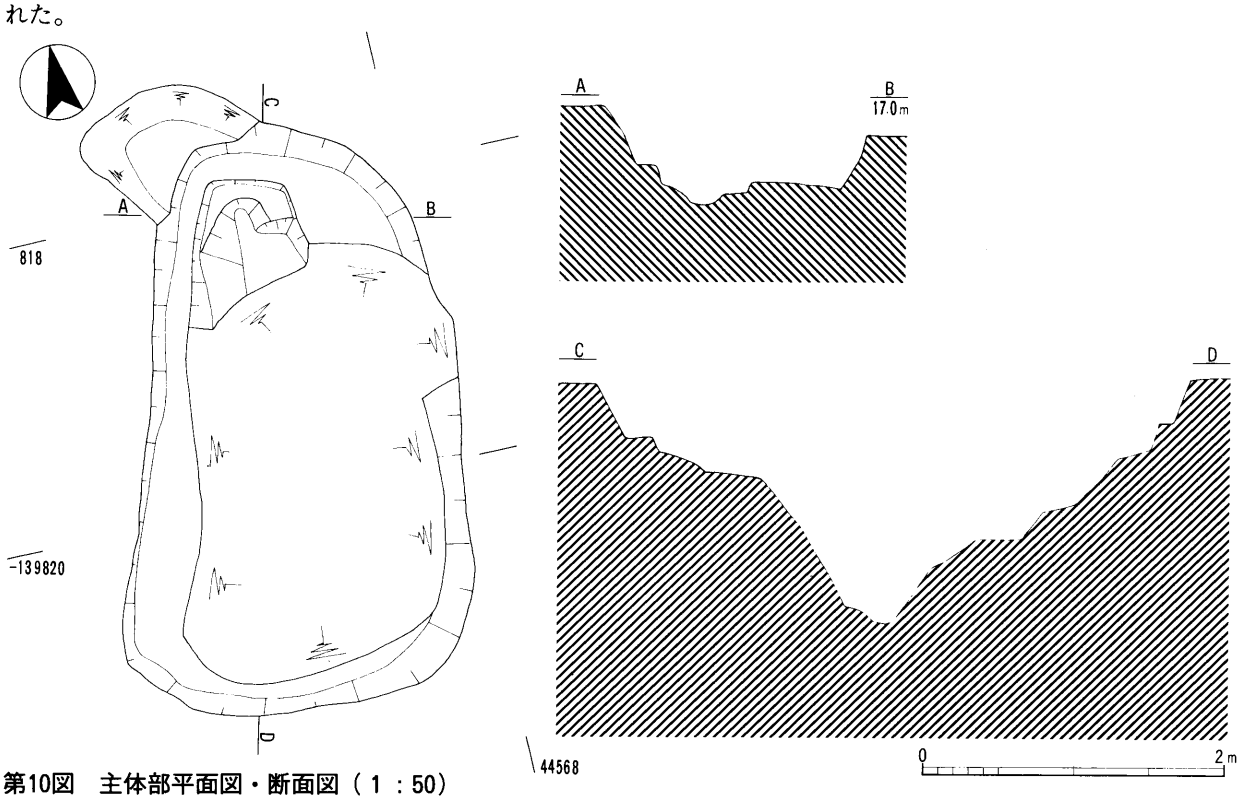


第９図　ＳＤ１・ＳＤ２平面図（１：100）

Ⅳ．主　体　部

主体部は、墳丘のほぼ中央で１基確認した。徹底的に盗掘を受け、最深約２ｍにわたって段掘りされているため、墓坑内は著しく改変されている。また、主体部の北西隅は、樹木の根によって破壊されている。墓坑は楕円形で、南側に広がる。規模は長さ3.9ｍ、幅は最も広い部分で2.2ｍで、長軸方向はＮ15°Ｅである。内部主体は木棺直葬と考えられ、墓坑内北端のやや西に偏った位置に、木棺を据えるために掘り窪めたと考えられる部分がわずかに認められた。

遺物は、盗掘を受けたために、原位置を保って出土したものはなかった。埴輪のほか若干の鉄製品が出土したが、土器はまったく出土していない。埴輪は、本来墳頂部に置かれていたものが、盗掘時に転落したのであろう。鉄製品で形態が判別できるものは、鉄鏃と刀子のみである。おそらく、埋葬時に副葬されたものであろう。それ以外のものは、原形をとどめておらず、盗掘時に混入した可能性も考えられる。



第10図　主体部平面図・断面図（１：50）

V. 遺　物

1．古墳の遺物

（1）埴輪

埴輪は墳丘や周溝から大量に出土した。円筒埴輪、朝顔形埴輪のほか形象埴輪がある。完形で出土したものはない。接合に努めたが、図上で完形に復元できたものは円筒埴輪8点のみであった。したがって、朝顔形埴輪や形象埴輪の円筒部は円筒埴輪と識別が不可能なため、円筒埴輪として取り扱ったものの中に含まれている可能性も考えられる。また、これらの埴輪は風化が激しく、内外面の調整が不明瞭なものが数多くみられた。

A．円筒埴輪

完形に復元できた円筒埴輪は口縁部に向かって開く形態で、2条の突帯により3段に区切られている。おそらく、他の円筒埴輪についても同様の構成になると考えられる。

口径

口径は、口縁部が全周した円筒埴輪（4点）が26.1～28.2cmであり、反転復元した円筒埴輪（7点）についても、26～28cmになるものが多い。これらの円筒埴輪の第1段や第2段の大きさからみて、口縁部が接合しなかった円筒埴輪についても、おそらく同様の口径になるものが多いと考えられる。

器高

器高は、図上で完形に復元しえたもの（8点）で35.4～44.3cmである。この8点に限れば、35cm程度のものが半数を占めており、35cm程度のものと40cmを越えるやや大型のものとに大別できそうである。

底径

円筒埴輪の底部は歪んで楕円形になっているものが多いため、底部が完存しているものについては、底部の円周を円周率（$\pi \fallingdotseq 3.14$）で割った数値を底径とした。図示した円筒埴輪の底径は13.3cm～21.6cmであるが、15～16.5cmのものが多い。

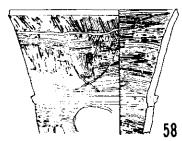
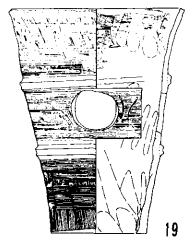
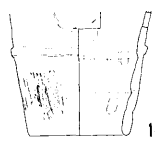
口縁部

現状では、口縁部は、

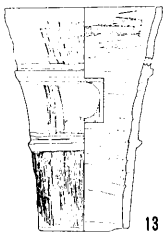
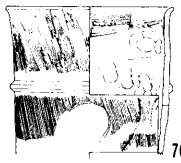
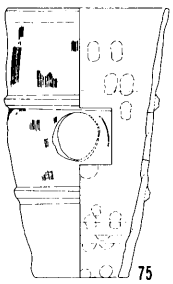
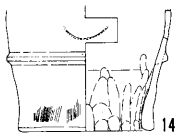
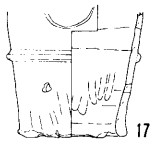
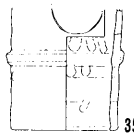
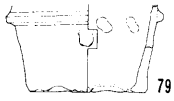
①内彎気味にたちあがり端部がやや内傾する面をもつもの（13）

②端部付近が急に外反するもの（76）

③緩やかに外側に向って開き端部が外傾する面をも

外面調整	細分	形　態	特　徴	図版番号
Ⅰ（ヨコハケが施されるもの）	a	 58	タテハケの後、部分的に目の粗いB種ヨコハケで外面調整されているもので、一方の透孔の上方に「×」のヘラ記号をもつもの。	48・58・59・60
	b	 19	タテハケの後、B種ヨコハケで外面調整されるもので、焼成が硬質のもの。 基本的に一方の透孔の右側に「)(」のヘラ記号をもち、外面の最下部はヨコナデである。	8・11・19・34・49・61・62
	c	 14	第1段の外面調整がタテハケのみのもの。	14
	d	52	第1段に小孔をもつもの。	52

第1表　円筒埴輪分類表①

外面調整	細分	形態	特徴		図版番号
Ⅱ（タテハケのみのもの）	a		口縁端部が内傾するもの。		13
	b		口縁端部が急に外反するもの。		76
	c		口縁端部が外傾するもの。		74・75
	d		第2段から上の外面調整がわからないもの。	底径が大きく第1突帯の位置が低いもの。	41・78
	e			Ⅱ－d類に含まれないもの。	4·9·10·18·24·25·55·57·77
Ⅲ（板ナデのもの）			外面調整が板ナデのもの。		17
Ⅳ（不明のもの）	a		外面調整が不明なもののうち、第1段に小孔をもつもの。	器形が筒状のもの。	35
	b			底径が大きく、第1突帯の位置が低いもの。	79

第2表　円筒埴輪分類表②

第11図　円筒埴輪実測図①〈埴輪列のもの〉（1：6）

第12図　円筒埴輪実測図②〈埴輪列のもの〉（1：6）

第13図　円筒埴輪実測図③〈埴輪列のもの〉（1：6）

つもの（11・19・58～61・69・74・75）の3形態がある。図示した口縁部については③の形態のものが圧倒的に多く、また図示できなかった口縁部についても同様の状況であることから、円筒埴輪の口縁部は③の形態のものが多数を占めていたと考えられる。口縁端部についてはヨコナデが施されるが、強いヨコナデによって端部がM字状になったものも多くみられる。

突帯

突帯はヨコナデによって貼りつけられている。断面の形態はM字状のものと台形のものが大部分を占め、三角形のものも若干みられる。ただし、13のように第1突帯と第2突帯の形状が異なるものがあったり、同一突帯内においても形状の異なる部分があるなど、突帯の形態による円筒埴輪の差異はないと考えられる。

透孔

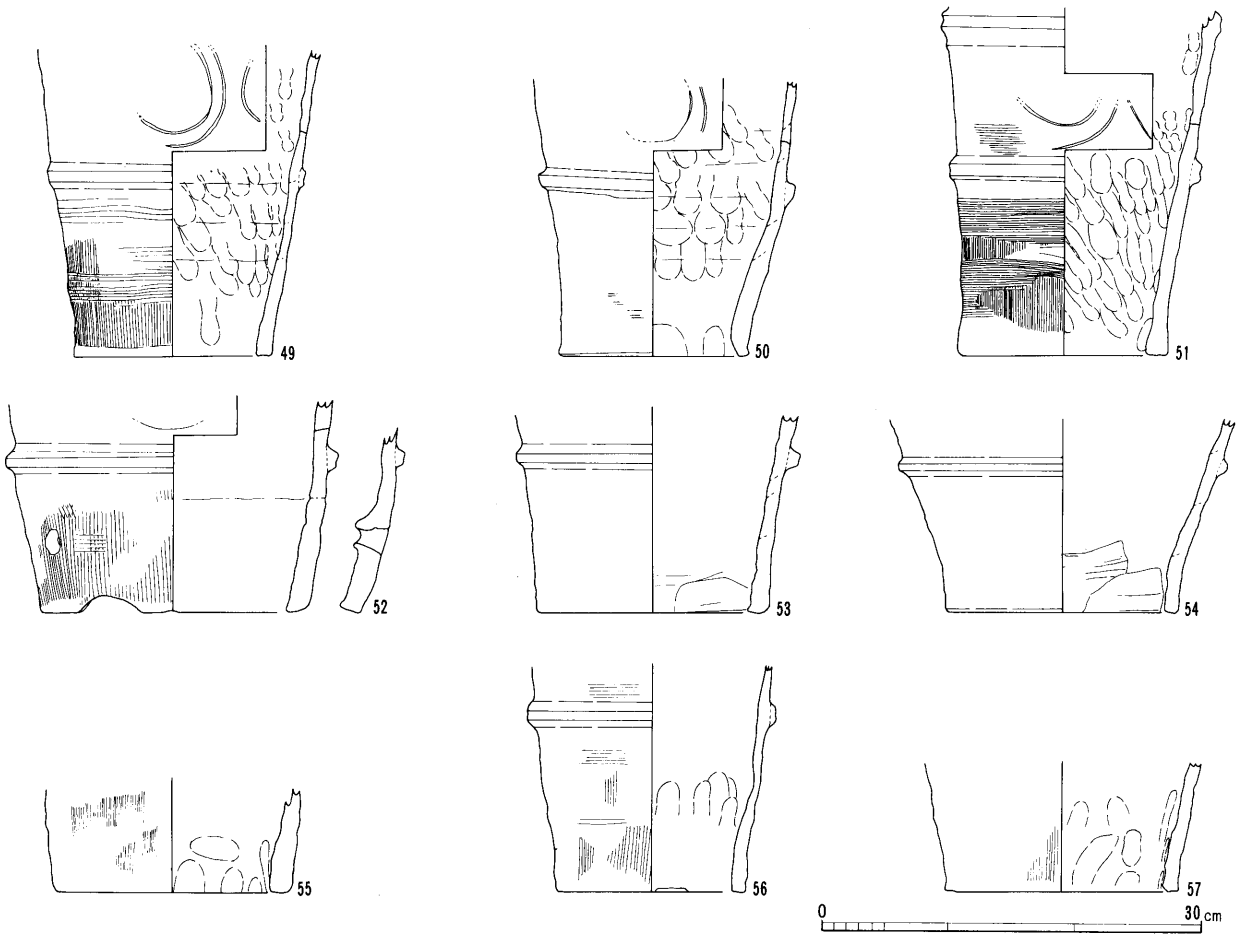
透孔は良好な状態のものが少ないが、基本的には円形で第2段のほぼ対向する位置に2孔穿たれている。ただし59については、一方の透孔と同じ側のやや下がった位置にもう一方の透孔が穿たれたようである。また、透孔の形状は不整な円形ものが多く、このほか第1突帯や第2突帯を切って穿たれているものもある。

小孔

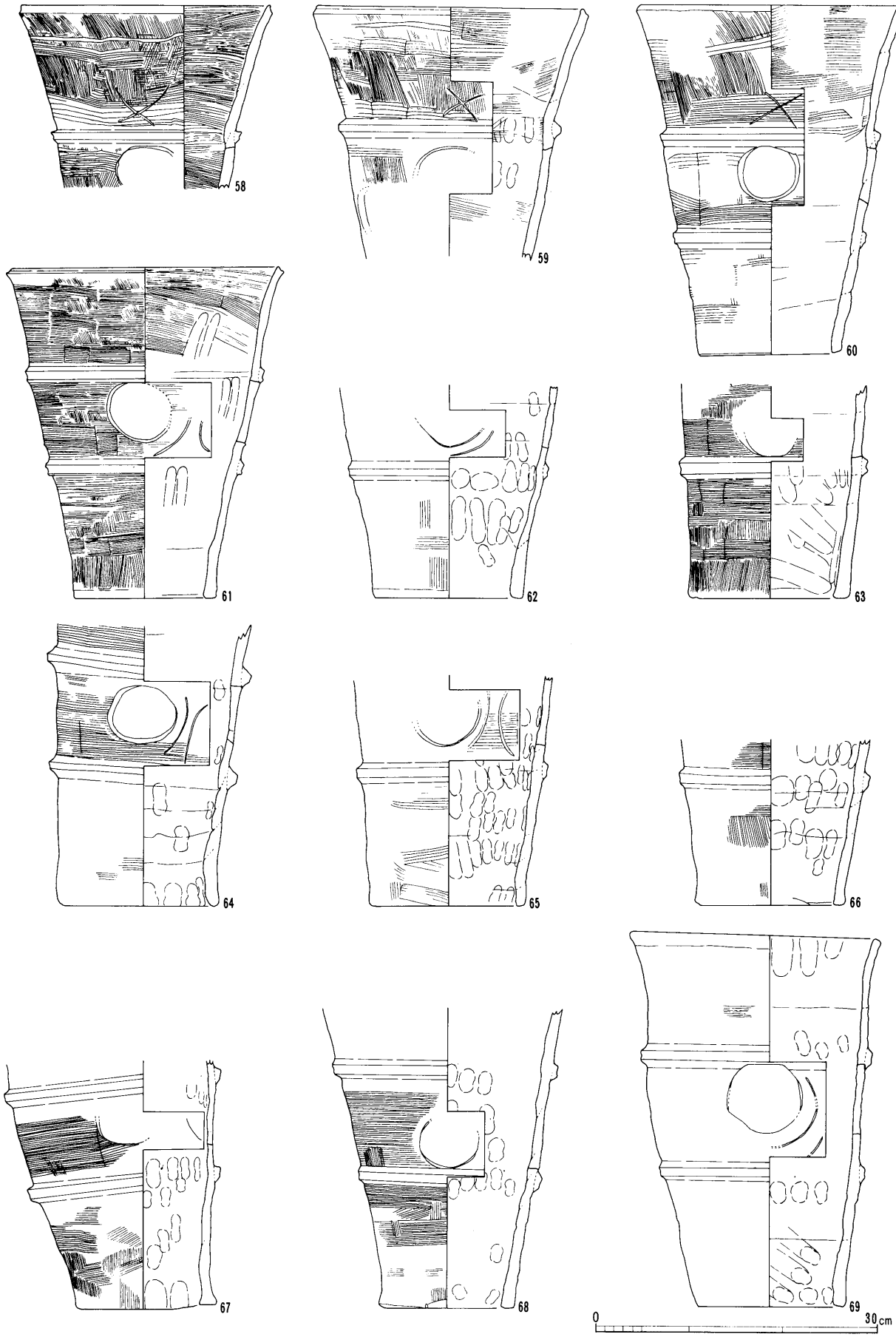
図示した円筒埴輪のなかで、小孔が穿たれているものは17・35・52・79の4点であり、また図示しなかったもののなかにも若干存在している。小孔の直径は1.5～2.2cmで、第1段に焼成前に外側から穿たれている。小孔をもつ埴輪の色調はすべて橙色系のものであり、52以外は底部が自重のため大きく乱れている。これらのうち17・35・52は埴輪列内のものであるが、小孔のある第1段が完全に埋められた状態で出土しており、古墳に並べられた状態では小孔の存在はわからない。また79についても、出土位置から埴輪列内のものの可能性もある。

外面調整

円筒埴輪は外面の風化が激しいため、かろうじて



第14図　円筒埴輪実測図④〈埴輪列のもの〉（1：6）



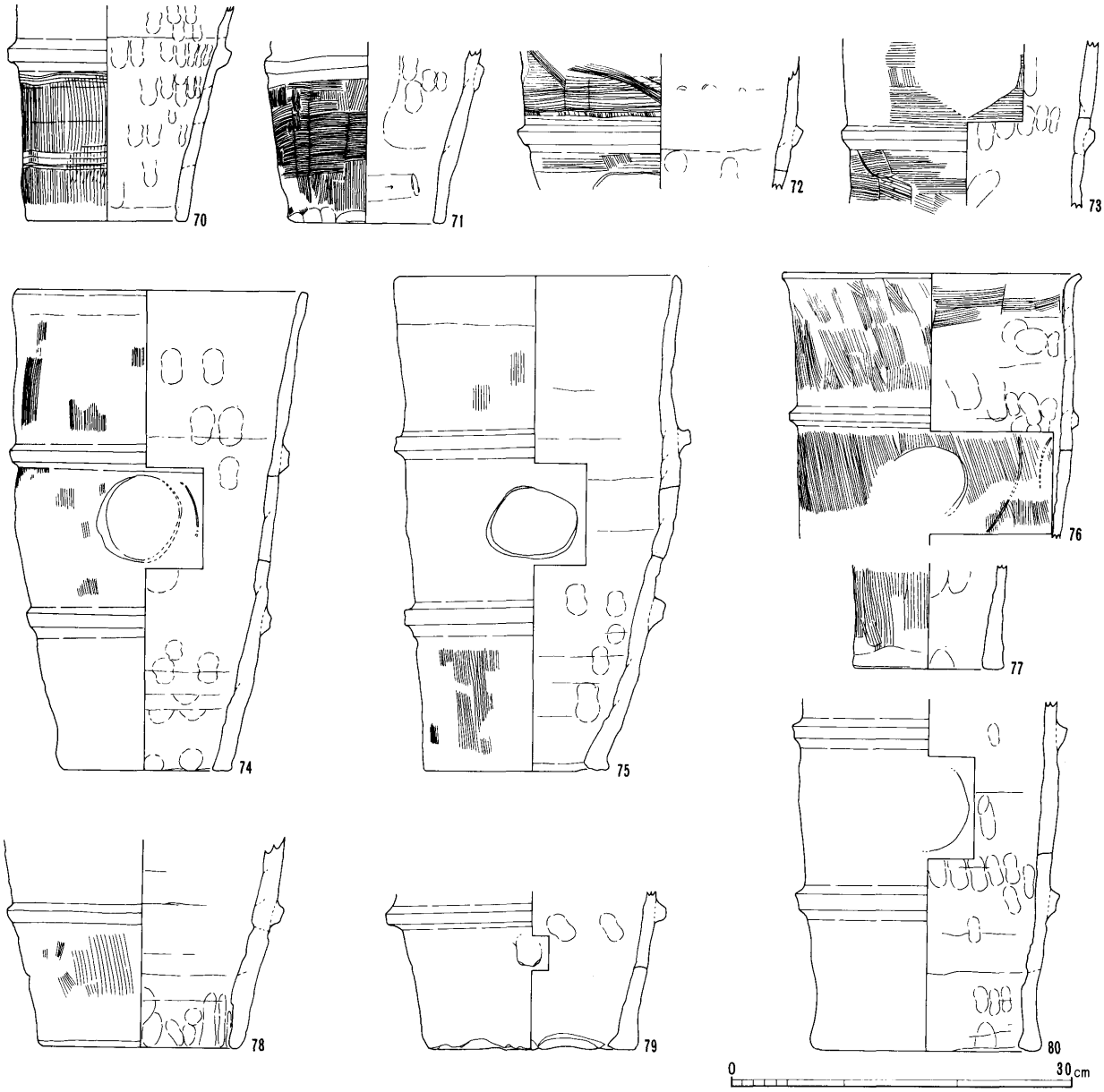
第15図　円筒埴輪実測図⑤（1：6）

調整がわかる程度のものが多く、まったく調整がわからないものもあった。外面調整にはタテハケ、ヨコハケ、板ナデがある。

大部分の円筒埴輪は外面にヨコハケが施されている。このうち外面が良好な状態のものを観察すれば、タテハケの後にB種ヨコハケ[10]が施されている。風化のためヨコハケのみが部分的に残存しているものも多いが、これらもタテハケの後にヨコハケ（おそらくB種ヨコハケ）が施されたのであろう。1次調整と2次調整の区別がつかないものも多いが、おそらくヨコハケは2次調整であろう。ヨコハケが施される範囲は外面全体に及ぶものが多いが、14のように第1段には施されていないものもあり、また26・31・70のように第1段の一部のみに施されているものもある。このほか、72のようにヨコハケの後、口縁付近に幅の狭いナナメハケが施されるものや、58のようにヨコハケの後、口縁付近にタテハケが若干施されるものもある。

タテハケのみの円筒埴輪は少なく、図示した15点のほかに若干の個体が存在するだけである。このうち9・10・18・24・41・55・57・77・78については第2段から上の調整が不明であり、14のように第2段にヨコハケが施される可能性もある。

板ナデが施されるものは、1点のみである。17は風化のため調整がわかるのは第1段の下半のみであるが、縦方向の板ナデが施されている。



第16図　円筒埴輪実測図⑥（1：6）

内面調整

内面調整は指圧およびナデを基本とする。このほか口縁部を中心にヨコハケを施すものもあり、第1段を中心にヘラケズリを施すものも2点（4・71）みられる。また、11・19・34・61は第2突帯の裏側にあたる部分に1条のヨコナデがみられる。

底部

底部に段をもつ「淡輪技法」[11]のものは1点もみられない。底部に調整を加えるものは少ないが、8・11・19・（32？）・34・61・70は外面の最下部に1条のヨコナデを施しており、71は底部外面を板状の工具で押圧している。

底部の裏面には圧痕が認められるものが多い。圧痕は棒状のものが多く、太さはさまざまである。

基部の粘土帯の接合部は、明瞭なものが多い。接合部は1カ所のものがほとんどで、2カ所のものはわずか（3・9？）である。このうち1カ所のものは、接合方向が上からみて右回りになるものがほとんどであり、左回りになるものは14・45・53の3点のみである。

ヘラ記号

円筒埴輪にはヘラ記号をもつものともたないものがある。ヘラ記号の位置は、第1段（①）、第2段（②・③・④）、第3段（⑤）であり、第2段、第3段がほとんど接合しない埴輪列のものについてはヘラ記号の存在を確認できるものは少ない。

ヘラ記号には、

①透孔の下方に「∪」を施すもの（73）

②透孔の右横に「)(」を施すもの（11・19・34・42・49・51・61・64・65・76）

③透孔の右横に「) 」を施すもの（50・62・74）

④透孔の右横に「 (」を施すもの（67）

⑤透孔の上方に「×」を施すもの（58～60）

がある。このうち③・④については②が風化したものも含まれるようである。また⑤については、後述するように特定の円筒埴輪（Ⅰ－a類）にのみ使用されている。

焼成

焼成については、外面に黒斑をもつものはなく、すべて窖窯で焼成されたものと考えられる。土師質のものと硬質のものがあり、須恵質のものはない。土師質のものが多数を占める。

色調

色調は大きく淡黄色、黄褐色、黄白色、灰色、橙色に分けられる。このうち黄白色と灰色は焼成が硬質のものに限られる。

胎土

胎土は0.1～0.5cmの石粒を含むものが多く、1cm程度の小石を含むものもある。色調が淡橙色のものは胎土が細かいものが多い。

分類

以上が門脇北古墳の円筒埴輪の特徴である。これらについて外面調整によってⅠ類～Ⅳ類に分類し、可能なものについてはさらに細分を行なった。

Ⅰ類（1～3・6・8・11・14～16・19・22・23・26・29～31・34・38・42～52・56・58～73）　外面にヨコハケを施すものをⅠ類とした。門脇北古墳の大部分の円筒埴輪はⅠ類である。

Ⅰ－a類（48・58～60）　外面調整はタテハケ後部分的に粗いB種ヨコハケが施される。内面調整は口縁部付近がヨコハケで、口縁端部は外傾し、端面に強いヨコナデが施される。ヘラ記号は「×」で、透孔の真上に施される。58・59の口縁付近には沈線が1条巡っている。また、58の第3段にはヨコハケの後タテハケが部分的に施されているが、他のものについては風化していることもあってわからない。48は上半が欠損しているが、外面調整の特徴からここに含めた。

Ⅰ－b類（8・11・19・34・49・61・62）　外面調整はタテハケ後B種ヨコハケで、最下部にヨコナデが施される。内面調整は口縁付近がヨコハケで、第2突帯の裏側に1条のユビナデがある。口縁端部は外傾し、端面に強いヨコナデが施されている。焼成は硬質のもののみである。基本的に「)(」のヘラ記号が透孔の右横に施されているようである。図示したものは6点のみであるが、このほか接合しない破片が多数ある。

Ⅰ－c類（14）　第1段はタテハケのみで、第2段にはB種ヨコハケが施されている。

Ⅰ－d類（52）　第1段に焼成前に小孔が穿たれている。第1突帯は比較的低い位置にあり、底径は21.5cmと門脇北古墳の円筒埴輪の中で最も大きく、

底部は自重のため大きく歪んでいる。形象埴輪の円筒部の可能性も考えられる。

Ⅱ類（4・9・10・13・18・24・25・41・55・57・74～78）　外面調整がタテハケのみのものをⅡ類とした。前述したように、外面調整がタテハケのものは、この15点のほかに若干の個体が存在するのみである。

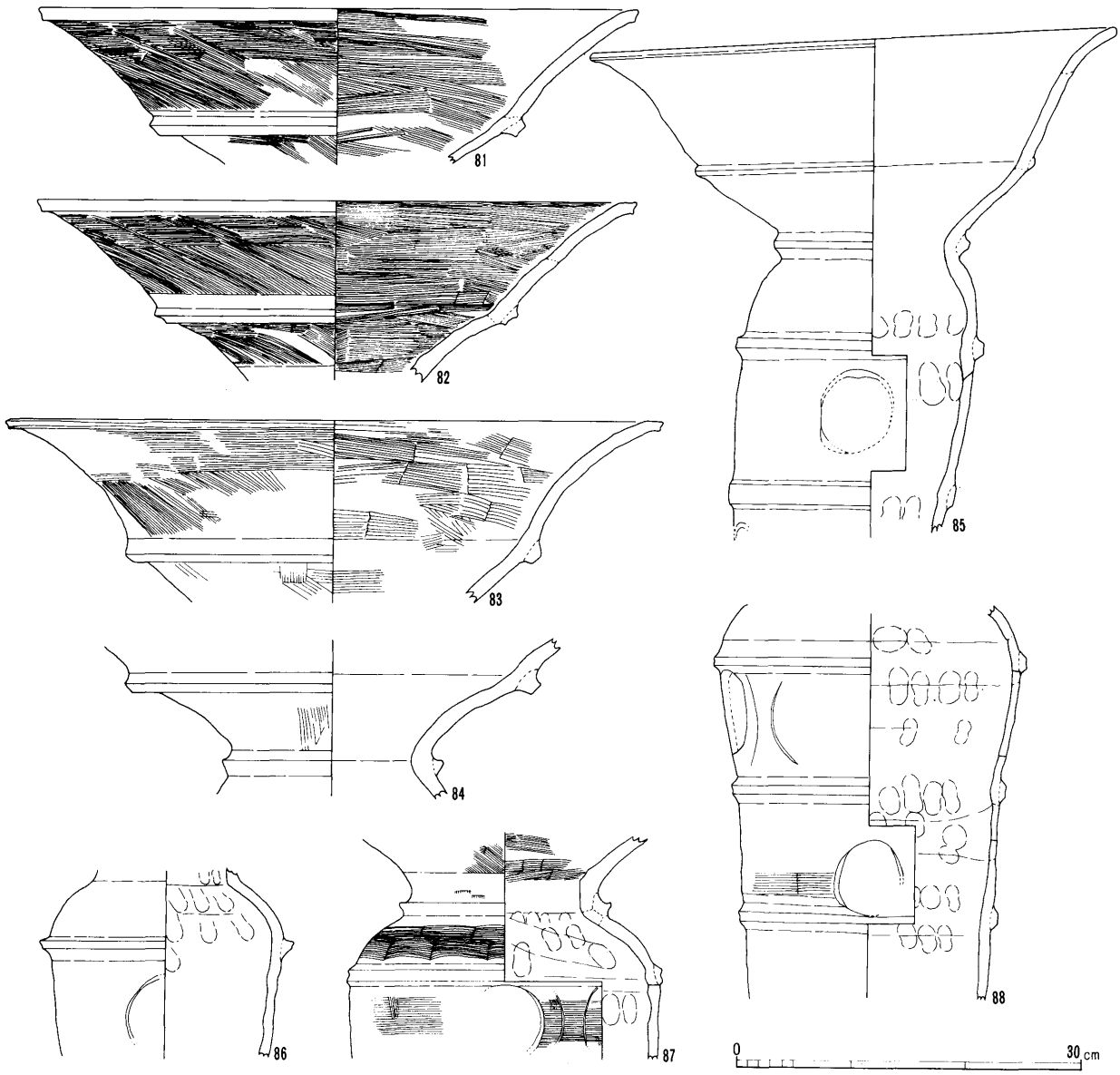
Ⅱ－a類（13）　口縁端部が内彎し、端面が緩く内傾する。内面の口縁付近はヨコハケが施される。焼成は硬質である。

Ⅱ－b類（76）　口縁端部が急に外反するもので、内面の口縁付近にはヨコハケが施されている。ヘラ記号は「)(」で、透孔の右横に施されている。

Ⅱ－c類（74・75）　激しく風化しており、調整がまったくわからない部分（74は第1段、75は第2段）もあるが、器高が40cm以上を越える大型のものをⅡ－c類とした。ともに口縁端部は緩く外傾しており、74は透孔の右横にヘラ記号が施される。

Ⅱ－d類（41・78）　第2段から上の調整がわからないもののうち、底径が大きく第1突帯がやや低い位置にあるものをⅡ－d類とした。ともに色調は淡橙色で、胎土は細かい。また、39・40は外面調整は不明であるが、形態や胎土が41・78と似ていることから、Ⅱ－d類に含まれる可能性が高い。

Ⅱ－e類（4・9・10・18・24・25・55・57・77）　第2段から上の調整がわからないもので、Ⅱ－d類以外のものをⅡ－e類とした。Ⅱ－d類やⅡ－e類のなかには、Ⅰ－c類のように第2段にヨコハケ



第17図　朝顔形埴輪実測図（1：6）

が施されるものを含む可能性も考えられる。

Ⅲ類（17）　外面調整が板ナデのものをⅢ類とした。底部は自重のため大きく歪み、大小さまざまな圧痕が残っている。第1段に小孔が穿たれている。

Ⅳ類（35・79）　外面調整が不明なもののうち小孔をもつものをⅣ類とした。

Ⅳ－a類（35）　器形はあまり外反せず、筒状に延びる。底部は他の小孔をもつ円筒埴輪（17・52・79）のように大きく乱れていない。

Ⅳ－b類（79）　底径が大きく第1突帯の位置が低いもので、底部は自重のため大きく歪んでいる。

B．朝顔形埴輪

すべて破片で出土した。埴輪列のものと接合したり、図上で完形に復元できたものはなく、法量については不明な点が多い。ただ、85・88をみれば、5条の突帯で6段に区切られたものは確実に存在していたと考えられる。

透孔は円形で、肩部の1段下に穿たれているものがある。さらに85・88についてはもう1段下の直交する位置にも透孔が穿たれている。

外面調整には、タテハケ、ヨコハケ、ナナメハケがあり、口縁部については、ナナメハケの後にヨコハケが施されるものが多い。

ヘラ記号をもつものは2点（87・88）ある。ともに肩部の1段下にある透孔の右横に「)(」を施している。

焼成については、円筒埴輪と同様に土師質のものと硬質のものがあり、焼成については黄褐色、黄白色、淡橙色、赤褐色のものがある。

C．形象埴輪

形象埴輪には、家、甲冑、靱、盾、蓋、鶏、人物があり、このほかに形態の不明なものも存在する。これらは周溝や墳丘の各地区から破片となって出土したものである。円筒埴輪と同様で、黒斑をもつものはない。焼成は、土師質、硬質、須恵質と3種類ある。形態の判明したものに限れば、須恵質のものは人物のみに、硬質のものも鶏（134）を除けば人物のみに限られている。土師質のものは風化が激しく、調整の不明なものが多い。

家形埴輪（89～119）

家形埴輪は、おもにⅡ・Ⅲ区の周溝から破片で出土した。ほぼ全容がわかるように復元できたものは2個体（89・90）のみである。89・90と接合しなかった破片（91～119）の胎土を観察すれば、89に近いもの（91～106）と、90に近いもの（107～119）とに大別できる。したがって91～119 のなかには、本来89・90の一部分であったものが含まれている可能性がある。また一方、96・97や107～109のように明らかに89・90とは別個体と判断できるものもあることから、本来は4個体以上の家形埴輪が存在したと考えられる。

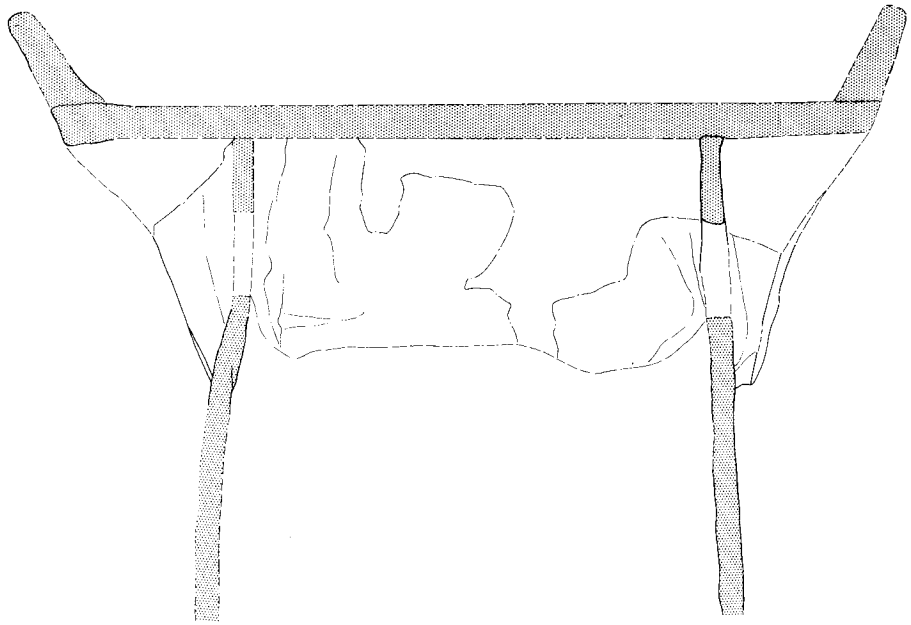
家形埴輪（89）

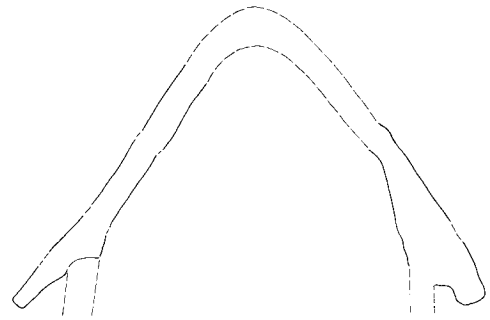
欠損部分が多く、屋根と壁は接合しなかった。器高は復元すると43.2cmとなる。

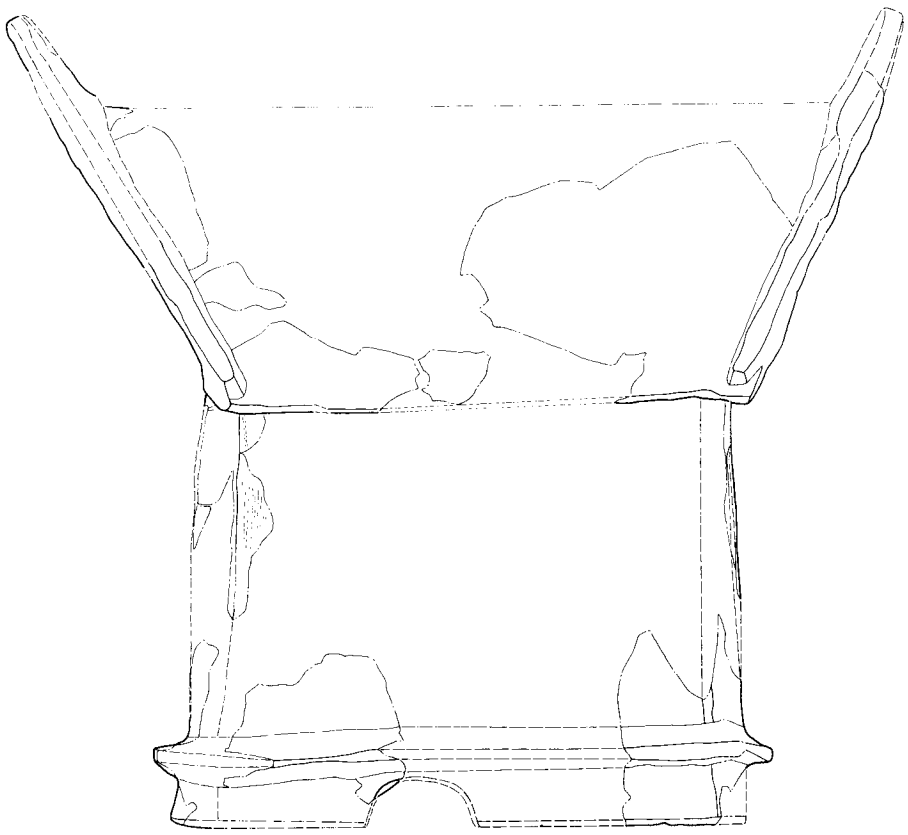
屋根は切妻で、片側の平の軒先部分がほぼ完全に接合した。右側の破風板は頂部を欠いているが、復元すると、左右の破風板の頂部の間の長さは47.2cmとなる。屋根の表面は風化が激しいが、破風板の一部にタテハケが残っている。沈線や接合痕が認められないことから、網代や押縁は表現されていないと考えられる。

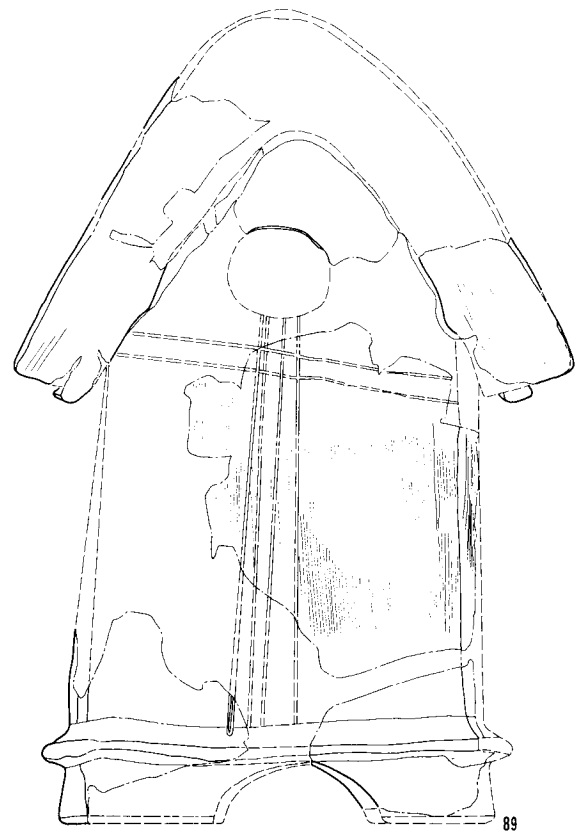
壁は妻、平とも完全には接合しなかった。特に平側の欠損が激しく、入口等の開口部の存在についてはわからない。裾部には突帯が巡っており、その下には妻、平それぞれ1ケ所づつに半円形のくりこみがある。外面は風化が激しいが、突帯より上の部分については全面にわたってタテハケが施されたのであろう。

妻の頂部からやや下がった部分には、円形の透孔が穿たれている。透孔の下方には横方向に沈線が2条施されており、梁を表現している。また、透孔より下の妻の中央部には、梁と直交するように沈線が4条施されているが、これは間柱を表現したものであろう。妻には隅柱の表現はないが、梁行は2間と考えられる。間柱を表現した沈線のうち、左端のものは下端部の突帯の上まで達しているが、これによって突帯を貼りつけた後に壁面の沈線が施されたことがわかる。このほか、片側の妻（第18図左下の左側の妻）には、梁を表現した沈線の約5cm下に横方向の沈線が施されているが、何を表現したのか不明である。

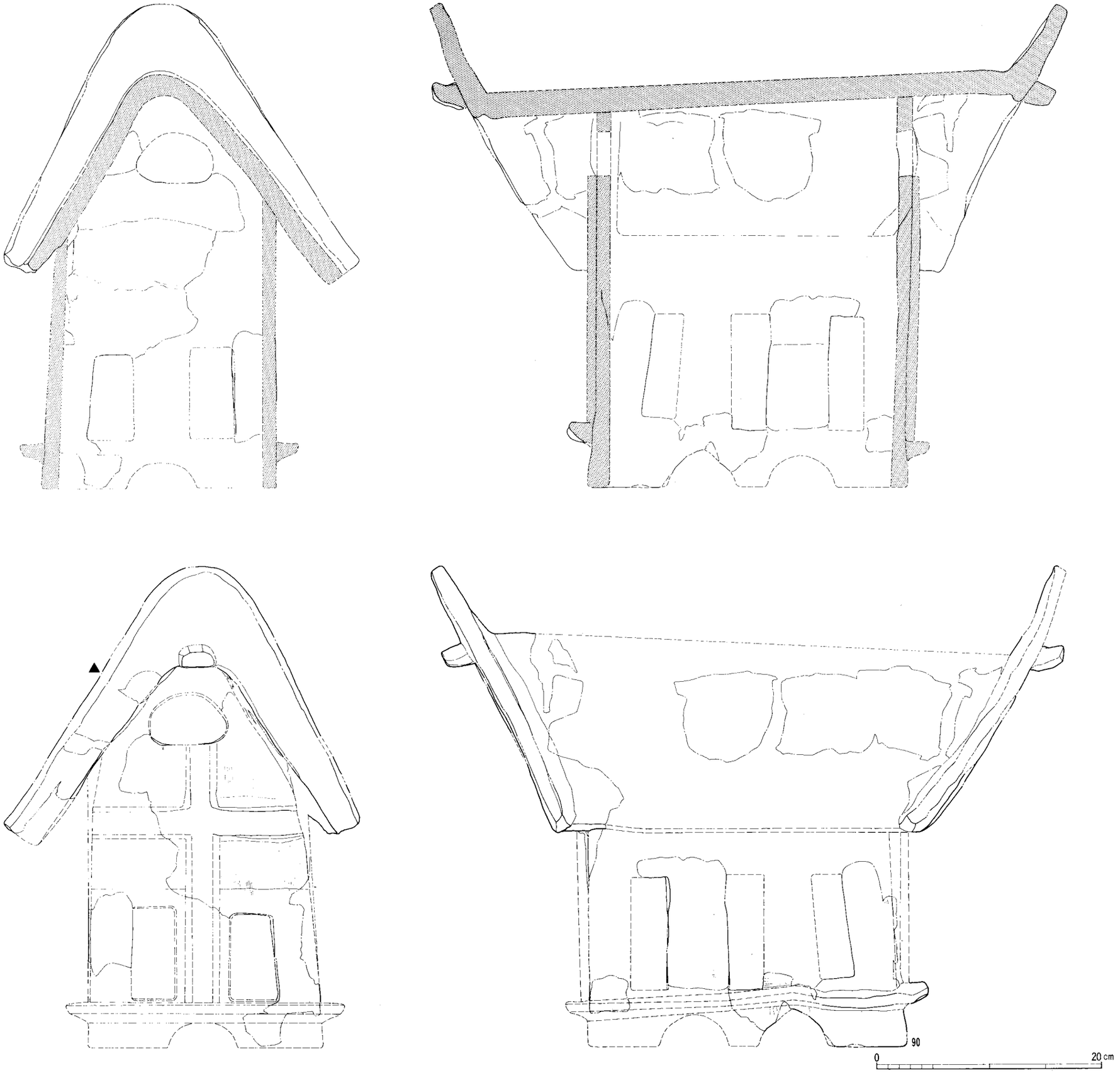








第18図　家形埴輪①（1：4）



第19図　家形埴輪実測図②（1：4）

家形埴輪（90）

やはり、欠損部分が多く、屋根と壁は接合しなかった。器高は復元すると42.7cmとなる。

屋根は切妻で、復元すると左右の破風板の頂部の間の長さは56.3cmとなる。棟木は先端部分のみが表現されている。屋根は妻側から見ると左右非対称で、左側（第19図左下）の方が長い。色調は、▲（第19図左下）より右側が淡橙色であるのに対して、左側は淡褐色と明確に異なっている。外面は風化が激しいが、残りが良い破風板周辺は丁寧にナデられている。沈線や接合痕が認められないことから、網代や押縁は表現されていないと考えられる。

壁は、屋根と接する上端部の欠損が多い。妻側に2カ所、平側に3カ所、長方形の開口部をもつが、平側の開口部の方が上下方向にやや長い。妻の頂部には透孔が穿たれている。透孔の下方には断面が台形の突帯が貼りつけられており、梁と間柱が表現されている。突帯の剥離した部分を観察すれば、突帯と同じ方向に沈線が施されている部分もあった。突帯を貼りつける位置を沈線で示したものであろう。柱が突帯で表現されるのは妻の間柱のみで、隅柱や平の間柱については突帯の接合痕すら見当たらない。おそらく、壁面の開口していない部分が柱に相当するのであろう。したがってこの家形埴輪は桁行3間、梁行2間であると考えられる。このほか、梁を表現した突帯の約4.5cm下方には、89と同様に横方向に沈線が施されている。

開口部の下には突帯が巡っている。突帯の剥離した壁面を観察すれば、突帯の上端付近と下端付近にそれぞれ1条ずつ沈線が横方向に施されている部分があった。やはりこれも突帯を貼りつける位置を示したものであろう。この突帯の下には半円形のくりこみが妻に1カ所、平に2カ所、それぞれ柱の真下にくるように施されている。

外面は風化が激しいが、全面にわたってハケで調整されたようである。タテハケとヨコハケが混在している部分がある。おそらくハケ調整を行った後に沈線を施し、さらに突帯を貼りつけたのであろう。

破風板（91～94）

89と接合しなかった破風板である。風化が激しいため、調整等は不明である。

屋根（95～97）

いずれも屋根の頂部付近の破片である。このうち96・97は妻側の端部にあたる。89の屋根の妻側の端部は両側とも存在することから、96・97は89とは別の家形埴輪の破片であると考えられる。また、95～97は胎土や色調がよく似ていることから、本来同一個体の家形埴輪であった可能性が高い。

95の外面には沈線が施されている。風化が激しいためはっきりしないが、沈線が格子状に交差する部分や斜め方向に平行する部分がみられる。網代を表現しているのであろうか。96・97の外面には破風板の接合痕が残る。

壁（98～104）

98・99は妻の上部である。98は円形の透孔をもつ。99の左端は端面となっており、透孔の一部と考えられる。外面には沈線が施されている。

100～103は妻の可能性のあるもので、100は妻の上端部であろうか。101・102には沈線が施されている。103は妻上部の透孔と考えたが、裾部に施されたくりこみの可能性もある。

104は壁のコーナーの部分である。壁面は下に向かうにつれて広くなる。風化が激しいが、外面の左端には柱を表現した縦方向の沈線がみられる。

突帯（105・106）

105は裾部の突帯付近の破片である。突帯の断面形は、89と異なっており鍵形を呈している。突帯の下にはくりこみの頂部が残る。

106の突帯も鍵形の断面である。105と同一個体のものであろうか。

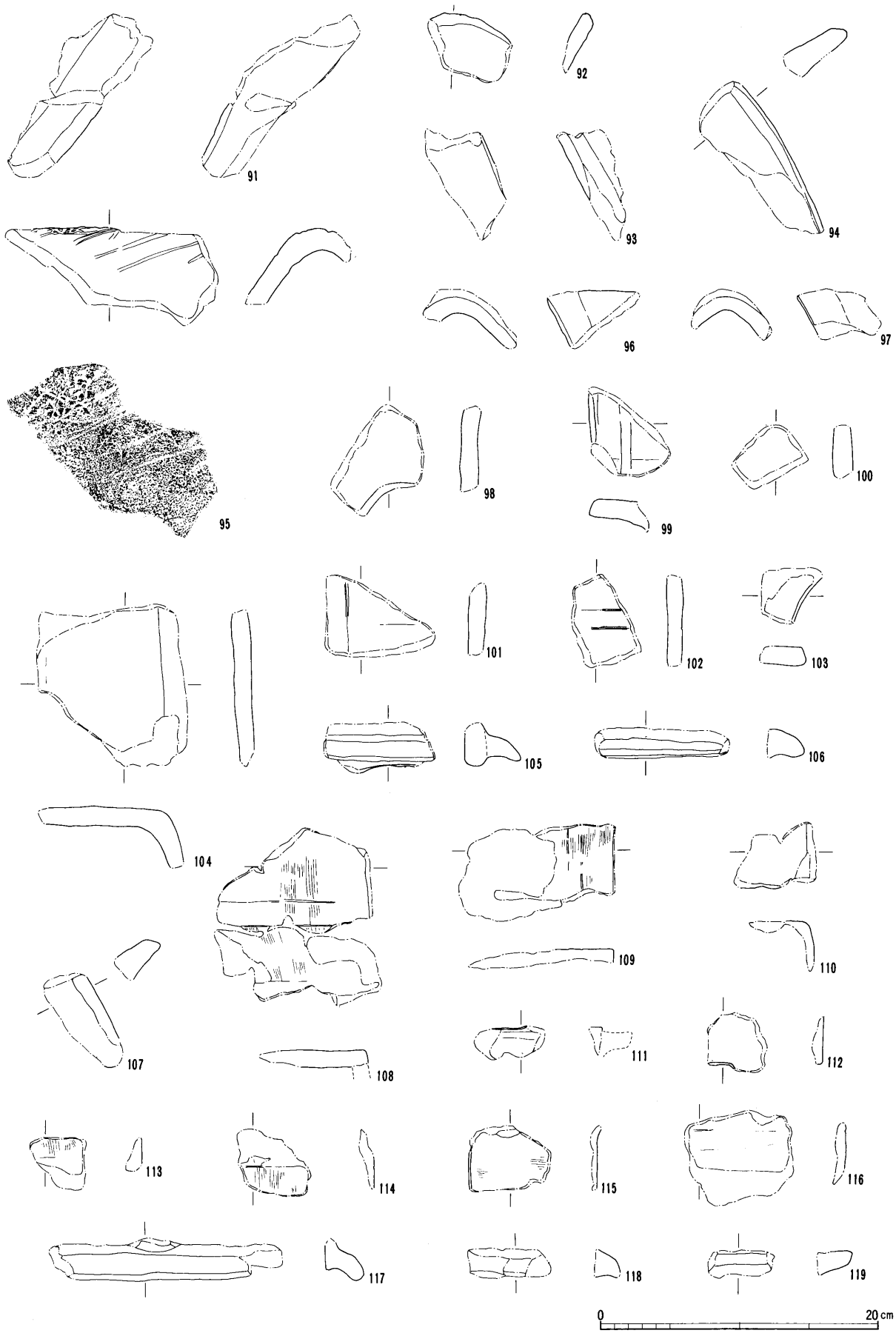
破風板（107）

破風板の下端部付近の破片である。90の破風板の下端部は4つとも存在するため、これとは別個体のものと考えられる。

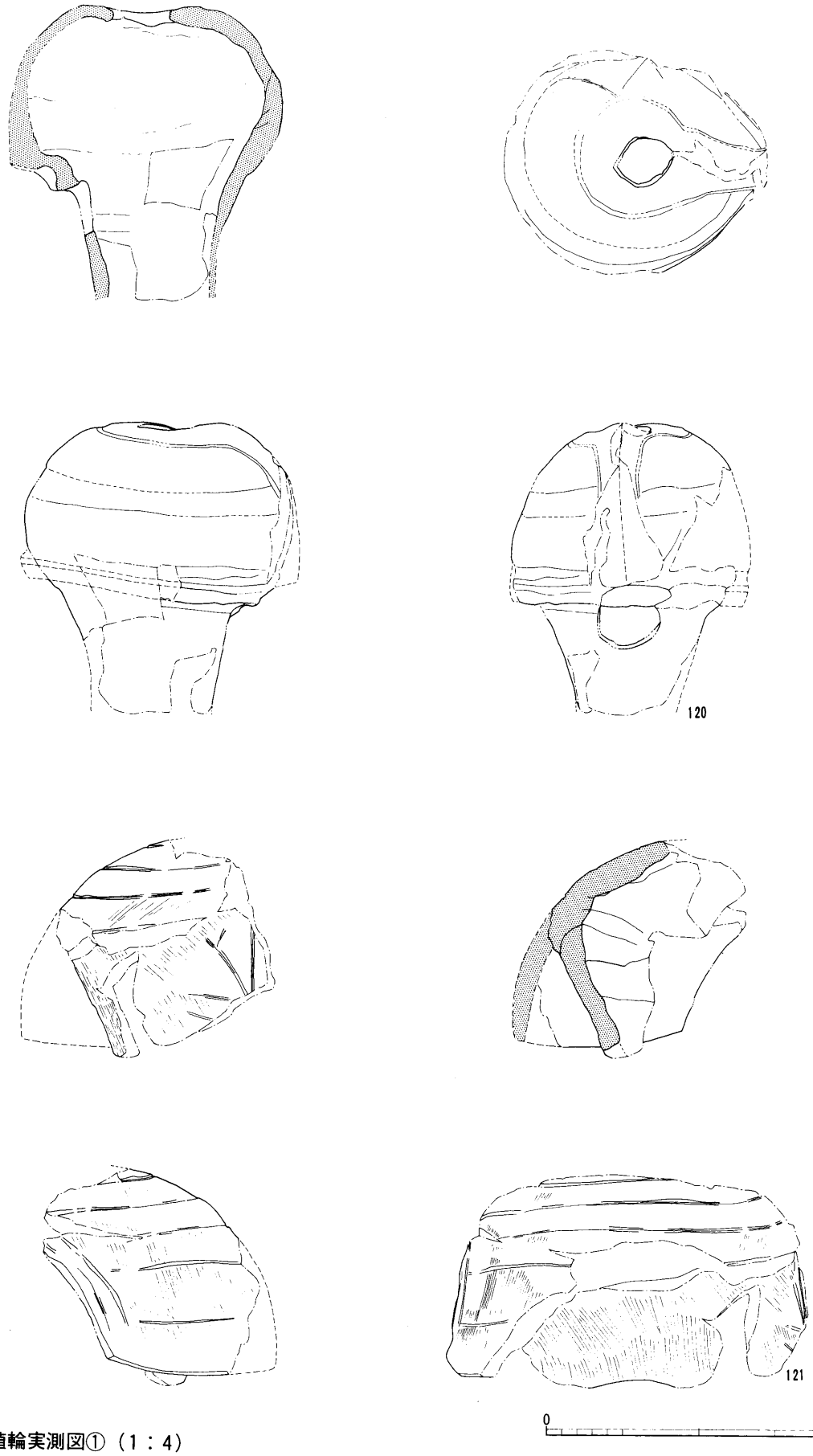
壁（108～116）

108・109の右端は、端面となっている。壁のコーナーの部分であろうか。外面調整はタテハケで、108は横方向に沈線が3条施されている。また109は、縦方向に沈線が2条施されている。ともに90とは接合しないため、これとは別個体のものと考えられる。

110は壁のコーナー部分である。破片の下端が家



第20図　家形埴輪実測図③（1：4）



第21図　形象埴輪実測図①（1：4）

形埴輪の裾になると考えられる。

111・112は開口部付近の破片である。111は開口部の下側であり、突帯を貼りつける前に施された沈線が残る。

113・114は横方向の沈線が施されている。図示しなかったが、この程度の大きさの破片で沈線のないものは多数出土している。

115の左端は端面である。上端部には突帯がみられる。

116には横方向の沈線が1条施されている。中央部には、横方向の突帯が貼りつけられていたようである。

突帯（117～119）

117と118の断面形は、90とは異なっており鍵形を呈している。117の上端には突帯を接合した跡がみられる。柱を表現したものであろう。

甲冑形埴輪（120～124）

冑と草摺が出土している。

冑（120・121）

冑は2個体あるが、ともに衝角付冑を表現したものである。120は本来、冑から草摺までを一体に表現したものと考えられるが、121については、欠損部分が多いこともあってよくわからない。

120は全体に風化が激しいが、外面には冑の構造を示す沈線が施されている。三角板が表現されているが、革綴や鋲留の表現は不明である。正面と頂部には透孔が穿たれている。正面の透孔の上部は凹んでいるが、これは竪眉庇[12]を表現したものであろう。竪眉庇の両側からは突帯が巡っていたとみられるが、現存するのは向かって左側の部分のみである。錣はまったく接合しなかったが、本来は突帯より下に表現されていたものと考えられる。ただ、現存する突帯には接合痕がまったくみられないことから、錣はこれよりも後側に表現されたのであろう。

121は欠損が多く、背面部分のみが現存する。錣は正面から見て右側のみが裾まで残っている。外面調整はタテハケとナナメハケで、沈線によって冑の構造を表現している。錣の端には、外縁に沿うように沈線が2条引かれているが、下端沿いには巡らない。横方向の沈線は5条あるが、一番下のものを除いてほぼ等間隔で引かれている。全体が残っていないためはっきりわからないが、外縁に沿う沈線の位置からみて、上から2本目の沈線より下が錣であると考えられる。現状では三角板等の表現はみられない。このほか、錣によって隠れてしまう円筒部の側面にも放射状の沈線があるが、何を表現したものかわからない。円筒部の背面には透孔の上端が残っている。

草摺（122～124）

草摺と考えられるものが3点出土している。表面は風化が激しいが、いずれも横方向に沈線が施されている。

盾形埴輪（125）

125の左端は盾の側辺である。表面がかなり剥離しているが、側辺に沿う沈線は2条あり、その内側に鋸歯文が描かれている。鋸歯文の沈線は2条になっている部分もある。内向きの鋸歯文の内部には、沈線が横方向に平行して引かれている。外向きの鋸歯文の内部は表面がほとんど剥離しているが、縦方向の沈線が引かれていたようにも見える。裏側の下端には粘土が貼りつけられている。円筒部と接合する部分であろう。

靫形埴輪（126・127）

126と127は胎土等がよく似ていることから、同一個体の可能性が高い。

126は矢筒部の破片である。表面が激しく剥離しているが、沈線が若干残存している。

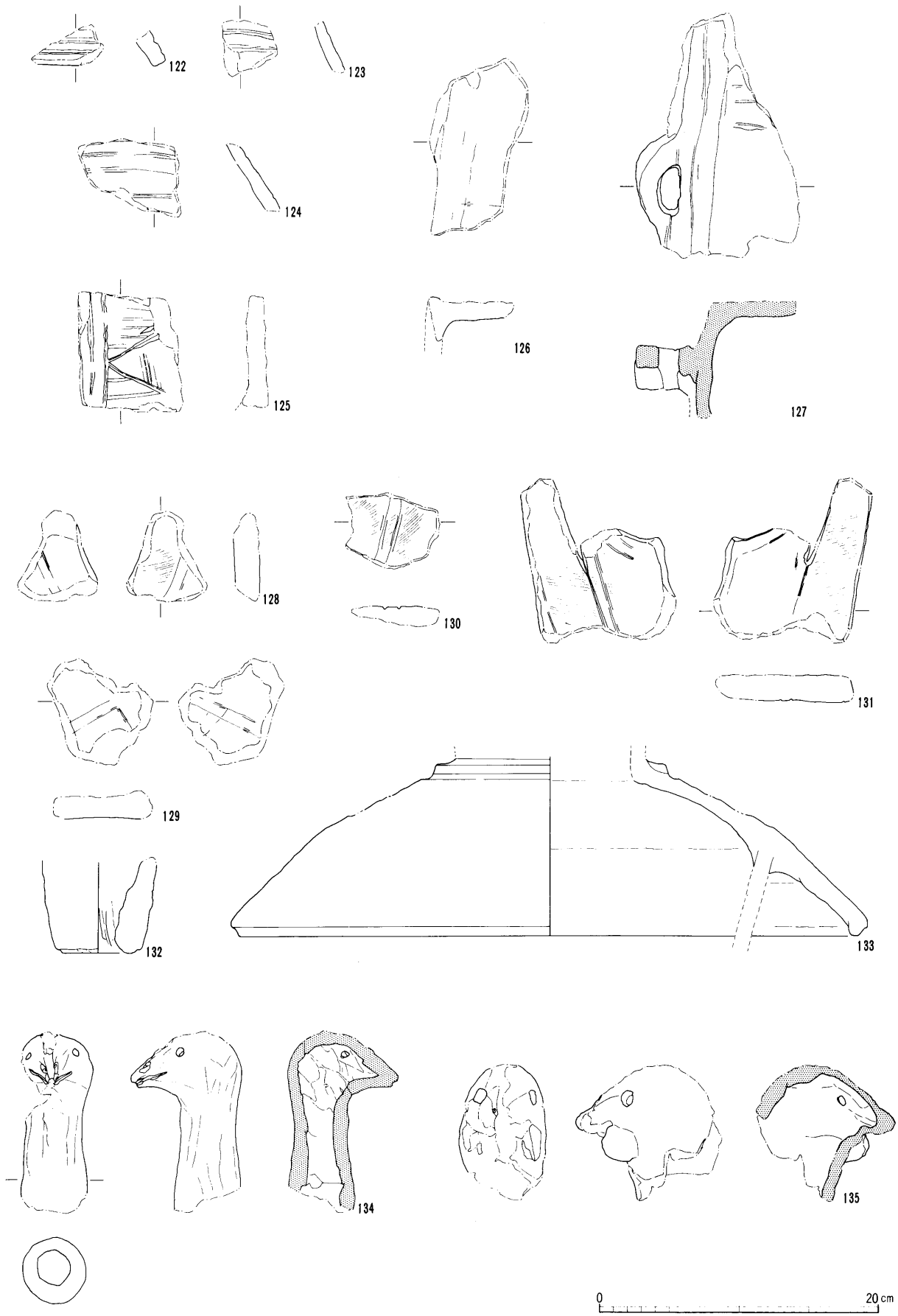
127は矢筒部から背板にかけての破片である。表面の風化が激しい。沈線は残存しているが、文様構成はわからない。

蓋形埴輪（128～133）

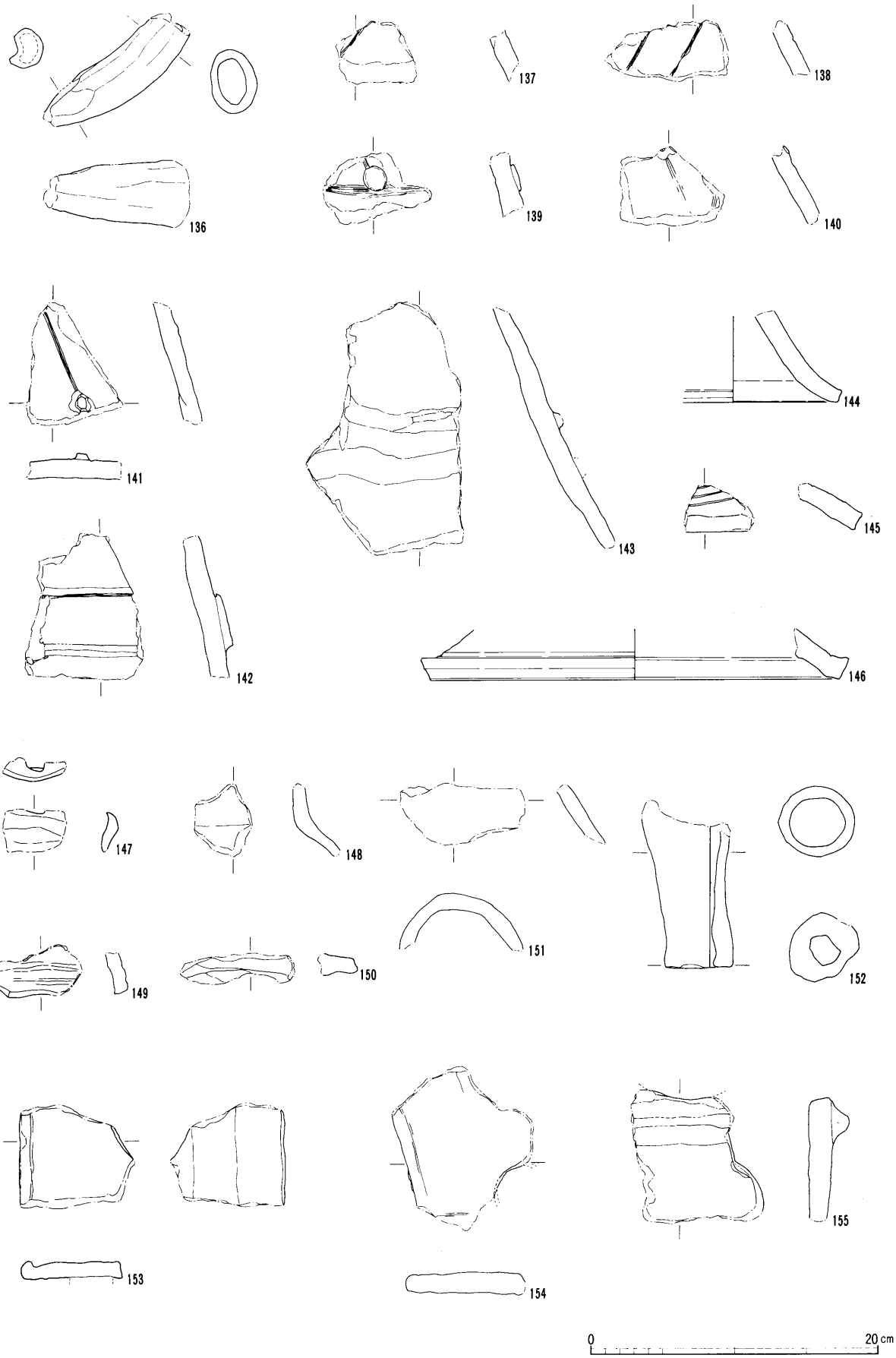
立ち飾り（128～132）

128～131は飾り板の破片である。129の外面調整は不明であるが、他のものにはナナメハケが施されている。いずれも沈線が施されているが、沈線は2条1組で施されていたと考えられる。128には弧状の端面があり、これに沿うように沈線が2条引かれている。131は飾り板の端部である。上部が欠損しているが、上方からの弧状の切り込みが確認できる。

132は軸の下端部である。内面にはシボリメが明瞭に残る。



第22図　形象埴輪実測図②（1：4）



第23図　形象埴輪実測図③（1：4）

笠（133）

風化が激しいが、現状では沈線等の表現は確認できない。軸受部の下端に突帯が巡る。

鶏形埴輪（134・135）

2個体が出土した。焼成は134が硬質で、135が土師質である。

134は水鳥のようにも見えるが、頭頂部に鶏冠を貼りつけたとみられる接合痕があるため、鶏形埴輪とした。外面はナデられており、内面には接合痕が明瞭に残る。目は円孔、鼻孔は刺突で表現されており、上下の嘴の間には沈線が引かれている。肉髯の表現はなく、雌鳥と考えられる。

135も鶏冠を欠損している。134と同様に目を円孔、鼻孔を刺突で表現する。肉髯の表現があることから雄鳥と考えられる。

人物埴輪（136～146）

確実に人物埴輪と判断できるものは136と139～143である。他のものについては、形態や胎土・焼成等の特徴からここに含めた。

腕（136）

中空の腕である。先端が欠損しているが、指の表現は無かったものと考えられる。

胴（137～143）

137・138は胴の可能性があるもので、器壁は内側に向って緩い弧を描いており、外面には左下がりの沈線が施されている。137の焼成等は140とよく似ている。

139～141は衣服の合わせ目付近の破片である。合わせ目は右下がりの沈線で描かれている。また、沈線の上には粘土片が貼りつけられていて、とじ紐の結び目が表現されている。139の横方向の沈線は帯と考えられる。

142と143は帯付近の破片である。142は幅の広い突帯で帯が表現されている。突帯の上端面のみがヘラで面取りされる。右端の突帯より上の部分は、衣服の合わせ目を表す沈線に沿って割れている。143は2条の突帯で帯を表現している。突帯の残りは悪く、接合痕のみが残っている部分が多い。

裾（144～146）

3点とも人物埴輪の可能性があるものである。焼成は144が硬質で、他は須恵質である。

その他の形象埴輪（147～155）

147～155は、形態の不明な形象埴輪である。詳細は観察表に譲り、おもなものについてのみ記述する。

147は上方から穿孔されており、孔のすぐ下は裏面から押圧されている。

152は何かの脚になるとみられる。底はほとんど平らである。

153の左端は肥厚している。右側には円孔の可能性のある弧状の端面があり、裏面には上下方向の接合痕がある。

154の表面には沈線が3条残っている。このうち左端のものは周縁に沿って引かれている。右側には円孔とみられる端面がある。

155は突帯をもつ破片である。突帯のすぐ上は弧状の端面で、円孔の可能性がある。器壁はほぼ平坦で、右端の表側が若干突出している。

（2）土器

土器は墳丘及び周溝から出土したが、盗掘を受けた主体部からはまったく出土しなかった。

A．土師器

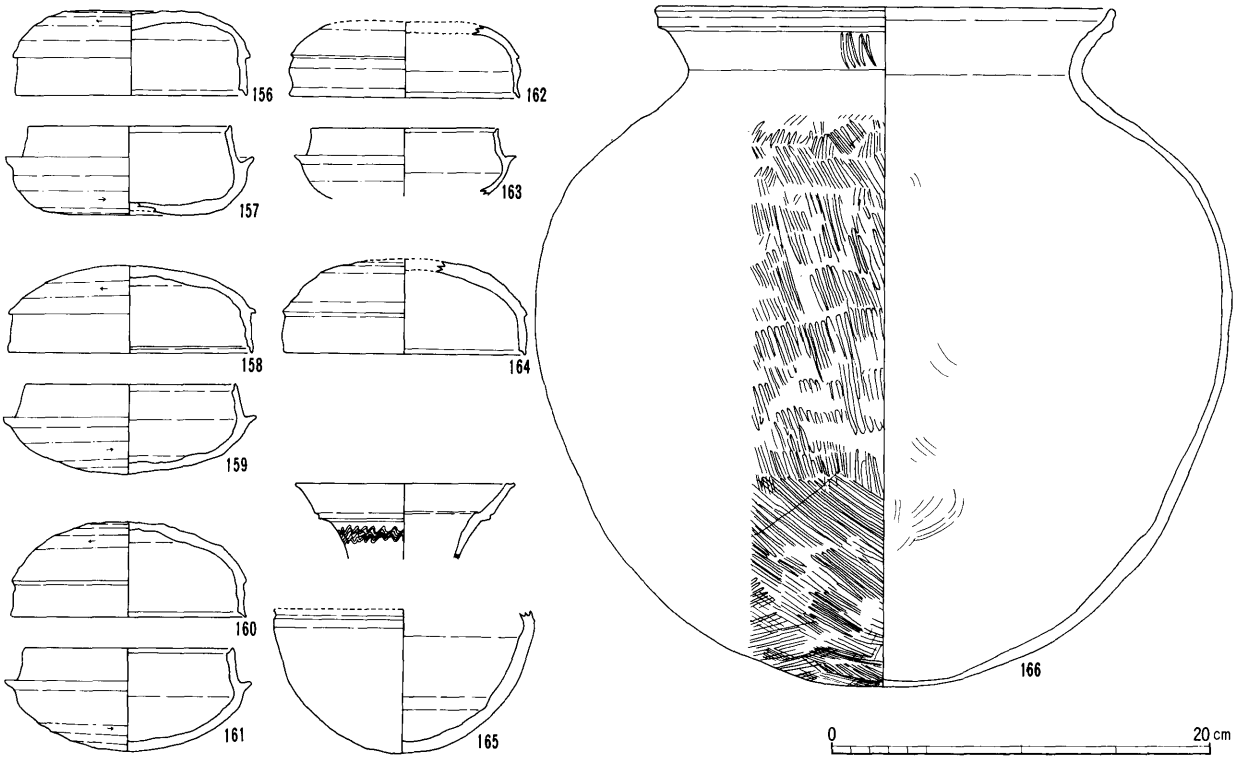
土師器は少なく、高杯や台付甕の小片が周溝などから若干出土したのみである。

B．須恵器（156～166）

須恵器は、おもに墳丘南西部の埴輪列（50～54）の付近と周溝から出土した。図示したもの以外にも小片が若干ある。杯身、杯蓋、瑞、甕があり、田辺編年のＴＫ23形式に相当すると考えられる[13]。

杯身・杯蓋（156～164）のうち156～163は埴輪列のそばに置かれたもので、口縁端部や稜線がシャープに表現されている。156～161のロクロの回転方向は同じで、156と157、158と159、160と161はそれぞれセットになると考えられる。このうち156の天井部と157の底部は比較的平坦につくられており、古い形式の様相を残している。164は周溝から出土したが、156～161と胎土や焼成が異なっており、口縁端部や稜の表現もあまい。

瑞（165）と甕（166）は周溝などから出土したが、本来墳頂部に置かれたものが転落した可能性もある。166の内面は、丁寧なナデによって同心円文状タタキ痕がすり消されている。



第24図　須恵器実測図（１：４）

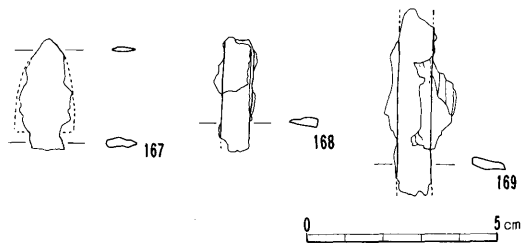
（３）鉄製品（167～169）

鉄製品はすべて主体部（盗掘坑）から出土した。

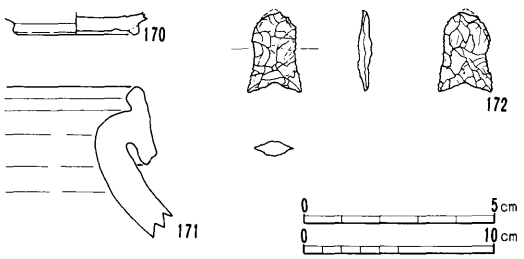
167は鉄鏃の鏃身である。柳葉形のもので、関の部分が欠損している[14]。鏃身の幅は現状で1.5cmで、断面形は片丸であり、茎に近い部分は中空である。

168は鉄鏃の茎部の可能性がある。幅0.8cm、厚さ0.2cmで、他の鉄製品が錆着している。

169は刀子の破片で、幅0.9cmである。表面に木質が残存している。



第25図　鉄製品実測図（１：２）



第26図　その他の遺物実測図（170・171は１：４、172は１：２）

前述したように、主体部からはこのほかに鉄片が数点出土している。錆が激しく原形をとどめていないもので、盗掘の際に混入した後世のものの可能性も考えられる。

２．その他の遺物

弥生時代の石鏃のほか、中世以降の陶器・磁器類が出土している。

（１）弥生時代の遺物（172）

凹基無茎式の石鏃で、断面形は菱形である。古墳築造以前の遺物はこれだけである。

（２）中世以降の遺物（170・171）

調査前から墳丘上には、近世以降のものとみられる陶磁器類が散布していた。墳丘の表土からもこれらは出土したが、周溝の埋土内から出土した中世以降の遺物は山茶椀（170）と陶器甕（171）の２点のみであった。171はＮ字状口縁のもので、常滑窯Ⅳ期[15]のものと考えられる。

Ⅵ. 結　語

1．埴輪列について

門脇北古墳は、外部施設として周溝と埴輪列をもっていた。検出した埴輪列は、本来墳丘を巡っていたと考えられるもので、現存する埴輪の位置から復元すると、直径は約13mとなる。

墳丘の南西部では、埴輪列の円周よりもやや内側に一定の間隔を保って置かれた円筒埴輪（19・34・48）があり、その間に14～15本の埴輪が並べられていた。すなわち「①＋(14～15)＋①＋(14～15)＋①」という規則的な配列がなされていたのである。19～34と34～48（①＋(14～15)＋①）の長さはともに約4.3mであるが、これは埴輪列の円周の約1／9.5に相当する。埴輪列全体にわたってこのような配列が行なわれていたとするなら、「①＋(14～15)＋①」という単位は9ないし10あったと考えることもできる。

墳丘北側の1～11で埴輪の並び方を検討すれば、7は①である19・34・48と同様に、埴輪列の円周よりも若干内側に置かれたようにも見える[16]。また、19から埴輪列の円周上を4.3mの間隔で2回北へ進むと、6～7のあたりが①に相当する。したがって、7が①に相当し、「①＋(14～15)＋①」という配列が墳丘の北側まで及んでいたとみることもできるが、8～11の残存状態が悪いため断言することはできない[17]。「①＋(14～15)＋①」という配列が埴輪列の西半部全域にわたって行なわれた可能性のあることと、各単位ごとに埴輪を埋置する作業が行なわれたことを指摘するだけにとどめたい。

2．形象埴輪について

安濃川流域では、5世紀後半の古墳は埴輪をもつものが多い。墳丘を円筒埴輪が囲繞し、形象埴輪をともなう。しかし6世紀前半になると、墳丘に立てられる埴輪の数は激減し、6世紀中頃にはまったく使用されなくなる[18]。

門脇北古墳の形象埴輪は、周溝や墳丘の各地区から出土した。原位置のわかるものはない。埴輪列内に形象埴輪が樹立されていた可能性もあるが、接合したものは1点もなかった。形象埴輪のなかには、墳頂部や盗掘坑から出土したものがあったり、墳丘の各地区から出土したものが接合して一体となったものがあることから、形象埴輪は本来墳頂部を中心に並べられていたものと考えられる。

家形埴輪は、4個体以上存在したと考えられる。このうち3個体は切妻屋根であった。全容がわかるまでに復元できたものは89・90の2個体のみであったが、ともに妻部の間柱と梁のみが沈線（89）や突帯（90）で強調して表現されていた。90は住居と考えられるが、他のものについてはわからない。

甲冑形埴輪には衝角付冑と草摺が出土した。冑のうち120は、草摺までを一体に成形したと考えられるもので、外面には三角板が表現されている。120は冑と錣の境に突帯が貼りつけられているが、121にはこのような表現はない。このような冑は、120のように頂部や正面に円孔が穿たれるものが多いが、121は背面に円孔が穿たれている。

近年、初期の人物埴輪に冑から草摺までを一体に成形した甲冑形埴輪がともなう場合の多いことが指摘されているが[19]、この種の埴輪の出土例は少なく、県内では他に鈴鹿市寺谷古墳群の出土例があるのみである[20]。

蓋形埴輪は立ち飾りと笠が出土した。131は、鰭が著しく強調されており、京都府上人ケ平14号墳出土のもの[21]とよく似ている。笠は1個体分しか確認できなかったが、出土した立ち飾りとセットになるかどうかはわからない。

門脇北古墳と同じ5世紀後半の古墳で、形象埴輪が良好な状態で出土したものに、松阪市の常光坊谷4号墳がある[22]。形象埴輪は出土状況から、埴輪列と墳丘麓との間に置かれていたと報告されている。家形埴輪1点、人物埴輪5点、馬形埴輪2点、鶏形埴輪2点が出土しているが、これは器財埴輪と人物埴輪が共伴した門脇北古墳とはまったく対照的な様相を呈している。

高橋克壽氏によれば、人物埴輪や動物埴輪は、5世紀後半（第4期）にそれまでとはまったく異なった体系として墳頂とは別の場所に登場し、急速に形

象埴輪の中心的存在になっていくという。そして6世紀（第5期）には器財埴輪は大幅に減少し、人物埴輪を中心とする形象埴輪群は、おもに墳丘の低位置に配置されるようになったという[23]。

つまり、門脇北古墳では人物埴輪という新しい要素はあるものの、依然として器財埴輪を中心とした配列が墳頂で行なわれていたのに対して、常光坊谷4号墳では、すでに人物埴輪を中心とした配列が墳丘の低位置で行なわれていたのである。

安濃川流域における形象埴輪の状況をみれば、人物埴輪と鶏形埴輪が多く、器財埴輪は少ない。門脇北古墳と同じ5世紀後半の殿村1号墳（28）では、人物埴輪と鶏形埴輪が出土したが、器財埴輪は現在のところ確認されていない[24]。これは、この地域においても、人物埴輪を中心とした配列を行なう古墳が、5世紀後半にはすでに存在することを示すものであろう。

5世紀末以降になると、この地域では器財埴輪をもつ古墳はわずかになり、形象埴輪の中心は、完全に人物埴輪に移ったと考えられる[25]。しかし、藤谷埴輪古窯址群（54）では依然として器財埴輪が生産されていることから[26]、6世紀初頭頃までは何種類もの器財埴輪を配置する古墳も存在したのであろう。

いずれにせよ、門脇北古墳は従来の伝統的な要素が濃厚な古墳である。それは単独墳であり、外部施設として周溝と埴輪列を備えていることからも明らかである。安濃川流域では、器財埴輪がまったくみられなくなる6世紀前半頃から古墳の様相は多様化するが、門脇北古墳はその直前の単独墳のあり方を示す好例といえよう。

番号	名称	所在地	墳形	規模(m)	主体部	時期	円筒埴輪	円筒線刻	形象埴輪	備考	文献
	山室2号墳	津市大里野田町字石尾	円墳	−	−	−	○	−	——		10
	墓の谷2号墳	〃 大里睦合町字北石橋	〃	径9×6	−	−	○	−	——		10
	大里西沖遺跡	〃 〃 字西沖					○	○	人物・動物	古墳・円筒埴輪棺・溝	8
	田端古墳	〃 一身田豊野字東田端	円墳	−	−	−	○	−	——		10
	犬頭山古墳	〃 一身田大古曽字ムノ坪	〃	径 7	−	−	○	−	——		10
	コウゼンジ古墳	〃 長岡町字小山田	〃	径13.3	−	−	○	−	——		10
36	カナクラ遺跡	〃 河辺町字鎌倉	古墳か？	−	−	−	○	−	——		10
37	西河辺古墳	〃 〃 〃	−	−	−	−	○	−	有		10
39	西岡古墳	〃 〃 字西岡	方墳	一辺13	−	5世紀末~6世紀初	○	−	家		7
1	門脇北古墳	〃 〃 字門脇	〃	径17.5	木棺直葬	5世紀後半	○	−	家・甲冑・靱・盾・蓋・鶏・人物		43
	垂水古墳	〃 垂水	円墳	−	−	−	○	−	——	所在地不明	10
56	池ノ谷古墳	〃 〃 字池ノ谷	前方後円墳	全長85	−	5世紀前半	○	−	——		10
53	元井池古墳	〃 半田字元井	円墳	径 20	木棺直葬	6世紀前半	○	○	有		9・11・46
	くすみ塚古墳	〃 〃 字立花	〃	径 12	−	−	○	−	——		10
47	鎌切3号墳	〃 神戸字鎌切	前方後円墳	全長37.5	〃	6世紀前半	○	−	——		4・11・46
	鎌切5号墳	〃 〃 〃	円墳	径 12	〃	5世紀末~6世紀初	−	○	——		4・11・46
	鎌切6号墳	〃 〃 〃	〃	径 17	〃	〃	○	−	——		4・11・46
45	稲葉3号墳	〃 野田字稲葉	〃	径 18	〃	6世紀初	○	−	人物・動物		11·37·38·46
45	稲葉4号墳	〃 〃 〃	〃	径 13	〃	〃	○	○	人物		11·37·38·46
45	稲葉5号墳	〃 〃 〃	〃	径 15	〃	〃	○	−	家・鶏・人物		11·37·38·46
28	殿村1号墳	〃 殿村字井尻	前方後円墳	全長(28)	−	5世紀後半	○	−	鶏・人物		6
27	メクサ3号墳	〃 分部字メクサ	方墳	一辺11	木棺直葬	6世紀前半	○	−	——		12
	桐狭間1号墳	〃 片田田中町桐狭間	方墳	径 12	〃	−	−	−	有		10
34	日余1号墳	安芸郡安濃町日余字寒谷	方墳	一辺13×16	〃	6世紀前半	○	−	有		2·37·38·51
35	堂山1号墳	〃 〃 清水字堂山	〃	一辺13×14	〃	〃	○	−	人物		14·37·38·43·51
	中相野古墳	〃 〃 草生字中相野	前方後円墳	全長30.5	−	−	○	−	家		1・43・51
16	明合古墳	〃 〃 田端上野字西観	造出し付方墳	全長81	−	5世紀前半	○	−	有		13·37·38·51
	〃陪塚1号方墳	〃 〃 〃 〃	方墳	一辺11.7	−	−	○	−	——		13·43·51
	〃陪塚2号方墳	〃 〃 〃 〃	〃	一辺22	−	−	○	−	——		13・51
	〃陪塚3号方墳	〃 〃 〃 〃	〃	−	−	−	−	−	蓋・盾		13·37·38·51
	〃陪塚4号方墳	〃 〃 〃 〃	〃	一辺16×15	−	−	○	−	家・盾・靱?		13・51
	〃陪塚5号方墳	〃 〃 〃 〃	〃	一辺15.1	−	−	○	−	−		13・51
	赤塚古墳	〃 〃 東観音寺字北浦	前方後円墳	全長30	石室か？	5世紀末~6世紀初	○	−	家・蓋		51
20	岡南4号墳	〃 〃 川西字岡副	〃	全長31.5	−	−	○	−	——		1・51
	藤ケ森古墳	〃 〃 〃 字藤ケ森	円墳	径 14	−	−	?	−	?	埴輪の種類は不明	1・51
	南光寺南古墳	〃 〃 今徳字北出	〃	径 27	−	6世紀前半	○	−	——		1・42・51
22	迎山遺跡	〃 〃 〃 字迎山	−	−	−	5世紀末~6世紀初	○	−	家・盾・蓋・人物	遺構は不明	5・51
	丸岡C2号墳	〃 〃 妙法寺字丸岡	−	−	石室か？	5世紀後半~6世紀初	○	−	馬		1・43・51

第3表　津市周辺埴輪出土古墳一覧表[27]

番号	名　称	所在地	時　期	円筒埴輪	形象埴輪	備　考	文　献
54	藤谷埴輪古窯址群	津市半田字藤谷	5世紀~6世紀初	○	家・靱・盾・蓋・鶏・人物・動物		3·11·37·38·43·44·45·46·47·50
57	法ヶ広古窯跡	〃垂水字法ヶ広	〃	○			11·39·46
55	久居古窯址群	久居市藤ヶ丘町	〃	○			15·43·46
	内多古窯跡	安芸郡安濃町内多字馬場·走り下戸	5世紀後半	○	有		34·43·46·51

第4表　津市周辺埴輪出土古窯跡一覧表[28]

（註）

1　小玉道明ほか『坂本山古墳群・坂本山中世墓群』津市教育委員会　1970年

2　1984年津市教育委員会が発掘調査。

3　三重大学歴史研究会原始古代史部会「長谷山群集墳分布調査報告書」『ふびと』40号　1983年

4　1975年津市教育委員会が発掘調査。

5　浅生悦生氏と田中秀和氏のご教示による。遺物（鈴木敏雄氏旧所蔵資料）は津市教育委員会が保管。『鈴木敏雄氏遺稿・旧蔵資料目録続編－ガラス乾板目録・正続索引－』皇學館大學史料編纂所　1994年　浅生悦生・田中秀和「第一編　考古編」『安濃町史』資料編　安濃町　1994年

6　中村光司「西岡古墳」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ』三重県埋蔵文化財センター　1993年

7　19・34・48は確実に円筒埴輪と判断できるものであった。

8　松阪市八重田7号墳では、埴輪列のなかに形象埴輪が集中して立てられている部分があり、ここから供献のための須恵器が出土している。下村登良男『八重田古墳群発掘調査報告書』松阪市教育委員会　1981年

9　34と35の間には、埴輪2本分の欠損部分がある。したがって、34と48の間には15本の埴輪が立てられたものとみられる。

10　川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻2号　1978年　川西宏幸「円筒埴輪総論」『古墳時代政治史序説』1988年

11　前掲註8　県内の「淡輪技法」の埴輪について述べたものに、次の文献がある。中森成行『郡山遺跡群発掘調査報告Ⅰ』鈴鹿市教育委員会　1983年、坂靖・穂積裕昌ほか『木ノ本釜山（木ノ本Ⅲ）遺跡』和歌山市教育委員会　1989年、鈴木敏則「伊勢の淡輪系円筒埴輪」『Mie　history』vol.3 1991年

12　末永雅雄『増補日本上代の甲冑』1981年

13　田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古クラブ　1966年

14　形態および部分名称については飯塚武司「後期古墳出土の鉄鏃について」『東京都埋蔵文化財センター研究論集Ⅴ』　1987年を参考にした。

15　赤羽一郎『常滑焼』　1984年

16　第4図および第7図参照。

17　8は細部実測（1／10）を行なう前に転落したため、詳細な出土状況を記録することはできなかった。また、9～11は転落寸前の状態であった。航空写真や航空測量図を見る限り、7が他のものより内側に置かれた可能性は高いと考えられるが、8～11の状態から断定するまでには至らない。

18　萱室康光・池端清行・米山浩之『メクサ3号墳発掘調査報告』津市教育委員会　1991年

19　若松良一「埴輪の種類と編年　人物・動物埴輪」『古墳時代の研究』9　古墳Ⅲ　埴輪　1992年

20　1992～1993年鈴鹿市教育委員会が発掘調査。『寺谷古墳群現地説明会資料』鈴鹿市教育委員会　1993年

21　松木武彦「蓋形埴輪の変遷と画期－畿内を中心に－」『鳥居前古墳－総括編－』大阪大学文学部考古学研究室　1990年

22　下村登良夫・西田尚史・福田昭『中部平成台団地埋蔵文化財発掘調査報告書』松阪市教育委員会　1990年

23　高橋克壽「器財埴輪の編年と古墳祭祀」『史林』第71巻2号　1988年　高橋克壽「埴輪の種類と編年　器財埴輪」『古墳時代の研究』9　古墳Ⅲ　埴輪　1992年

24　1990年津市教育委員会が発掘調査。形象埴輪については米山浩之氏のご教示による。

25　遺構にともなうものではないが、安濃町迎山遺跡（22）から5世紀末～6世紀初頭のものとみられる埴輪が出土しており、このなかに器財埴輪（蓋・石見型盾）も確認されている。（倉田直純・堀田隆長・藤田充子「迎山遺跡」『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告－第1分冊－』三重県埋蔵文化財センター　1990年）ただし、石見型盾形埴輪は人物埴輪が配列の中心となる6世紀に盛行するものであり、蓋形埴輪も6世紀まで製作されるものである（前掲註23）。したがって、迎山遺跡の形象埴輪も人物埴輪を中心としたものと考えられる。

26　靱・盾・蓋があり（上村安生ほか『形象埴輪の出土状況』第17回埋蔵文化財研究会　1985年、上村安生「三重県内出土の形象埴輪」『三重県史研究』第2号　1986年）、石見型盾形埴輪と靱形埴輪（5世紀代で消滅する1類のもの）が共伴することが確認されている（前掲註23）。

27　本表は、上村安生ほか『形象埴輪の出土状況』第17回埋蔵文化財研究会　1985年、上村安生「三重県内出土の形象埴輪」『三重県史研究』第2号　1986年、『第16回津の町のうつりかわり展－古墳時代の津－』津市教育委員会　1988年を参考にして作成した。浅生悦生、萱室康光、竹内英昭、田中秀和の各氏には、本表の作成に関して種々のご教示をいただいた。

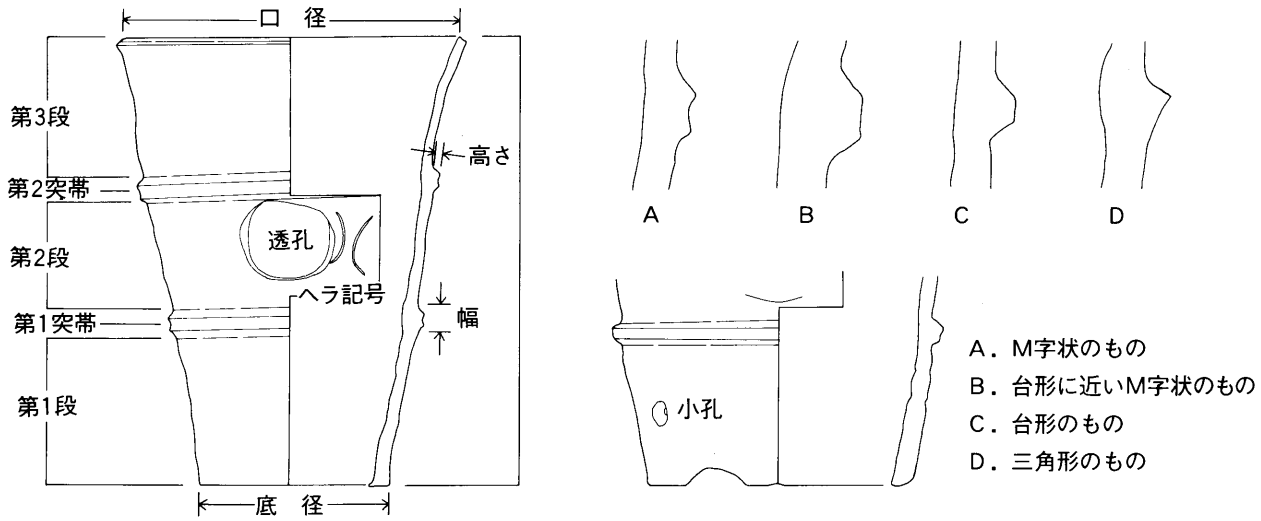
28　前掲註27

参考文献

1 『中南勢開発地域遺跡地図』三重県文化財連盟 1971年
2 吉村利男 『近畿自動車道埋蔵文化財調査報告Ⅱ －日余1号墳－』三重県文化財連盟 1974年
3 『三重県埋蔵文化財年報6 昭和50年度』三重県教育委員会 1976年
4 『三重県埋蔵文化財年報15 昭和59年度』三重県教育委員会 1985年
5 倉田直純・堀田隆長・藤田充子「迎山遺跡」『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告－第1分冊－』三重県埋蔵文化財センター 1990年
6 『平成2年度三重県埋蔵文化財センター年報2』三重県埋蔵文化財センター 1991年
7 中村光司「西岡古墳」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ』三重県埋蔵文化財センター 1993年
8 『大里西沖遺跡現地説明会資料』三重県埋蔵文化財センター 1994年
9 小玉道明ほか『元井池古墳発掘調査報告』津市教育委員会 1969年
10 『津市遺跡地図』津市教育委員会 1988年
11 『第16回津の町のうつりかわり展－古墳時代の津－』津市教育委員会 1988年
12 萱室康光・池端清行・米山浩之『メクサ3号墳発掘調査報告』津市教育委員会 1991年
13 三重大学歴史研究会原始古代史部会「三重県安芸郡明合古墳について」『ふびと』23号 1965年
14 三重大学歴史研究会原始古代史部会『堂山1号墳』安濃村教育委員会 1974年
15 小玉道明・山澤義貴『久居古窯址群発掘調査報告－2号窯，4号窯』久居古窯址群発掘調査団 1968年
16 下村登良男『八重田古墳群発掘調査報告書』松阪市教育委員会 1981年
17 下村登良夫・西田尚史・福田昭『中部平成台団地埋蔵文化財発掘調査報告書』松阪市教育委員会 1990年
18 福田昭『口南戸古墳発掘調査報告書』松阪市教育委員会 1991年
19 下村登良夫『神前山1号墳発掘調査報告書』明和町教育委員会 1973年
20 大河内光夫・山崎義夫『天王壇古墳』本宮町教育委員会 1984年
21 中島洋一・塚田良道・太田博之・滝沢誠・藤川智之『酒巻古墳群』行田市教育委員会 1988年
22 『鴨谷東古墳第1次発掘調査概報』立命館大学文学部 1887年
23 『鴨谷東古墳第2次発掘調査概報』立命館大学文学部 1889年
24 西谷真治・置田雅昭『ニゴレ古墳』弥栄町教育委員会 1988年
25 木下亘『史跡乙女山古墳 付高山2号墳』河合町教育委員会 1988年
26 高橋工・高井健司・岡村勝行ほか『長原遺跡発掘調査報告Ⅳ』財団法人大阪市文化財協会 1991年
27 福島慶純・西村彰滋・野口珠美『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅳ（埴輪編）』財団法人鳥取県教育文化財団 1982年
28 今津節生ほか『東国の埴輪』福島県立博物館 1988年
29 高橋美久仁『京都府の埴輪』京都府立山城郷土資料館 1991年
30 岡崎晋明・中村潤子『大和の埴輪』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館 1984年
31 猪熊兼勝・小林謙一・松本修自「家形埴輪の世界」『小建築の世界』奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1984年
32 野上丈助『大阪府の埴輪』大阪府立泉北考古資料館 1982年
33 『地下に眠る神戸の歴史展Ⅵ』神戸市教育委員会 1988年
34 『鈴木敏雄氏遺稿・旧蔵資料目録続編－ガラス乾板目録・正続索引－』皇學館大學史料編纂所 1994年
35 浅生悦生・萱室康光ほか『津とその周辺』三重郷土会 1989年
36 石野博信「総論」『古墳時代の研究』 9 古墳Ⅲ 埴輪 1992年
37 上村安生ほか『形象埴輪の出土状況』第17回埋蔵文化財研究会 1985年
38 上村安生「三重県内出土の形象埴輪」『三重県史研究』第2号 1986年
39 岡田登「三重県津市垂水発見の埴輪窯について－藤形の贄土師部との関連をめぐって」『皇學館論叢』第15巻第2号 1982年
40 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻2号 1978年
41 川西宏幸「円筒埴輪総論」『古墳時代政治史序説』 1988年
42 鈴木敏雄『村主村考古誌考』
43 鈴木敏則「伊勢の淡輪系円筒埴輪」『Mie history』vol.3 1991年
44 高橋克壽「器財埴輪の編年と古墳祭祀」『史林』第71巻2号 1988年
45 高橋克壽「埴輪の種類と編年 器財埴輪」『古墳時代の研究』 9 古墳Ⅲ 埴輪 1992年
46 竹内英昭「伊勢地方の埴輪事情」『天花寺山』一志町・嬉野町遺跡調査会 1991年
47 橋本滋「藤谷遺跡－埴輪古窯跡－」『津市民文化』第4号津市教育委員会 1977年
48 松木武彦「蓋形埴輪の変遷と画期－畿内を中心に－」『鳥居前古墳－総括編－』大阪大学文学部考古学研究室 1990年
49 若松良一「埴輪の種類と編年 3人物・動物埴輪」『古墳時代の研究』 9 古墳Ⅲ 埴輪 1992年
50 贄元洋・小林久彦『水神古窯』豊橋市教育委員会 1987年
51 浅生悦生・田中秀和「第一編 考古編」『安濃町史』資料編 安濃町 1994年

円筒埴輪観察表凡例

1．報告書番号の１～57は円筒埴輪列に樹立されていたもので、出土位置番号（第６図～第８図）に対応する。
2．部分名称、突帯の形態については図のとおりである。
3．長さはすべてcm単位である。
4．「口径」は、口縁部の円周を円周率〔π≒3.14〕で割った数値である。（　）内の数値は反転復元もしくは推定によるものである。
5．「器高」のうち、（　）内の数値は推定値である。
6．「底径」は、底部の円周を円周率〔π≒3.14〕で割った数値である。（　）内の数値は反転復元もしくは推定によるものである。
7．「口径」および「底径」は４・６の方法で得た平均値であるため、実測図とは必ずしも一致しない。
8．「透孔」の「大きさ」は縦×横の数値である。
9．「外面調整」および「内面調整」の　〈　〉　内の数値は、ハケメの１cmあたりの条数を示す。
10．「底面」の「巻き」は、円筒埴輪を上から見た状態の巻合わせの方向を図示したものである。
11．「焼成」は「硬」としたもののみが硬質で、その他のものは土師質である。



第27図　円筒埴輪部分名称および突帯の分類図

朝顔形埴輪観察表凡例

1．部分名称、突帯の形態については円筒埴輪と同じである。
2．長さはすべてcm単位である。
3．「口径」の（　）内の数値は反転復元もしくは推定によるものである。
4．「透孔」の「大きさ」は縦×横の数値である。
5．「外面調整」および「内面調整」の　〈　〉　内の数値は、ハケメの１cmあたりの条数を示す。
6．「焼成」は「硬」としたもののみが硬質で、その他のものは土師質である。

番号	分類	出土位置	法量			突帯			透孔		外面調整〈ハケメ本数〉		
			口径	器高	底径	形態	幅	高さ	形態	大きさ	第1段	第2段	第3段
1	Ⅰ	Ⅰ区埴輪列	−	−	17.5	A	2.2	0.5	円	−	タテハケ後ヨコハケ〈5本〉	?	−
2	Ⅰ	〃	−	−	15.2	A	2.2	0.7	円	6.0×6.0 6.0×5.2	タテハケ後B種ヨコハケ〈6本〉	→	−
3	Ⅰ	〃	−	−	17.7	B	2.0	0.7	円	8.7×7.9	タテハケ後ヨコハケ〈6～7本か？〉	?	?
4	Ⅱ	〃	−	−	15.1	B	2.7	0.6	円	−	タテハケ〈7本〉	タテハケか?	−
5		〃	−	−	15.3	C	2.8	0.6	円	−	?	?	−
6	Ⅰ	Ⅱ区埴輪列	−	−	19.3	B	2.5	0.9	円	−	タテハケ後B種ヨコハケ〈7本〉	?	−
7		〃	−	−	15.8	B	2.7	0.7	円	−	?	?	−
8	Ⅰ－b	〃	−	−	−	−	−	−	−	−	タテハケ後B種ヨコハケ〈？〉	−	−
9	Ⅱ－e	〃	−	−	15.0	B	1.8	0.5	円	−	おそらくタテハケのみ〈5～6本〉	?	−
10	Ⅱ－e	〃	−	−	16.0	A	2.0	0.6	−	−	タテハケ〈6本〉	?	−
11	Ⅰ－b	〃	(27.5)	(35.6)	(15.0)	A	2.4	0.6	円	?×6.8	タテハケ後B種ヨコハケ〈6～7本〉最下部ヨコナデ	タテハケ後B種ヨコハケ〈6～7本〉	→
12		〃	−	−	(15.0)	−	−	−	−	−	?	−	−
13	Ⅱ－a	〃	(24.7)	(35.4)	15.3	A D	1.9	0.7	円	?×5.8	タテハケ〈6～7本〉	→	→ 口縁付近に一条の沈線
14	Ⅰ－c	〃	−	−	16.7	B	1.8	0.5	円	−	タテハケ〈6～7本〉	(タテハケ後?) B種ヨコハケ〈5本〉	−
15	Ⅰ	〃	−	−	17.0	C	2.2	0.6	円	?	(タテハケ後?)B種ヨコハケ〈5本〉	?	−
16	Ⅰ	〃	−	−	13.5	B？	1.5	0.6	−	−	(タテハケ後?) B種ヨコハケ〈5本か？〉	?	−
17	Ⅲ	〃	−	−	16.6	C	1.6	0.7	円	−	板ナデ	?	−
18	Ⅱ－e	〃	−	−	15.4	C	1.5	0.6	円	−	タテハケ〈6本〉	?	−
19	Ⅰ－b	〃	26.7	35.7	15.9	A	2.3	0.6	円	7.4×6.4	タテハケ後B種ヨコハケ〈6～7本〉最下部ヨコナデ	タテハケ後B種ヨコハケ〈6～7本〉	→
20		〃	−	−	(15.2)	−	−	−	−	−	?	−	−
21		〃	−	−	(16.2)	C	1.9	0.6	−	−	?	?	−
22	Ⅰ	〃	−	−	17.8	C	2.1	0.8	円	−	タテハケ後ヨコハケ〈4～5本〉	?	−
23	Ⅰ	〃	−	−	18.3	C	2.1	0.6	円	−	タテハケ後ヨコハケ〈5本〉	(タテハケ後ヨコハケか?)	−
24	Ⅱ－e	〃	−	−	13.3	C	1.7	0.6	−	−	タテハケ〈7本〉	−	−
25	Ⅱ	〃	−	−	17.5	C	2.0	0.7	円	−	タテハケ〈5本〉	→	−
26	Ⅰ	Ⅲ区埴輪列	−	−	17.0	B	2.0	0.6	円	−	タテハケ後ヨコハケ〈3～4本か？〉	?	−
27		〃	−	−	15.8	C	1.8	0.9	−	−	(ヨコハケか？)	?	−

第5表　円筒埴輪観察表 ①

内面調整	底面		ヘラ記号	小孔	焼成	色調	胎土	備考	残存度	登録番号
	巻き	圧痕								
指圧　タテナデ	◎	○			良	黄　褐	粗　0.5cm以下の石粒を含む。		2／5	001-01
タテナデ		○			良	淡　黄	0.3cm以下の石粒を含む。		3／5	002-01
指圧	◎				良	黄　褐	1cm以下の石粒を含む。		3／5	003-01
指圧　第1段下半ヘラケズリ		○			良	淡　橙	やや粗　0.5cm以下の石粒を含む。		1／2	004-01
指圧	◎				良	淡　黄	密　0.5cm以下の石粒を含む。		1／2	005-01
指圧	◎	○			良	黄　褐	1cm以下の石粒を含む。		1／2	010-01
指圧　タテナデ	◎				軟	淡　黄	密　0.5cm以下の石粒を含む。		1／2	011-01
					硬	黄　白			小片	－
指圧　タテナデ	◎	○			良	黄　褐	0.3cm以下の石粒を含む。		1／3	012-01
指圧　タテナデ	◎	○			良	黄　褐	0.3cm以下の石粒を含む。		2／5	013-01
指圧　タテナデ　口縁部ヨコハケ〈6～7本〉　第1段下半ナナメナデ　第2タガの裏にヨコナデ	◎		)(		硬	黄　白	0.3cm以下の石粒を含む。	第1段外面にヘラでつけたような痕跡あり。	1／2	014-01
?					軟	黄　褐	0.5cm以下の石粒を含む。		1／5	016-01
指圧　口縁部ヨコハケ〈6~7本〉	◎	○			硬	黄　白	0.3cm以下の石粒を含む。		2／3	017-01
指圧	◎				軟	黄　褐	0.5cm以下の石粒を含む。		1／2	018-01
指圧		○			良	黄　褐	粗　0.5cm以下の石粒を含む。		3／5	019-01
指圧		○			軟	黄　褐	0.1cm以下の石粒を若干含む。		1／3	020-01
タテナデ		○		○	良	淡赤橙	0.5cm以下の石粒を含む。	底部は自重のため大きく沈む。	1／2	021-01
指圧　タテナデ	◎	○			良	黄　褐	やや粗　0.6cm以下の石粒を含む。	底部大きく歪む。	2／5	022-02
タテナデ　口縁部ヨコハケ〈6～7本〉　第2タガの裏にヨコナデ	◎		)(		硬	淡青灰	0.4cm以下の石粒を若干含む。		4／5	041-01
指圧					軟	黄　褐	0.5cm以下の石粒を含む。		1／6	023-01
指圧					軟	淡　黄	細　0.3cm以下の石粒を含む。		1／4	024-01
指圧　タテナデ	◎	○			良	黄　褐	0.8cm以下の石粒を若干含む。	底部大きく歪む。	2／5	025-01
ナナメナデ	◎	○			良	黄　褐	やや粗　0.6cm以下の石粒を含む。		1／4	026-01
指圧　タテナデ	◎	○			良	淡　黄	0.6cm以下の石粒を含む。		1／4	027-01
指圧　ナナメハケ	◎	○			軟	淡　黄	やや粗　0.5cm以下の石粒を含む。		2／5	028-01
指圧	◎	○			良	黄　褐	0.2cm以下の石粒を含む。		1／3	034-02
指圧　タテナデ	◎	○			良	黄　褐	0.2cm以下の石粒を含む。	底部自重のため大きく沈む。	2／5	046-02

番号	分類	出土位置	法量			突帯			透孔		外面調整〈ハケメ本数〉		
			口径	器高	底径	形態	幅	高さ	形態	大きさ	第1段	第2段	第3段
28		Ⅲ区埴輪列	−	−	16.4	A	1.8	1.0	円	−	(タテハケか？)	？	−
29	Ⅰ	〃	−	−	17.8	C	1.8	0.7	円	7.1×5.4	タテハケ後B種ヨコハケ〈5～6本〉	？	−
30	Ⅰ	〃	−	−	17.8	C	2.1	0.7	円	−	タテハケ後ヨコハケ〈5本〉	？	？
31	Ⅰ	〃	−	−	15.0	C	1.9	0.8	−	−	タテハケ後ヨコハケ〈5本〉	(ヨコハケか？)	−
32		〃	−	−	15.7	A	1.9	0.7	−	−	(タテハケ後？ヨコハケか？)〈6~7本〉(最下部ヨコナデか？)	？	−
33		〃	−	−	16.1	A	2.2	0.4	円	−	(タテハケ後ヨコハケか？)	？	−
34	Ⅰ－b	〃	−	−	15.9	A	2.0	0.6	円	？×7.5	タテハケ後B種ヨコハケ〈5本〉最下部ヨコナデ	タテハケ後B種ヨコハケ〈5本〉	⟶
35	Ⅳ－a	〃	−	−	(17.2)	B	2.1	0.7	円	−	？	？	−
36		〃	−	−	14.6	C	2.2	0.6	円	−	？	？	−
37		〃	−	−	15.4	C	2.5	0.8	円	−	(ヨコハケか？)	？	−
38	Ⅰ	〃	−	−	15.0	C	1.6	0.8	円	−	タテハケ(後ヨコハケか？)〈6～7本〉	(タテハケ後？)ヨコハケ〈？〉	−
39	Ⅱ－dか？	〃	−	−	19.1	C	2.0	0.8	−	−	？	？	−
40	Ⅱ－dか？	〃	−	−	19.1	C	2.3	0.7	円	7.5×7.4	？	？	−
41	Ⅱ－d	〃	−	−	20.7	C	1.8	0.7	円	−	タテハケ〈7～8本〉	？	−
42	Ⅰ	〃	−	−	17.7	B	1.8	0.6	円	7.0×7.9	タテハケ後ヨコハケ〈4～5本〉	？	−
43	Ⅰ	〃	−	−	17.5	B	1.8	0.5	円	6.4×？	タテハケ後ヨコハケ〈？〉	？	−
44	Ⅰ	〃	−	−	16.1	B	2.4	0.9	円	−	タテハケ後ヨコハケ〈3～4本〉	(タテハケ後？)ヨコハケ〈？〉	−
45	Ⅰ	〃	−	−	16.2	C	1.8	0.6	円	−	タテハケ後ヨコハケ〈6本〉	(タテハケ後？)ヨコハケ〈？〉	−
46	Ⅰ	〃	−	−	(17.0)	B	2.1	0.8	円	−	ヨコハケ〈5本か？〉	？	−
47	Ⅰ	〃	−	−	16.1	D	1.6	0.6	円	−	タテハケ後ヨコハケ〈タテハケ7本、ヨコハケ3本〉	？	−
48	Ⅰ－a	〃	−	−	15.1	C	1.9	0.7	円	−	タテハケ後ヨコハケ〈タテハケ6~7本、ヨコハケ3本・3本〉	タテハケ後ヨコハケ〈タテハケ6~7本、ヨコハケ3~4本・3本〉	−
49	Ⅰ－b	〃	−	−	16.4	A	1.9	0.4	円	−	タテハケ後B種ヨコハケ〈5本〉最下部ヨコナデ	(タテハケ後？)ヨコハケ〈？〉	−
50		〃	−	−	15.3	C	1.8	0.8	円	−	(タテハケ後？)ヨコハケ〈？〉	？	−
51	Ⅰ	〃	−	−	16.4	A	2.0	0.6	円	−	タテハケ後B種ヨコハケ〈6本〉	(タテハケ後？)ヨコハケ〈6本〉	−
52	Ⅰ－d	〃	−	−	21.6	B	1.8	1.0	円	−	タテハケ後ヨコハケ〈4本〉	？	−
53		〃	−	−	18.1	C	1.9	0.9	−	−	？	？	−
54		〃	−	−	(18.3)	C	1.8	0.6	−	−	？	？	−

第6表　円筒埴輪観察表 ②

内面調整	底面		ヘラ記号	小孔	焼成	色調	胎土	備考	残存度	登録番号
	巻き	圧痕								
指圧　タテナデ					軟	黄　褐	やや粗　0.5cm以下の石粒を含む。		1／2	035-02
指圧		?			良	暗黄褐	粗　0.5cm以下の石粒を多く含む。		1／2	058-01
指圧	◎	○			良	暗黄褐	粗　0.5cm以下の石粒を多く含む。		2／5	057-01
指圧　タテナデ	◎	?			軟	黄　褐	0.3cm以下の石粒を含む。		2／5	039-02
指圧　タテナデ	◎				良	黄　褐	0.3cm以下の石粒を含む。		2／5	036-01
指圧　タテナデ	◎	○			良	黄　褐	0.5cm以下の石粒を含む。		1／2	036-02
指圧　第2タガの裏にヨコナデ	◎	○	)(		硬	黄　白	0.1cm以下の石粒を含む。		2／3	037-01
指圧		?		○	良	淡　橙	0.3cm以下の石粒を含む。		1／3	042-01
指圧	◎				軟	黄　白	密　0.5cm以下の石粒を含む。		1／2	060-01
指圧	◎	○			軟	淡　黄	密　0.3cm以下の石粒を含む。		2／5	046-01
指圧　タテナデ	◎	○			良	黄　褐	0.3cm以下の石粒を含む。		2／5	027-02
指圧		○			良	淡　橙	0.3cm以下の石粒を含む。		1／3	056-01
指圧	◎	○			良	淡　橙	密　1.5cm以下の石粒を含む。		1／2	052-01
指圧　タテナデ					軟	淡　橙	密　0.2cm以下の石粒を含む。		1／2	049-01
指圧　タテナデ　第1段下半ヨコナデ・ナナメナデ	◎	○	)(		良	黄　褐	0.4cm以下の石粒を含む。	ハケ1単位6条(約1.5cm)	1／2	044-01
指圧　タテナデ	◎				良	黄　褐	0.5cm以下の石粒を含む。		2／5	047-01
指圧　タテナデ	◎				良	黄　褐	やや粗　1cm以下の石粒を含む。		1／2	043-01
指圧　タテナデ	◎				良	淡　橙	0.4cm以下の石粒を含む。		2／5	034-01
指圧		○			良	淡　橙	0.3cm以下の石粒を含む。		2／5	056-02
第1段ヘラケズリ		○			良	黄　褐	0.5cm以下の石粒を含む。		2／5	045-01
タテナデ					良	淡　黄	0.2cm以下の石粒を含む。	第1段・第2段は最下部のヨコハケの方が粗い。	2／5	039-01
指圧　タテナデ	◎	○	)(		良	黄　褐	0.4cm以下の石粒を含む。		2／5	035-01
指圧	◎		)		軟	淡　黄	やや密　1cm以下の石粒を含む。		4／5	042-02
指圧　ナナメナデ	◎	○	)(		良	黄　褐	0.1cm以下の石粒を含む。		2／5	060-02
?		○		○	良	橙	0.4cm以下の石粒を含む。	底部自重のため大きく歪む。	1／3	055-01
第1段下半ヘラケズリ	◎	○			軟	淡　橙	密　0.2cm以下の石粒を含む。		1／4	063-02
第1段下半ヘラケズリ		○			軟	淡　橙	密　0.2cm以下の石粒を若干含む。		1／5	063-01

番号	分類	出土位置	法量			突帯			透孔		外面調整〈ハケメ本数〉		
			口径	器高	底径	形態	幅	高さ	形態	大きさ	第1段	第2段	第3段
55	Ⅱ－e	Ⅳ区埴輪列	－	－	(18.0)	－	－	－	－	－	タテハケ〈5～6本か？〉	－	－
56	Ⅰ	〃	－	－	(14.8)	A	1.9	0.5	－	－	タテハケ後ヨコハケ〈5本か？〉	(タテハケ後?)ヨコハケ?	－
57	Ⅱ－e	〃	－	－	(16.9)	－	－	－	－	－	タテハケ〈？〉	－	－
58	Ⅰ－a	Ⅱ・Ⅲ区墳丘及び周溝	26.1	－	－	A	1.4	0.8	円	－	－	タテハケ後ヨコハケ〈タテハケ7本・ヨコハケ5本〉	タテハケ後B種ヨコハケその後部分的にタテハケ〈タテハケ6～7本、ヨコハケ4本・8本〉「口縁付近に1条の沈線
59	Ⅰ－a	Ⅱ区周溝	(28.2)	－	－	C	2.0	0.8	円	－	－	タテハケ後ヨコハケ〈タテハケ6～7本、ヨコハケ4～5本〉	タテハケ後B種ヨコハケ〈タテハケ6～7本、ヨコハケ4本・5本〉
60	Ⅰ－a	Ⅱ区墳丘	(27.4)	37.4	(15.6)	A	2.0	0.7	円	6.7×6.0	タテハケ後ヨコハケ〈タテハケ7本、ヨコハケ5本〉	(タテハケ後) ヨコハケ〈ヨコハケ5本〉	タテハケ後ヨコハケ〈タテハケ7本、ヨコハケ5本〉「口縁付近に1条の沈線？
61	Ⅰ－b	Ⅱ区墳丘	28.0	35.8	(15.3)	A	1.9	0.6	円	？×6.6	タテハケ後B種ヨコハケ〈6～7本〉最下部ヨコナデ	タテハケ後B種ヨコハケ〈6～7本〉	――
62	Ⅰ－b	Ⅲ区	－	－	(15.5)	A	2.1	0.5	円	－	タテハケ後ヨコハケ〈5～6本か？〉	(タテハケ後?) ヨコハケ〈？〉	－
63	Ⅰ	Ⅲ・Ⅱ区墳丘及び周溝	－	－	(16.9)	A	2.3	0.7	円	－	タテハケ後B種ヨコハケ〈6～7本〉	――	－
64	Ⅰ	Ⅲ区墳丘	－	－	(18.5)	C	2.3	1.0	円	7.5×6.2	(タテハケ後？) ヨコハケ〈5本〉	――	――
65	Ⅰ	Ⅲ区周溝	－	－	17.2	B	2.2	0.6	円	－	タテハケ後ヨコハケ〈4本〉	――〈4～5本〉	－
66	Ⅰ	Ⅲ区	－	－	16.6	A	2.2	0.6	－	－	タテハケ後ヨコハケ〈6本〉	(タテハケ後?)B種ヨコハケ〈6～7本〉	－
67	Ⅰ	Ⅲ区周溝	－	－	(15.3)	A	1.9	0.8	円	－	タテハケ後ヨコハケ〈6本〉	――	?
68	Ⅰ	Ⅲ区墳丘	－	－	(15.1)	A	2.1	0.6	円	6.4×？	タテハケ後ヨコハケ〈6本〉	――	?
69	Ⅰ	Ⅱ区墳丘	(28.2)	40.0	17.0	B	2.2	0.7	円	8.2×7.3	?	?	ヨコハケ〈？〉口縁付近に1条の沈線？
70	Ⅰ	主体部（盗掘坑）	－	－	15.3	C	2.0	0.8	－	－	タテハケ後ヨコハケ〈タテハケ4～5本、ヨコハケ4本〉最下部ヨコナデ	?	－
71	Ⅰ	主体部（盗掘坑）	－	－	(13.8)	C	2.3	0.6	－	－	タテハケ後B種ヨコハケ〈7本〉最下部は板状の工具でオサエか?	?	－
72	Ⅰ	Ⅱ・Ⅲ区周溝	－	－	－	B	2.1	0.7	円	－	－	タテハケ後ヨコハケ〈7本〉	タテハケ後ヨコハケ その後部分的に細いナナメハケ 〈ヨコハケ7本、ナナメハケ8本〉
73	Ⅰ	Ⅱ区周溝	－	－	－	B	1.9	0.5	円	－	(タテハケ後)B種ヨコハケ〈7本〉	タテハケ後ヨコハケ〈7本〉	－
74	Ⅱ－c	Ⅱ・Ⅲ区周溝	(27.7)	42.8	(15.1)	C	2.8	0.8	円	(7.2)×9.7	?	タテハケ〈7～8本〉	――口縁付近に一条の沈線か?
75	Ⅱ－c	Ⅱ区墳丘	(26.1)	44.3	(16.0)	A	2.6	1.1	円	7.9×6.4	タテハケ〈5～6本〉	?	タテハケ〈5～6本〉口縁付近に一条の沈線か?
76	Ⅱ－b	Ⅲ区周溝	26.1	－	－	C	1.8	0.8	円	－	－	タテハケ〈6本〉	――
77	Ⅱ－e	Ⅲ区	－	－	－	－	－	－	－	－	タテハケ〈5本〉最下部ヨコナデ	－	－
78	Ⅱ－d	Ⅲ区	－	－	(18.0)	C	2.4	0.6	－	－	タテハケ〈6本〉	?	－
79	Ⅳ－b	Ⅰ区墳丘	－	－	19.4	C	1.9	1.0	－	－	?	?	－
80		Ⅲ区墳丘	－	－	(20.2)	B	2.1	0.8	円	－	?	?	?

第7表　円筒埴輪観察表 ③

内面調整	底面		ヘラ記号	小孔	焼成	色調	胎土	備考	残存度	登録番号
	巻き	圧痕								
指圧		○			軟	淡黄	やや密 0.1cm以下の石粒を含む。		1／6	081-02
指圧		○			良	黄褐	0.8cm以下の石粒を含む。		1／6	081-01
指圧	◎	○			良	黄褐	0.2cm以下の石粒を含む。		1／10	081-03
ヨコハケ〈5～7本〉			×		硬	青灰	0.5cm以下の石粒を含む。	第3段最下部のヨコハケの方が粗い。	2／5	029-01
ヨコハケ〈5～6本〉			×		良	灰白	0.2cm以下の石粒を含む。	第3段最下部のヨコハケの方が粗い。第2段透孔の位置は非対称か？	1／5	065-01
タテナデ 第3段ヨコハケ〈5～6本〉			×		硬	黄白	0.2cm以下の石粒を含む。		3／5	040-01
タテナデ口縁部ヨコハケ〈6~7本〉 第2突帯の裏にヨコナデ			)(		硬	黄白	0.2cm以下の石粒を含む。		1／2	032-01
指圧　タテナデ			)		良	淡黄	1cm以下の石粒を含む。		1／6	067-01
タテナデ　ナナメナデ	◎	○			良	灰白	0.2cm以下の石粒を含む。		1／3	047-02
指圧		○	)(		良	黄褐	0.2cm以下の石粒を含む。		2／5	069-01
指圧	◎	○	)(		良	灰白	0.1cm以下の石粒を含む。		2／5	059-01
指圧	◎				軟	黄褐	0.3cm以下の石粒を含む。		1／6	068-01
指圧			(		良	灰白	0.2cm以下の石粒を含む。	底部自重のため大きく歪む。	1／2	007-02
指圧		○			良	黄褐	0.1cm以下の石粒を含む。		2／5	050-01
指圧　ナナメナデ	◎	○	)(		軟	黄褐	0.5cm以下の石粒を含む。		4／5	031-01
指圧	◎				良	淡黄	0.7cm以下の石粒を含む。		1／3	007-01
指圧　第1段ヘラケズリ		○			硬	黄白	0.2cm以下の石粒を含む。		1／6	006-02
指圧					良	灰白	0.1cm以下の石粒を含む。	第1段ナナメハケ 1単位幅8.5㎜、7本	1／8	064-01
指圧　タテナデ					良	灰白	0.8cm以下の石粒を含む。		1／6	062-01
指圧	◎	○	)		軟	灰白	1cm以下の石粒を含む。		4／5	033-01
指圧					良	黄褐	0.4cm以下の石粒を含む。		1／2	030-01
指圧　タテナデ 口縁部ヨコハケ〈8本〉			)		良	灰白	0.2cm以下の石粒を含む。		2／5	051-01
指圧					良	黄白	0.1cm以下の石粒を含む。		1／20	053-02
指圧　タテナデ	◎	○			良	淡橙	密 0.3cm以下の石粒を若干含む。		1／5	049-02
指圧		○		○	軟	橙	0.3cm以下の石粒を多く含む。	底部自重のため大きく歪む。	1／3	009-02
指圧		○			良	淡橙	0.6cm以下の石粒を含む。		1／5	066-01

番号	出土位置	法量			突帯			透孔		外面調整〈ハケメ本数〉	内面調整	ヘラ記号	焼成	色調	胎土	備考	登録番号
		器高	口径	底径	形態	幅	高さ	形態	大きさ								
81	Ⅱ・Ⅲ区墳丘 Ⅱ区周溝西斜面	—	(51.6)	—	B	2.2	0.9	—	—	ナナメハケ後口縁付近ヨコハケ〈7~8本〉	ナナメハケ〈6~7本〉		良	淡橙	0.6cm以下の石粒を含む。		072-01
82	Ⅰ・Ⅱ区墳丘	—	(51.6)	—	A	2.5	0.8	—	—	ナナメハケ後ヨコハケ〈6~7本〉	ヨコハケ　ナナメハケ〈6~7本〉		硬	黄白	0.3cm以下の石粒を含む。		074-01
83	Ⅲ区周溝	—	(57.0)	—	C	2.4	1.0	—	—	ナナメハケ後ヨコハケ〈5~6本〉	ヨコハケ〈4本〉		良	赤褐	0.2cm以下の石粒を含む。		073-01
84	墳頂部 Ⅲ区周溝	—	—	—	C	2.8	1.0	—	—	タテハケ〈5~6本〉	?		良	淡橙	0.4cm以下の石粒を含む。		073-02
85	Ⅲ区	—	(45.8)	—	A C	2.3 2.2	0.8 0.7	円	—	?	指圧		軟	淡橙	密 0.4cm以下の石粒を含む。		075-01
86	Ⅰ・Ⅱ区	—	—	—	A	1.7	0.8	円	—	?	指圧		良	黄褐	0.1cm以下の石粒を含む。		072-02
87	Ⅰ・Ⅱ区墳丘	—	—	—	A	1.9	0.6	円	—	口縁部　ナナメハケ〈6~7本〉 体　部　タテハケ後B種ヨコハケ〈6~7本〉	口縁部　ヨコハケ　ナナメハケ 体　部　指圧	)(	硬	黄白	0.3cm以下の石粒を含む。		071-01
88	Ⅲ区墳丘	—	—	—	A	2.1	0.6	円	?×7.3	B種ヨコハケ〈5本〉	指圧	)(	良	黄褐	0.2cm以下の石粒を含む。		070-01

第8表　朝顔形埴輪観察表

番号	種類	出土位置	調整・技法の特徴	焼成	色調	胎土	備考	登録番号
89	家	Ⅱ区周溝ほか	破風板の妻側はタテハケ（6~7本/cm）で、壁の外面はタテハケ（8本/cm）。その他の部分は不明。妻の上部に透孔あり。基部の中央に半円形のくりこみがある。梁や柱を表現した沈線が施される。	良　土師質	淡　褐	密　0.5cm以下の石粒を含む。		082-01A ~082-01H
90	家	Ⅱ区周溝ほか	屋根の外面はナデで、壁の外面はタテハケ(7本/cm)。その他の部分は不明。妻の上部に透孔あり。壁面には開口部(妻2ヶ所、平1ヶ所)があり、裾にはくりこみ(妻1ヶ所、平2ヶ所）がある。妻には梁と柱を表現した突帯が貼りつけられる。	良　土師質	淡橙（屋根の2/3） 淡褐（そ　の　他）	密　0.5cm以下の石粒を含む。		083-01A ~083-01K
91	家・破風板	Ⅱ区周溝	風化のため調整不明。	良　土師質	淡　褐	密　0.2cm以下の石粒を含む。	89と胎土が似ている。	100-03
92	家・破風板の頂部	Ⅱ~Ⅲ区周溝	風化のため調整不明。	良　土師質	淡　褐	密　0.1cm以下の石粒を含む。	89と胎土が似ている。	099-03
93	家・破風板	Ⅱ~Ⅲ区周溝	風化のため調整不明。	良　土師質	淡　褐	密　0.5cm以下の石粒を含む。	89と胎土が似ている。	101-01
94	家・破風板	Ⅱ~Ⅲ区周溝	風化のため調整不明。	良　土師質	淡　褐	密　0.3cm以下の石粒を含む。	89と胎土が似ている。	100-01
95	家・屋根	Ⅱ区墳丘	風化のため調整不明。外面に沈線が施される。	良　土師質	黄　褐	密　1 cm以下の石粒を含む。	89と胎土が似ている。 96・97と同一個体か？	102-01
96	家・屋根（妻側の端部）	Ⅱ区墳丘	風化のため調整不明。破風板の接合痕あり。	良　土師質	黄　褐	密　0.3cm以下の石粒を含む。	89と胎土が似ている。 97の反対側か？	101-05

第9表　形象埴輪観察表①

番号	種類	出土位置	調整・技法の特徴	焼成	色調	胎土	備考	登録番号
97	家・屋根(妻側の端部)	Ⅱ区墳丘	風化のため調整不明。破風板の接合痕あり。	良 土師質	黄褐	密 0.2cm以下の石粒を含む。	89と胎土が似ている。	101-03
98	家・妻の上部	Ⅱ～Ⅲ区周溝	風化のため調整不明。透孔あり。	良 土師質	淡褐	密 0.1cm以下の石粒を含む。	89と胎土が似ている。	098-06
99	家・妻の上部	Ⅱ～Ⅲ区周溝	風化のため調整不明。透孔あり。外面に沈線が施される。	良 土師質	淡褐	密 0.3cm以下の石粒を含む。	89と胎土が似ている。	098-04
100	家・妻の上部か？	Ⅱ～Ⅲ区周溝	風化のため調整不明。	良 土師質	淡褐	密 0.1cm以下の石粒を含む。	89と胎土が似ている。	101-02
101	家・妻の上部か？	Ⅱ区周溝	風化のため調整不明。外面に沈線が施される。	良 土師質	淡褐	密 0.1cm以下の石粒を含む。	89と胎土が似ている。	098-03
102	家・妻の上部か？	Ⅱ～Ⅲ区周溝	風化のため調整不明。外面に沈線が2条施される。	良 土師質	淡褐	密 0.2cm以下の石粒を含む。	89と胎土が似ている。	098-05
103	家・妻の上部または基部	Ⅱ～Ⅲ区周溝	風化のため調整不明。透孔（またはくりこみ）がある。	良 土師質	淡褐	密 0.3cm以下の石粒を含む。	89と胎土が似ている。	099-02
104	家・壁のコーナー部分	Ⅲ区墳丘	風化のため調整不明。外面に柱を表現した沈線が施される。	良 土師質	淡褐	密 0.2cm以下の石粒を含む。	89と胎土が似ている。	099-01
105	家・裾の突帯	Ⅱ区埴輪列(6付近)	風化のため調整不明。突帯の下方にくりこみがある。	良 土師質	黄褐	密 0.2cm以下の石粒を含む。赤褐色の石粒を含む。	89と胎土が似ている。	098-01
106	家・突帯	Ⅱ区墳丘	風化のため調整不明。	良 土師質	黄褐	密 0.2cm以下の石粒を含む。	89と胎土が似ている。105と同一個体か？	098-02
107	家・破風板の下端部	Ⅱ～Ⅲ区周溝	風化のため調整不明。	良 土師質	淡橙	密 0.1cm以下の石粒を含む。	90と胎土が似ている。	100-02
108	家・壁のコーナー部分か？	Ⅱ～Ⅲ区周溝	外面はタテハケ（8条／cm）で、内面は不明。横方向に沈線が3条施される。	良 土師質	淡褐	密 0.2cm以下の石粒を含む。	90と胎土が似ている。	096-02
109	家・壁のコーナー部分か？	Ⅱ～Ⅲ区周溝	外面はタテハケ（8条／cm）で、内面は不明。縦方向に沈線が2条施される。	良 土師質	淡褐	密 0.2cm以下の石粒を含む。	90と胎土が似ている。	096-03
110	家・壁のコーナー部分	Ⅱ～Ⅲ区周溝	風化のため調整不明。	良 土師質	淡褐	密 0.1cm以下の石粒を含む。	90と胎土が似ている。	097-06
111	家・裾	Ⅱ～Ⅲ区周溝	風化のため調整不明。上方に開口部あり。突帯を貼りつける部分に沈線が施されている。	良 土師質	淡褐	密 赤褐色の石粒を含む。	90と胎土が似ている。	097-04
112	家・壁	Ⅱ～Ⅲ区周溝	風化のため調整不明。下方に開口部あり。	良 土師質	淡褐	密 0.1cm以下の石粒を含む。	90と胎土が似ている。	096-04
113	家・壁	Ⅱ～Ⅲ区周溝	外面はタテハケ（5～6本／cm）で、内面は不明。横方向に沈線が1条施される。	良 土師質	淡褐	密 0.1cm以下の石粒を含む。	90と胎土が似ている	097-03
114	家・壁	Ⅱ～Ⅲ区周溝	外面はタテハケ（8本／cm）で、内面は不明。横方向に沈線が1条施される。	良 土師質	淡褐	密 0.1cm以下の石粒を含む。	90と胎土が似ている。	097-01
115	家・壁か？	Ⅱ～Ⅲ区周溝	外面はヨコハケ（7～8本／cm）で、内面は不明。上端に突帯あり。	良 土師質	淡褐	密 0.1cm以下の石粒を含む。	90と胎土が似ている。	096-05
116	家・壁か？	Ⅱ～Ⅲ区周溝	風化のため調整不明。横方向に沈線が1条施される。	良 土師質	淡褐	密 0.1cm以下の石粒を含む。	90と胎土が似ている。	097-05

第10表　形象埴輪観察表 ②

番号	種類	出土位置	調整・技法の特徴	焼成	色調	胎土	備考	登録番号
117	家・突帯	Ⅱ～Ⅲ区周溝	風化のため調整不明。上端中央部に突帯の接合痕あり。	良 土師質	淡 褐	密 0.1cm以下の石粒を含む。	90と胎土が似ている。	096-01
118	家・突帯	Ⅱ～Ⅲ区周溝	風化のため調整不明。	良 土師質	淡 橙	密 0.1cm以下の石粒を含む。	90と胎土が似ている。	097-07
119	家・突帯	Ⅱ～Ⅲ区周溝	風化のため調整不明。	良 土師質	淡 褐	密 0.3cm以下の石粒を含む。	90と胎土が似ている。	097-02
120	冑	Ⅱ区墳丘および周溝	風化のため調整不明。正面と頂部に透孔あり。 沈線で冑の構造を表現している。	良 土師質	黄 褐	密 0.3cm以下の石粒を含む。		084-01A 084-01B
121	冑	Ⅰ～Ⅲ区墳丘	外面はタテハケ（5～6本／cm）で、内面はおそらくナデ。 沈線で冑の構造を表現している。円筒部の背面に透孔あり。	良 土師質	黄 褐	密 0.3cm以下の石粒を含む。		085-01A 085-01B
122	草摺か？	Ⅰ区墳丘	風化のため調整不明。横方向に沈線が2条施される。	良 土師質	黄 褐	密 0.2cm以下の石粒を含む。		094-03
123	草摺	墳丘	風化のため調整不明。横方向に沈線が2条施される。	良 土師質	黄 褐	密 0.1cm以下の石粒を含む。		094-05
124	草摺	Ⅰ区墳丘	風化のため調整不明。横方向に沈線が3条施される。	良 土師質	黄 褐	密 0.2cm以下の石粒を含む。		094-06
125	盾	Ⅰ・Ⅳ区墳丘裾	風化のため調整不明。沈線が施される。	良 土師質	黄 褐	密 0.3cm以下の石粒を含む。		093-01
126	靱	Ⅰ区墳丘	風化のため調整不明。縦および横方向に沈線が施される。	良 土師質	赤 橙	密 0.1cm以下の石粒を含む。		086-01
127	靱	Ⅱ区周溝	風化のため調整不明。縦および横方向に沈線が施される。	良 土師質	赤 橙	密 0.3cm以下の石粒を含む。		086-02
128	蓋・立ち飾り	墳丘	ナナメハケ（7本／cm）で、沈線が2条施される。	良 土師質	淡 橙	密 0.1cm以下の石粒を含む。		092-02
129	蓋・立ち飾り	Ⅰ区墳丘	風化のため調整不明。沈線が施される。	良 土師質	淡 黄	密 0.1cm以下の石粒を含む。		092-03
130	蓋・立ち飾り	墳丘	ナナメハケ（8本／cm）で、沈線が2条施される。	良 土師質	黄 褐	密 0.1cm以下の石粒を含む。		092-01
131	蓋・立ち飾り	Ⅰ区墳丘	ナナメハケ（6～7本／cm）で、沈線が施される。	良 土師質	黄 褐	密 0.1cm以下の石粒を含む。		087-02
132	蓋・軸部	Ⅰ区墳丘	風化のため調整不明。内面にシボリメがある。	良 土師質	淡 橙	密 0.1cm以下の石粒を含む。		093-03
133	蓋・笠部	Ⅰ・Ⅳ区墳丘	風化のため調整不明。	良 土師質	黄 褐	密		087-01
134	鶏	Ⅳ区墳丘裾	外面、内面ともナデ。鶏冠の接合痕あり。	硬 硬 質	淡 灰	密 0.1cm以下の石粒を含む。 白色の石粒が多い。		088-01
135	鶏	Ⅰ区墳丘	風化のため調整不明。	良 土師質	淡 橙	密 0.6cm以下の石粒を含む。 赤褐色の石粒を含む。		088-02
136	人物・腕	Ⅳ区墳丘裾	風化のため調整不明。	良 土師質	黄 褐	密 0.8cm以下の石粒を含む。		091-01

第11表　形象埴輪観察表 ③

番号	種類	出土位置	調整・技法の特徴	焼成	色調	胎土	備考	登録番号
137	人物か？	Ⅰ区墳丘	外面、内面ともナデ。斜方向に沈線が1条施される。	硬 硬 質	淡 褐	密 0.1cm以下の石粒を含む。	胴の可能性あり。	089-03
138	人物か？	主体部	外面、内面ともナデ。斜方向に沈線が2条施される。	硬 硬 質	淡 橙	密 0.2cm以下の石粒を含む。	胴の可能性あり。	090-04
139	人物・胴	Ⅱ区周溝	外面、内面ともナデ。沈線の上にとじ紐を表現した粘土片が貼りつけられる。	堅 須恵質	外 淡灰 内 淡褐	密 0.2cm以下の石粒を含む。		092-04
140	人物・胴	Ⅰ・Ⅳ区墳丘裾	外面は不明。内面はナデ。沈線の上にとじ紐を表現した粘土片が貼りつけられる。	硬 硬 質	淡 褐	密 0.3cm以下の石粒を含む。		089-04
141	人物・胴	Ⅰ区墳丘	外面、内面ともナデ。沈線の上にとじ紐を表現した粘土片が貼りつけられる。	堅 須恵質	外 橙 内 淡茶褐	密 0.2cm以下の石粒を含む。		090-02
142	人物・胴	Ⅲ区周溝	外面、内面ともナデ。突帯で帯を表現する。右下がりの沈線が施される。	堅 須恵質	淡 茶 褐	密 0.1cm以下の石粒を含む。		090-01
143	人物・胴	Ⅰ区墳丘裾	風化のため調整不明。突帯の接合痕が2条ある。	良 土師質	黄 褐	密 0.3cm以下の石粒を含む。		089-01
144	人物か？	墳丘	外面は不明。内面はヨコナデ。	硬 硬 質	淡 褐	密 0.1cm以下の石粒を含む。	裾の可能性あり。	092-05
145	人物か？	Ⅳ区墳丘	外面はヨコナデか？内面はナデ。横方向に沈線が3条施される。	堅 須恵質	淡 茶 褐	密 0.1cm以下の石粒を含む。	裾の可能性あり。	090-03
146	人物か？	主体部（盗掘坑）	外面、内面ともヨコナデ。横方向に沈線が1条施される。	堅 須恵質	淡 褐	密 0.1cm以下の石粒を含む。	裾の可能性あり。	093-02
147	不明	Ⅱ～Ⅲ区周溝	風化のため調整不明。	良 土師質	淡 褐	密 0.1cm以下の石粒を含む。		095-06
148	不明	Ⅰ・Ⅳ区墳丘	風化のため調整不明。	良 土師質	黄 褐	密 0.1cm以下の石粒を含む。		095-04
149	不明	墳丘	風化のため調整不明。横方向に沈線が2条施される。	良 土師質	黄 褐	密 0.2cm以下の石粒を含む。		094-02
150	不明（突帯）	主体部（盗掘坑）	風化のため調整不明。	良 土師質	赤 橙	密 0.2cm以下の石粒を含む。		095-05
151	不明	Ⅲ区墳丘	風化のため調整不明。	良 土師質	黄 褐	密 0.2cm以下の石粒を含む。		095-01
152	不明	Ⅱ区埴輪列 （12付近）	風化のため調整不明。	良 土師質	黄 褐	密 0.3cm以下の石粒を含む。	脚部か？	093-04
153	不明	Ⅲ区墳丘	風化のため調整不明。裏面に接合痕あり。	良 土師質	橙	密 0.1cm以下の石粒を含む。		091-02
154	不明	Ⅲ区埴輪列 （26～29付近）	風化のため調整不明。沈線が縦方向に2条、横方向に1条施される。	良 土師質	赤 橙	密 0.3cm以下の石粒を含む。		091-04
155	不明	Ⅱ区周溝	風化のため調整不明。突帯が貼りつけられている。	良 土師質	赤 橙	密 0.3cm以下の石粒を含む。		094-01

第12表　形象埴輪観察表 ④

番　号	器　種	出土位置	法　量（cm）		調整・技法の特徴	胎　　土	焼成	色　調	備　　考	残存度	登録番号
			口　径	器　高							
156	須恵器 杯蓋	Ⅲ区円筒埴輪 50～54付近	12.0	4.4	外面　回転ナデ後天井部回転ヘラケズリ。 内面　回転ナデ後天井部に一定方向のナデ。	密　0.2cm以下の石粒を含む。	堅	淡青灰	平坦な天井部。 157とセット。	4／5	077-06
157	〃　杯身	〃	10.6	4.7	外面　回転ナデ後底部回転ヘラケズリ。 内面　回転ナデ後底部に一定方向のナデ。	密　0.4cm以下の石粒を含む。	堅	淡青灰	平坦な底部。 底部に須恵器片溶着。	4／5	077-07
158	〃　杯蓋	〃	12.8	4.6	外面　回転ナデ後天井部回転ヘラケズリ。 内面　回転ナデ。	密　0.2cm以下の石粒を含む。	堅	淡青灰	159とセット。	4／5	077-03
159	〃　杯身	〃	11.0	4.8	外面　回転ナデ後底部回転ヘラケズリ。 内面　回転ナデ。	密　0.1cm以下の石粒を含む。	堅	淡青灰		4／5	077-04
160	〃　杯蓋	〃	12.3	5.0	外面　回転ナデ後天井部回転ヘラケズリ。 内面　回転ナデ。	密　0.2cm以下の石粒を含む。	堅	淡青灰	高く丸い天井部。 161とセット。	4／5	077-01
161	〃　杯身	〃	11.0	5.4	外面　回転ナデ後底部回転ヘラケズリ。 内面　回転ナデ。	密　0.2cm以下の石粒を含む。	堅	淡青灰	深く丸い底部。 底部外面に「×」のヘラ記号。	ほぼ完形	077-02
162	〃　杯蓋	〃	12.1	－	外面　回転ナデ後天井部回転ヘラケズリ。 内面　回転ナデ。	密　0.4cm以下の石粒を含む。	堅	淡青灰	口縁端部外面に工具の痕跡。	小片	080-04
163	〃　杯身	〃	9.7	－	外面　回転ナデ後底部回転ヘラケズリ。 内面　回転ナデ。	密　0.1cm以下の石粒を含む。	堅	淡青灰		1／5	077-11
164	〃　杯蓋	Ⅲ区墳丘・周溝	12.6	－	外面　回転ナデ後天井部回転ヘラケズリ。 内面　回転ナデ後天井部に一定方向のナデ。	密　0.1cm以下の石粒を含む。	良	青　灰	他の須恵器より焼成があまく、口縁端部や稜の表現もあまい。天井部外面の回転ヘラケズリの範囲が狭い。	2／3	077-08
165	〃　甕	Ⅱ区墳丘・周溝	11.5	－	口縁部　回転ナデ後外面に6条の波状文。 体　部　回転ナデ。	密　0.2cm以下の石粒を含む。	堅	淡青灰	体部中央に凹線がめぐる。	口縁部 1／2 体　部 1／3	077-05 077-09
166	〃　甕	Ⅱ区周溝	24.0	36.1	口 縁 部　回転ナデ。 体部外面　タタキ後ヨコナデ。 体部内面　タタキ後スリケシナデ。	密　0.6cm以下の石粒を含む。	堅	淡青灰	口縁部外面に6条の沈線。内面はタタキ痕を丁寧にナデ消している。	口縁部 1／2 体　部 1／2	078-01 079-01
170	山茶椀	Ⅲ区周溝	（底径6.5）	－	ロクロナデ。	密　0.1cm以下の石粒を含む。	良	淡　灰		底部小片	080-02
171	陶器　甕	Ⅱ区墳丘・周溝	－	－	ロクロナデ。	密　0.1cm以下の石粒を含む。	堅	暗赤灰	N字状口縁。常滑。	口縁部小片	080-01

第13表　土器観察表

Ⅶ. 門脇北古墳出土埴輪の蛍光X線分析

奈良教育大学

三　辻　利　一

埴輪を考古学研究に役立てるためには、その形式、製作技法による分類のみならず、胎土分析からの情報も必要である。胎土の違いは素材粘土の違いを表わす。そして、素材粘土の違いは埴輪を製作した場所の違いを示す可能性がある。

目下のところ、埴輪胎土と形式、製作技法、焼成方法、さらには、古墳での配置との関係があるのか、ないのかという観点から基礎データが集積されている。これらの基礎データの上に将来、埴輪の伝播・流通、さらには、流通を通して豪族間の関係などについて考察を進めようというのである。

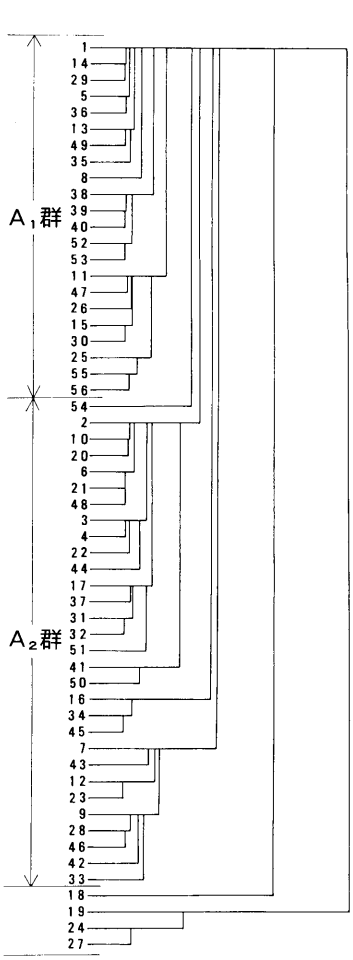
本報告では門脇北古墳出土埴輪の蛍光X線分析の結果について報告する。

埴輪試料小片は三重県教育委員会から提供された。試料は100メッシュ以下の粉末にしてから、約15トンの圧力をかけてプレスし、内径20mm、厚さ5mmの錠剤試料を作成して蛍光X線分析を行った。理学電機製の波長分散型の全自動式分析装置が使用された。

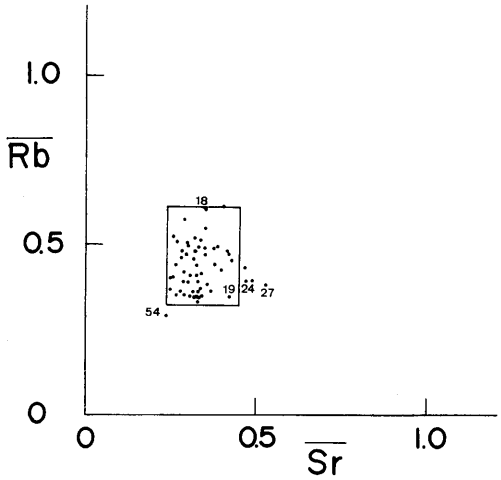
全分析値は表1にまとめられているが、すべて、同時に測定された岩石標準試料JG－1による標準化値で表示されている。

はじめに、クラスター分析により埴輪の分類を試みた結果を第28図に示す。左側に縦列に並ぶ数字は試料番号ではなく、試料のコンピューターへの入力番号である。横軸にはK、Ca、Rb、Srの4因子を使い、群平均法で計算した類似度を示す。クラスター分析では類似度の違いを利用して、分類するのであるが、どこで区切るかについては任意性がある。そのため、任意に区切って分類したあと、何らかの形で、その保証をとっておく方がよい。筆者はそのために、しばしば、Rb－Sr分布図などの分布図を使用する。

第28図の樹状図でどこの谷間で区切るかである。No.1～No.33までを一括して区切り、No.18、19、24、27を異質なものとして抜き出すこともできるが、こ

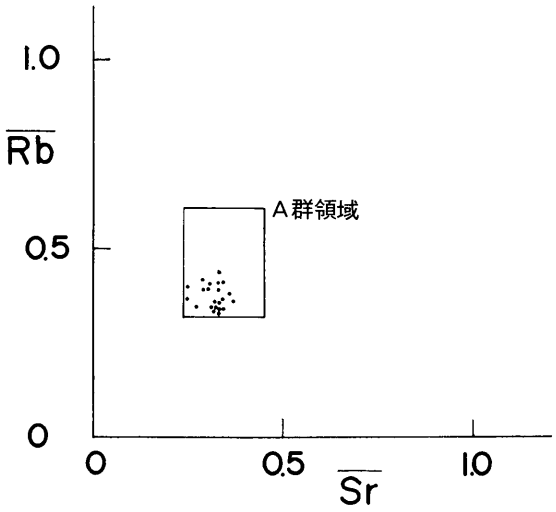


第28図　樹状図（K, Ca, Rb, Sr 因子）

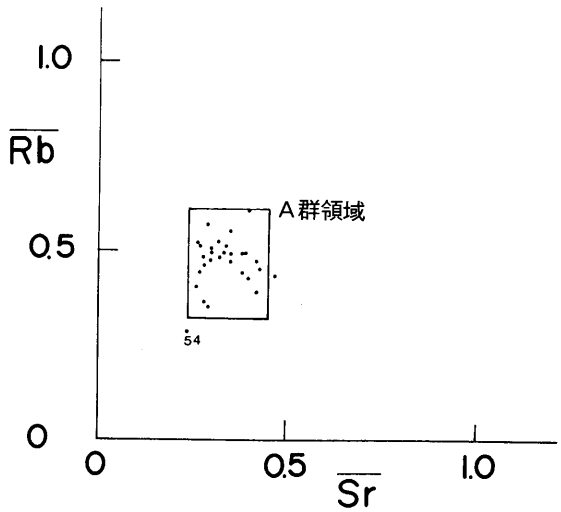


第29図　全試料のRb－Sr 分布図

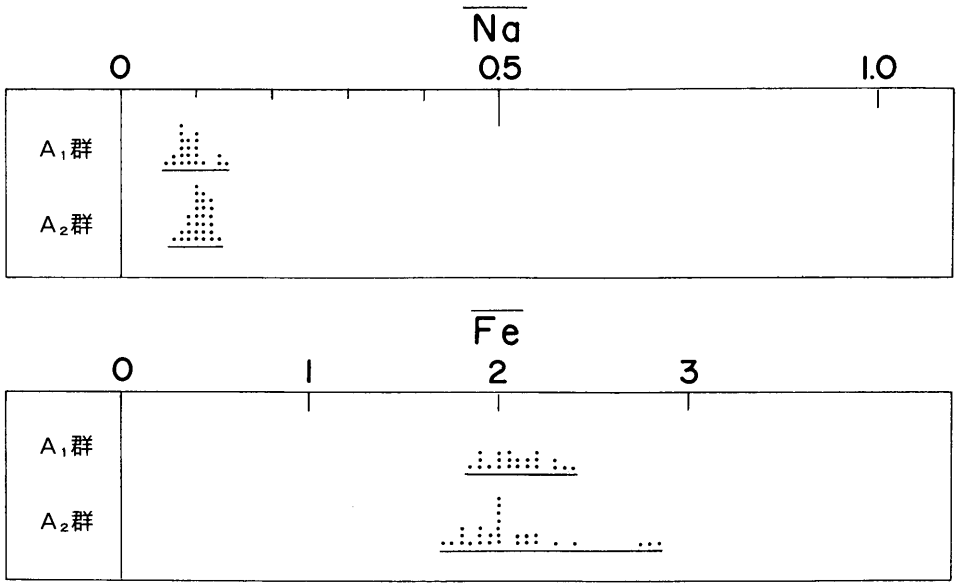
こでは、No.1～No.56をA₁群、No.2～No.33をA₂群と分類してみた。全試料のRb－Sr分布図を第29図に示す。そして、ほとんどの試料を包含するようにしてA群領域を描いてみた。この領域は定性的な領域を示すにすぎないが、領域を比較する上には役に立つ。なお、A群領域の周辺に分布したNo.18、19、24、27は図28の樹状図でA群に分類されなかったものであり、また、No.54は結び付ける枝がなく孤立した試料である。そこで、第28図でA1群と分類された試料のRb－Sr分布図を第30図に示す。A群領域の中で下方に偏在して分布している。他方、A₂群と分類された試料のRb－Sr分布図を第31図に示す。ほぼ、A群領域全体に広がって分布しており、A₁群と差別してもよいかどうかはRb－Sr分布図だけでは判断しがたい。そこで、Na因子とFe因子を使い、A₁群とA₂群に明確な差異がでるかどうかをみてみた。比較の結果は第32図に示されている。Na、Fe因子とも、A₁群とA₂群に明確な差異はない。この結果、第28図の樹状図において、A₁群、A₂群と細分化することは少し無理であり、むしろ、A₁群、A₂群を一括してA群としておく方が無難であると判断された。こうして、門脇北古墳出土埴輪はそのほとんどが同質の胎土をもっていることが明らかになった。つまり、これらの埴輪は一ケ所で集中して焼成されたものである可能性が高い。しかし、それに対応する窯跡は発見されていない。



第30図　A₁群のRb－Sr分布図



第31図　A₂群のRb－Sr分布図



第32図　Na、Fe因子によるA₁群とA₂群の比較

入力番号	試料番号	器　種	質	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	分類結果	備　　考
1	1	円筒埴輪	土師質	0.303	0.155	2.19	0.392	0.325	0.091	A 1	報告書遺物№1
2	2	〃	〃	0.320	0.157	1.98	0.481	0.320	0.073	A 2	2
3	3	〃	〃	0.383	0.121	1.90	0.502	0.301	0.104	A 2	3
4	4	〃	〃	0.386	0.118	1.70	0.524	0.322	0.116	A 2	4
5	5	〃	〃	0.315	0.155	2.04	0.412	0.341	0.089	A 1	5
6	6	〃	〃	0.360	0.130	1.90	0.488	0.113	0.113	A 2	6
7	7	〃	〃	0.343	0.212	1.98	0.430	0.472	0.133	A 2	7
8	9	〃	〃	0.347	0.173	2.30	0.375	0.360	0.098	A 1	9
9	10	〃	〃	0.334	0.165	2.01	0.436	0.383	0.102	A 2	10
10	11	〃	〃	0.343	0.151	2.78	0.495	0.301	0.088	A 2	11
11	12	〃	硬　質	0.288	0.130	2.17	0.397	0.248	0.065	A 1	12
12	13	〃	土師質	0.350	0.221	2.18	0.493	0.378	0.120	A 2	13
13	14	〃	硬　質	0.328	0.138	1.99	0.418	0.290	0.087	A 1	14
14	15	〃	土師質	0.311	0.152	2.11	0.372	0.340	0.082	A 1	15
15	16	〃	〃	0.289	0.123	2.11	0.389	0.294	0.077	A 1	16
16	17	〃	〃	0.409	0.077	2.21	0.400	0.258	0.095	A 2	17
17	18	〃	〃	0.357	0.112	1.91	0.463	0.284	0.092	A 2	18
18	18	〃	〃	0.427	0.142	1.75	0.597	0.346	0.141		19
19	20	〃	硬　質	0.261	0.216	2.31	0.341	0.422	0.093		20
20	21	〃	土師質	0.332	0.128	1.96	0.469	0.298	0.082	A 2	21
21	22	〃	〃	0.356	0.141	1.82	0.491	0.353	0.112	A 2	22
22	23	〃	〃	0.383	0.124	1.69	0.461	0.317	0.101		23
23	24	〃	〃	0.363	0.217	2.10	0.494	0.385	0.120	A 2	24
24	25	〃	〃	0.297	0.281	2.22	0.386	0.471	0.124		25
25	26	〃	〃	0.252	0.149	2.22	0.344	0.324	0.074	A 1	26
26	27	〃	〃	0.264	0.126	2.20	0.349	0.268	0.064	A 1	27
27	28	〃	〃	0.304	0.290	1.96	0.380	0.526	0.127		28
28	29	〃	〃	0.310	0.184	2.01	0.470	0.416	0.111	A 2	29
29	30	〃	〃	0.310	0.155	2.07	0.361	0.331	0.089	A 1	30
30	31	〃	〃	0.262	0.129	2.01	0.389	0.296	0.074	A 1	31
31	32	〃	〃	0.327	0.108	1.87	0.508	0.271	0.101	A 2	32
32	33	〃	〃	0.333	0.105	1.78	0.483	0.278	0.102	A 2	33
33	34	〃	〃	0.300	0.207	2.20	0.466	0.352	0.083	A 2	34
34	35	〃	硬　質	0.400	0.105	2.84	0.350	0.289	0.101	A 2	35
35	36	〃	土師質	0.342	0.143	1.89	0.440	0.326	0.101	A 1	36
36	37	〃	〃	0.329	0.148	1.94	0.413	0.327	0.102	A 1	37
37	38	〃	〃	0.345	0.084	1.99	0.439	0.266	0.118	A 2	38
38	39	〃	〃	0.376	0.106	1.88	0.361	0.317	0.127	A 1	39
39	40	〃	〃	0.364	0.112	1.92	0.337	0.323	0.129	A 1	40
40	41	〃	〃	0.373	0.122	1.90	0.341	0.325	0.138	A 1	41
41	42	〃	〃	0.327	0.134	2.03	0.614	0.398	0.111	A 2	42
42	43	〃	〃	0.298	0.171	2.31	0.315	0.421	0.095	A 2	43
43	44	〃	〃	0.373	0.161	1.73	0.454	0.432	0.121	A 2	44
44	45	〃	〃	0.373	0.107	1.79	0.569	0.288	0.116	A 2	45
45	46	〃	〃	0.410	0.103	2.81	0.363	0.277	0.110	A 2	46
46	47	〃	〃	0.312	0.185	2.15	0.428	0.398	0.105	A 2	47
47	48	〃	〃	0.277	0.138	2.39	0.367	0.252	0.080	A 1	48
48	49	〃	〃	0.350	0.138	1.98	0.513	0.337	0.100	A 1	49
49	50	〃	〃	0.324	0.132	2.04	0.407	0.305	0.098	A 1	50
50	51	〃	〃	0.319	0.151	2.00	0.547	0.354	0.109	A 2	51
51	52	〃	〃	0.375	0.067	2.12	0.517	0.262	0.100	A 2	52
52	53	〃	〃	0.341	0.117	2.00	0.328	0.332	0.111	A 1	53
53	54	〃	〃	0.339	0.115	2.15	0.338	0.322	0.102	A 1	54
54	55	〃	〃	0.307	0.082	2.42	0.285	0.237	0.087	A 2	55
55	56	〃	〃	0.282	0.150	2.36	0.341	0.337	0.080	A 1	56
56	57	〃	〃	0.294	0.162	2.32	0.361	0.366	0.083	A 1	57

第14表　門脇北古墳出土埴輪胎土分析値一覧表

PL1

調査前全景（東から）

調査後全景（上空から）

調査後全景（東から）

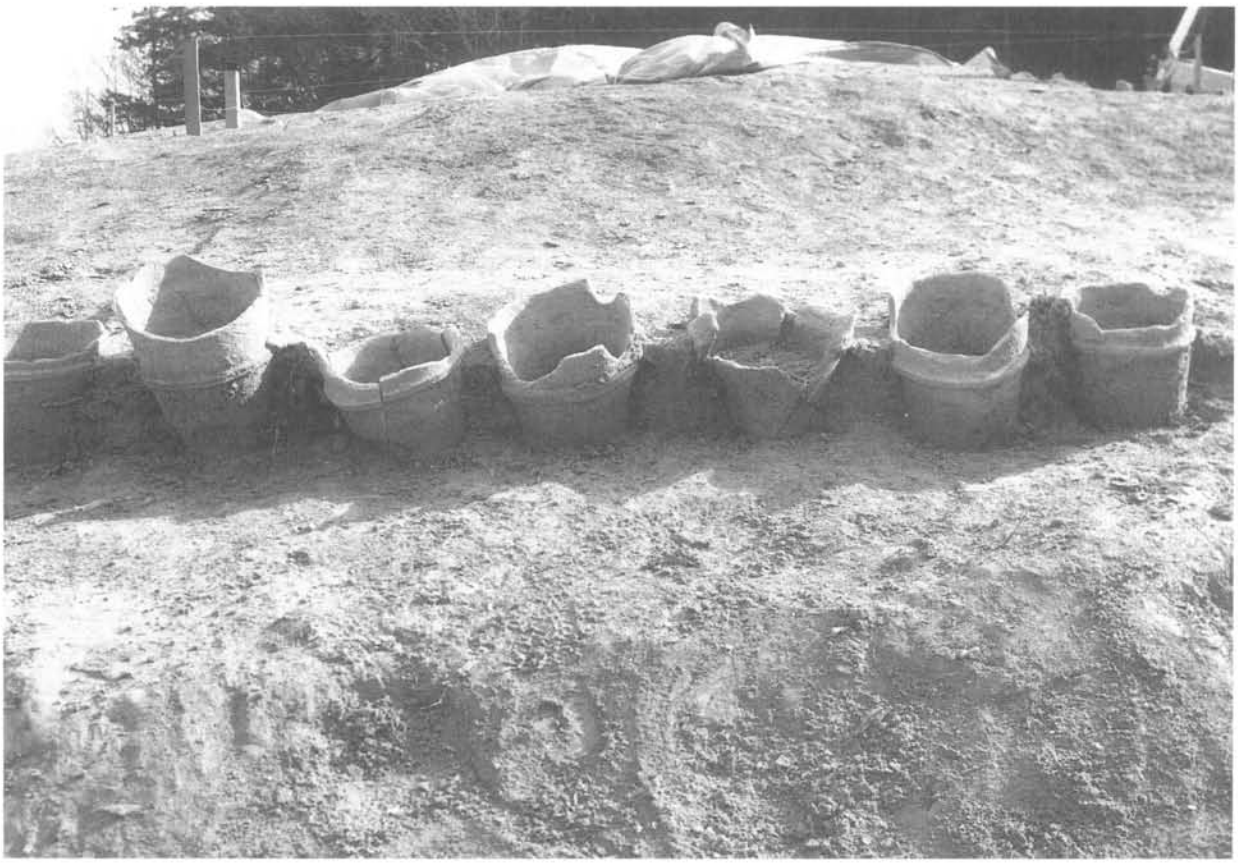
調査後全景（西から）

PL3

周溝（北から）

周溝と埴輪列（南西から）

埴輪埋置状況〈1〉（東から）



埴輪埋置状況〈1～7〉（北から）

埴輪列須恵器出土状況（東から）

主体部（南から）

11

19

58

60

14

52

17

円筒埴輪

76

35

13

79

41

75

74

円筒埴輪

家形埴輪（89）

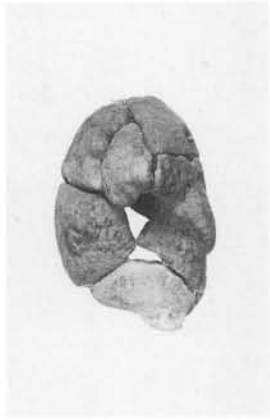
家形埴輪（90）

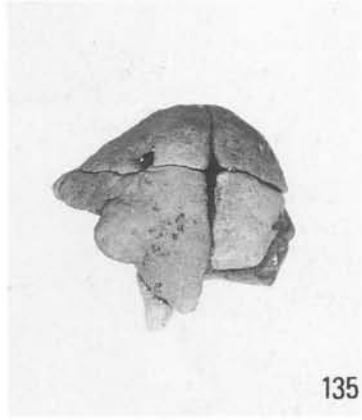
99

95

101

134




135

136

137

138

140

139

141

142

143

形象埴輪（95・99・101：家、134・135：鶏、136～143：人物）

器財埴輪（120～124：甲冑、125：盾、127：靫、131：蓋）

152

153

154

155

156

158

160

157

159

161

164

165

172

形象埴輪、須恵器、石鏃

平成5(1993)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年2月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告115－2

一般国道23号中勢道路（9工区）道路建設事業に伴う

門脇北古墳発掘調査報告

1993・3

編　集
発　行　三重県埋蔵文化財センター

印　刷　東海印刷株式会社